

淀川水系清滝川渓流保全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

上 清 滝 遺 跡 ・ 清 滝 街 道

発 挖 調 査 報 告 書



平成29（2017）年3月

四條畷市教育委員会

卷頭写真図版 1



1. KKT1993-1 調査地区 遠景（北東から）



2. KKT1993-1 調査地区 遠景（北西から）

卷頭写真図版 2



1. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 全景（南東から）



2. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 和鏡出土状況

卷頭写真図版 3



1. KKT1998-2 東側地区 谷状遺構Cの東肩部 全景（南西から）



2. KKT1998-2 西側地区 谷状遺構Aの東肩部 全景（南西から）

卷頭写真図版 4



1. KKT1999-1 東側地区 大溝1 遠景（北西から）



2. KKT1999-1 西側地区 遠景（北東から）

卷頭写真図版 5



1. KKT2007-1 第1街道面 旧街道 遠景（北西から）



2. KKT2007-1 第3街道面 旧街道・石垣 全景（北西から）

卷頭写真図版 6



1. KKT2014-1 2・3地区 第1遺構面 遠景（南西から）



2. KKT2014-1 2・3地区 第2遺構面 道路11 全景（北西から）

卷頭写真図版 7



1. KKT1993 - 1 出土陶磁器



2. KKT1993 - 1 上の池出土石仏

卷頭写真図版 8



1. KKT1998 - 1 谷状遺構B出土遺物集合



2. KKT1998 - 1 谷状遺構B出土銅鏡

卷頭写真図版 9



1. KKT1998-2 出土陶磁器



2. KKT1999-1 出土陶器蓋

卷頭写真図版 10



1. KKT2007-1 出土遺物集合



2. KKT2014-1 出土陶磁器

卷頭写真図版 11



1. KKT2014-1 出土布留式土器



2. KKT1993-1・1998-2・2014-1 出土縄文時代遺物集合

卷頭写真図版 12



1. KKT1998-2・2014-1 出土銅錢（表）



2. KKT1998-2・2014-1 出土銅錢（裏）

淀川水系清滝川渓流保全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

上 清 滝 遺 跡 ・ 清 滝 街 道

発 掘 調 査 報 告 書



平成29（2017）年3月

四條畷市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成5（1993）年度から平成26（2014）年度にかけて実施した上清滝遺跡・清滝街道での淀川水系清滝川渓流保全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、四條畷市文化財調査報告の第53集である。
2. 発掘調査は、大阪府枚方土木事務所からの依頼を受け、四條畷市教育委員会（担当課：平成5～9年度……歴史民俗資料館、平成10～12年度……生涯学習推進室、平成13～15年度……生涯学習課、平成16～25年度……社会教育課、平成26年度以降……地域教育課）が実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3. 発掘調査は、1998-1次および1999-1次調査地区を、四條畷市教育委員会 主任 野島 稔が、2014-1次を除くその他の調査地区を野島（平成19年度～23年度主幹）の指導のもと、技術職員（平成18年度～23年度主査）村上 始が、2014-1次調査地区を課長代理 村上・事務職員 実盛良彦が担当者として実施した（肩書はいずれも当時）。
4. 発掘調査の実施にあたっては、大阪府枚方土木事務所・地元自治会の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国语大学教授）、阿部功氏（神戸市教育委員会）、河内一浩氏（羽曳野市立人権文化センター）、野島 稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館長）。（順不同）
6. 本書作成用の出土遺物の整理（遺物の洗浄・注記・分類・接合・復元・彩色・収納等）・写真整理（写真的分類・注記・収納等）・図面作成（遺構図のトレース・版組、遺物の実測・トレース・版組）などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会地域教育課上席主幹兼主任 村上 始・事務職員 実盛良彦、臨時職員 田伏美智代が行なった。
7. 本書は、村上・實盛が分担して執筆・編集を行なった。文責者は各文末に記載している。
8. 発掘調査の出土遺物および記録写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書中のレベルは、T. P.（東京湾平均海面）を用いた。なお、調査時には2007-1次調査のみO. P.（大阪湾最低潮位）を用いており、T. P.=O. P.-1.300mの式で値を変換し本書に掲載した。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 2007-1次、2014-1次調査の平面図表示方位は磁北である。第2図および1993-1次、1998-1次、1998-2次、1999-1次調査の平面図表示方位は調査当標準であった（旧）日本測地系の国土座標（第VI座標系）に基づく座標北である。
4. 須恵器の編年については、田辺昭三のもの（田辺1981）と中村浩のもの（中村2001）を併記した。中世土器の編年は、中世土器研究会のもの（中世土器研究会編1995）に依拠した。

本文目次

卷頭写真図版

例 言・凡 例

目 次

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	8
第1節	遺跡の位置	
第2節	周辺の歴史的環境	
第2章	調査の経過	11
第1節	既往の調査	
第2節	調査の経過	
第3章	上清澗遺跡（KKT1993-1）調査の成果	15
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第4章	上清澗遺跡（KKT1998-1）調査の成果	39
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第5章	上清澗遺跡（KKT1998-2）調査の成果	45
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第6章	上清澗遺跡（KKT1999-1）調査の成果	53
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第7章	上清澗遺跡（KKT2007-1）調査の成果	63
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第8章	上清澗遺跡・清澗街道（KKT2014-1）調査の成果	69
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第9章	調査のまとめ	82
第1節	調査のまとめ	
第2節	清澗街道について	
参 考 文 献		86
写 真 図 版		
報 告 書 抄 錄		

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	9
第2図	調査地区全体図	13~14
第3図	調査地区東半第1遺構面平面図 (KKT1993-1)	17~18
第4図	調査地区西半第1遺構面平面図 (KKT1993-1)	19~20
第5図	調査地区東半地山面平面図 (KKT1993-1)	21~22
第6図	調査地区西半地山面平面図 (KKT1993-1)	23~24
第7図	調査地区断面図 (KKT1993-1) (1)	25~26
第8図	調査地区断面図 (KKT1993-1) (2)	27~28
第9図	調査地区断面図 (KKT1993-1) (3)	29
第10図	出土遺物 (包含層・KKT1993-1) (1)	32
第11図	出土遺物 (包含層・KKT1993-1) (2)	33
第12図	出土遺物 (包含層・KKT1993-1) (3)	35
第13図	出土遺物 (旧河川B・KKT1993-1)	36
第14図	出土遺物 (谷・池・KKT1993-1)	37
第15図	出土遺物 (池・KKT1993-1)	38
第16図	調査地区平面図・断面図 (KKT1998-1)	40
第17図	出土遺物 (KKT1998-1) (1)	42
第18図	出土遺物 (KKT1998-1) (2)	43
第19図	調査地区平面図・断面図 (KKT1998-2)	46
第20図	KKT1993-1・1998-1・2調査地区合成平面図	47
第21図	出土遺物 (KKT1998-2) (1)	49
第22図	出土遺物 (KKT1998-2) (2)	50
第23図	出土遺物 (KKT1998-2) (3)	51
第24図	調査地区平面図 (KKT1999-1)	55~56
第25図	調査地区断面図 (KKT1999-1)	57~58
第26図	出土遺物 (KKT1999-1)	61
第27図	調査地区平面図・断面図・石垣立面図 (KKT2007-1)	65~66
第28図	出土遺物 (KKT2007-1)	68
第29図	調査地区第1遺構面平面図 (KKT2014-1)	71~72
第30図	調査地区第2遺構面平面図 (KKT2014-1)	73~74
第31図	調査地区断面図 (KKT2014-1)	75~76
第32図	出土遺物 (KKT2014-1) (1)	79
第33図	出土遺物 (KKT2014-1) (2)	80

卷頭写真図版目次

- 卷頭写真図版 1 1. KKT1993-1 調査地区 遠景（北東から）
2. KKT1993-1 調査地区 遠景（北西から）
- 卷頭写真図版 2 1. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 全景（南東から）
2. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 和鏡出土状況
- 卷頭写真図版 3 1. KKT1998-2 東側地区 谷状遺構Cの東肩部 全景（南西から）
2. KKT1998-2 西側地区 谷状遺構Aの東肩部 全景（南西から）
- 卷頭写真図版 4 1. KKT1999-1 東側地区 大溝1 遠景（北西から）
2. KKT1999-1 西側地区 遠景（北東から）
- 卷頭写真図版 5 1. KKT2007-1 第1街道面 旧街道 遠景（北西から）
2. KKT2007-1 第3街道面 旧街道・石垣 全景（北西から）
- 卷頭写真図版 6 1. KKT2014-1 2・3地区 第1遺構面 遠景（南西から）
2. KKT2014-1 2・3地区 第2遺構面 道路11 全景（北西から）
- 卷頭写真図版 7 1. KKT1993-1 出土陶磁器
2. KKT1993-1 上の池出土石仏
- 卷頭写真図版 8 1. KKT1998-1 谷状遺構B出土遺物集合
2. KKT1998-1 谷状遺構B出土銅鏡
- 卷頭写真図版 9 1. KKT1998-2 出土陶磁器
2. KKT1999-1 出土陶器蓋
- 卷頭写真図版10 1. KKT2007-1 出土遺物集合
2. KKT2014-1 出土陶磁器
- 卷頭写真図版11 1. KKT2014-1 出土布留式土器
2. KKT1993-1・1998-2・2014-1 出土縄文時代遺物集合
- 卷頭写真図版12 1. KKT1998-2・2014-1 出土銅鏡（表）
2. KKT1998-2・2014-1 出土銅鏡（裏）

写 真 図 版 目 次

- 写真図版1 1. KKT1993-1 旧街道 全景（東から）
2. KKT1993-1 旧河川A左岸【西端】 遠景（北東から）
- 写真図版2 1. KKT1993-1 旧河川A左岸【中央】 遠景（北から）
2. KKT1993-1 旧河川B左岸・谷状遺構A 遠景（北東から）
- 写真図版3 1. KKT1993-1 上の池の南側岸 遠景（北西から）
2. KKT1993-1 発掘調査で出土した石造物
- 写真図版4 1. KKT1998-1 第1遺構面 旧街道 全景（北西から）
2. KKT1998-1 第1遺構面 旧街道 石敷き（南東から）
- 写真図版5 1. KKT1998-1 第1遺構面 石組みと土管の導水路 全景（北西から）
2. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 石仏出土状況（北西から）
- 写真図版6 1. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 和鏡出土状況（北東から）
2. KKT1998-1 発掘調査で出土した石造物
- 写真図版7 1. KKT1998-2 上層旧街道 全景（北西から）
2. KKT1998-2 西側地区 谷状遺構A東肩部 全景（南西から）
- 写真図版8 1. KKT1998-2 西側地区 谷状遺構C 全景（北東から）
2. KKT1998-2 東側地区 谷状遺構Cの東肩部 全景（南西から）
- 写真図版9 1. KKT1999-1 発掘調査以前 遠景（西から・1999年1月）
2. KKT1999-1 東側地区 旧街道の石列 全景（北西から）
- 写真図版10 1. KKT1999-1 東側地区 旧河川と大溝1 遠景（南東から）
2. KKT1999-1 東側地区 旧河川内の集水施設 全景（南東から）
- 写真図版11 1. KKT1999-1 東側地区 旧河川内最下層の石列 全景（南西から）
2. KKT1999-1 東側地区 大溝1内のL字状石組 全景（北西から）
- 写真図版12 1. KKT1999-1 東側地区 石組み井戸 全景（南西から）
2. KKT1999-1 西側地区 旧河川 全景（西から）
- 写真図版13 1. KKT2007-1 第1街道面 旧街道・石垣 全景（南西から）
2. KKT2007-1 第3街道面 旧街道・石垣 全景（南西から）
- 写真図版14 1. KKT2014-1 2・3地区 第1遺構面 道路6 全景（南西から）
2. KKT2014-1 3地区 第2遺構面 道路11 全景（南東から）
- 写真図版15 1. KKT2014-1 4地区 第1遺構面 道路6 全景（北西から）
2. KKT2014-1 4地区 第2遺構面 道路11 全景（北東から）
- 写真図版16 1. KKT2014-1 4地区 第2遺構面 水路9・道路11・土坑12 遠景（南東から）
2. KKT2014-1 4地区 第2遺構面 土坑12 遺物出土状況（南西から）
- 写真図版17 1. KKT2014-1 1地区 沢1 全景（北西から）
2. KKT2014-1 調査地区外 清瀧川右岸沿いの街道（西から）
- 写真図版18 1. KKT1993-1 出土縄文土器（包含層）
2. KKT1993-1 出土遺物（包含層）
- 写真図版19 1. KKT1993-1 出土遺物（包含層）
2. KKT1993-1 出土遺物（包含層）

- 写真図版20 1. KKT1993-1 出土遺物（旧河川B）
2. KKT1993-1 出土遺物（旧河川B）
- 写真図版21 1. KKT1993-1 出土遺物（谷状遺構A、池）
2. KKT1993-1 出土石仏（池）
- 写真図版22 1. KKT1998-1 出土遺物（第1遺構面）
2. KKT1998-1 出土遺物（谷状遺構B）
- 写真図版23 1. KKT1998-1 出土銅鏡（谷状遺構B）
2. KKT1998-1 出土銅鏡断面見通し（谷状遺構B）
- 写真図版24 1. KKT1998-2 出土遺物（包含層）
2. KKT1998-2 出土遺物（谷状遺構A）
- 写真図版25 1. KKT1998-2 出土遺物（谷状遺構A）
2. KKT1998-2 出土遺物（谷状遺構C）
- 写真図版26 1. KKT1999-1 出土遺物（包含層・大溝1）
2. KKT1999-1 出土遺物（旧河川）
- 写真図版27 1. KKT2007-1 出土鉄鎌（包含層）
2. KKT2007-1 出土遺物（第1街道面）
- 写真図版28 1. KKT2014-1 出土遺物（縄文時代等）
2. KKT2014-1 出土遺物（包含層）
- 写真図版29 1. KKT2014-1 出土遺物（包含層）
2. KKT2014-1 出土遺物（包含層）
- 写真図版30 1. KKT2014-1 出土遺物（街道面・沢）
2. KKT2014-1 出土遺物（土坑12）

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。

上清滝遺跡は、飯盛山系の西側の山腹部に位置する遺跡である。清滝街道は、大和と河内を結ぶ街道の一つで、それらのうち最も北側のルートにあたる。市内の蘿屋を起点とし、清滝川に沿って峠を越え、田原盆地を抜けて大和へと向かうルートである。

第2節 周辺の歴史的環境

上清滝遺跡・清滝街道の周辺の遺跡としては、逢阪遺跡・長谷遺跡・飯盛城跡・飯盛山城砦跡などあげられる（第1図）。

逢阪遺跡 逢阪遺跡は、発掘調査を行っていないため詳しいことは不明だが、中世の集落跡である。河内と大和を結ぶ清滝街道の「大いなる坂道」になる逢阪は、旅人が留まる「逢阪千軒」といわれ、栄えたとされている。逢阪遺跡の範囲内には、大阪府指定有形文化財の逢阪五輪塔・清滝街道の分岐する地点にある地蔵道標などの石造物がある（山口編1972等）。

逢阪五輪塔には、「大坂一結衆、延元元丙子三月日、造立之」と刻まれている。高さ180cmで、花崗岩製である。延元元年は南北朝時代の南朝の年号で、西暦1336年にあたり、この時期この地域が南朝の勢力下にあったことが推察される。

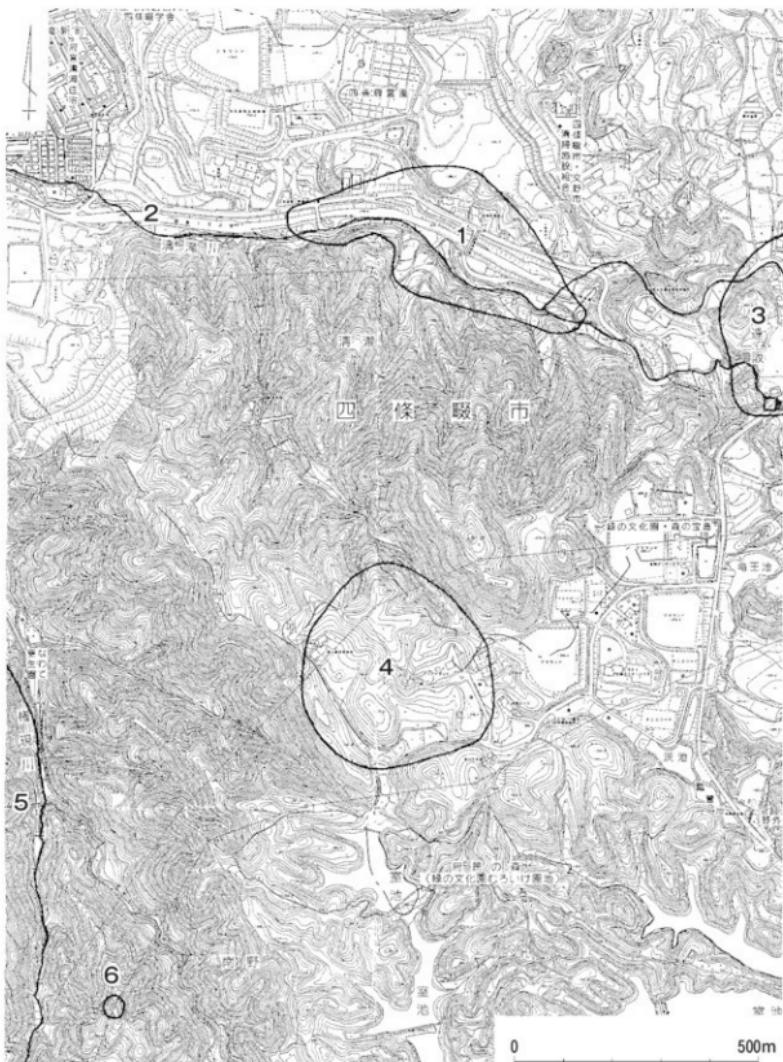
清滝街道の分岐地点にある道標は光背形の地蔵を道標にしたもので、「東なら西大坂坂道下かたの道、為六道罪法界□念佛」と刻んである。年号などは刻まれていない。

長谷遺跡 長谷遺跡は、1988年9月8日から10月22日にかけて行った四條畷市教育委員会の試掘調査で発見した、平安時代～室町時代を中心とした集落遺跡である。試掘結果に基づき約2,000m²の範囲を、1988年12月5日から翌年1月14日まで大阪府教育委員会が発掘調査した。調査では炭焼き窯跡・柱穴・焼土坑などが検出され、縄文時代の石器・奈良～平安時代の土器（須恵器・土師器）、室町時代の信楽焼壺などが出土した。特に奈良～平安期の遺物はまとまった出土があった。

長谷遺跡の南には室池がある。室池は溜池で、新池・古池・中ヶ池・砂溜池という四つの池から成り、このうち新池は明和期から計画があり安政五年（1858年）に完成したものである。他の3池はそれより古くまでさかのぼる築造である。室池の名は延喜式に記述のある讚良氷室に由来する。氷室の存する所を氷室山と呼び、その池を氷室山池と呼んだ。そこから略して江戸期には氷室池あるいは室山池と呼び、さらに略して室池と呼んだものである（山口1990）。

讚良氷室については、平城宮跡から「更浦氷所」と記した養老年間（718～723年）の木簡が出土していて、奈良時代からの存在が想定される（四條畷市史編さん委員会編2016）。平安期には延喜式にも記述がある。その後鎌倉～室町期には公家の清原氏の所領になっており、隣接する甲可郷地頭結城氏との間で争いがあった（『康富記』）。

このように、長谷遺跡の存続時期は、讚良氷室の動向が判明する時期と一致しており、奈良～平安期のまとめた遺物の出土も念頭に置くと、讚良氷室と密接に関連する遺跡と考えられる。氷室に関わっていた人々の集落であった可能性がある。



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | |
|----------|---------|-----------|
| 1. 上清滝遺跡 | 2. 清滝街道 | 3. 逢阪遺跡 |
| 4. 長谷遺跡 | 5. 飯盛城跡 | 6. 飯盛山城砦跡 |

飯盛城跡 飯盛城跡は、戦国時代に三好長慶が畿内・四国的一部を支配し室町幕府の実権を握った際に拠点とした城の跡である（山口編1972等）。標高約314mの飯盛山の山頂に構えられた山城で、南北約650m、東西約400mの規模を測り、近畿地方では最大級のものである。城内には、多くの曲輪や堀切、土橋などが良好な状態で残っている。構造は大きく北城と南城に分かれ、北城は高櫓郭、本郭を中心とした防御施設となっている。南城は千疊敷を中心とした面積の広い曲輪群で、居住空間であった可能性がある。この山城の第一の特徴は、石垣が多く曲輪で用いられていることである。これらの石垣は自然石をほぼ垂直に積み上げており、なかには数段にわたって築いているものもある。この石垣を多用した城は、織田信長が築いた安土城に先駆けるものである。

飯盛城跡はこれまでに大東市教育委員会によって調査が行なわれ、土塁や櫓の跡が検出されている（黒田1989）。平成23年度には城跡の詳細な縄張図が測量・作成されている（村上・實盛編2013、黒田2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013）。

飯盛山城砦跡 飯盛山城砦跡は、文献等には記載がないが、発掘調査で一部を確認した砦跡である。南野砦と仮称した。送電線鉄塔の建設に伴う調査であり全容が明らかになったわけではないが、焼土を含む土坑等を確認し、狼煙台等として機能した可能性がある。立地としては飯盛城の南東に位置し、峻陥な西・南・北に比べて防御の甘い飯盛城の東方の守りを固めた砦のひとつであろう。なお、遺跡南東100mの隣接地が権現、300m北の同一尾根先端部も権現と字地されており、「日本城郭全集」（中井1981）および坂元直哉の報告（坂元1968）に記述のある「権現山砦（権現砦）」と同一の可能性がある。

（實盛良彦）

第2章 調査の経過

第1節 既往の調査

上清滻遺跡は、飯盛山系の西側の山腹部に位置する遺跡で、四條畷市大字清滻に所在し、東西約630m・南北約270mの範囲が、平安時代から中世にかけてを中心とした集落遺跡・寺跡として周知されている。清滻街道は、大和と河内を結ぶ街道の一つで、それらのうち最も北側のルートにあたる。市内の都屋を起点とし、清滻川に沿って峠を越え、田原盆地を抜けて大和へと向かうルートである。

上清滻遺跡は昭和62年（1987年）に一般国道163号の線形改良工事とともに発見された遺跡で、これまでに清滻川の整備以外では清滻付近の国道163号の整備にかかわって昭和63年（1988年）から平成7年（1995年）にかけて8次にわたって発掘調査が行われた（野島2006）。

これらの調査では、祠堂跡や2つの溜池、瓦器焼成窯、火葬墓群のほか、大溝や建物跡などが確認された。まず祠堂跡は第2次調査で確認したもので、付近に「塔の坊」「觀音堂」「仁王門」などの小字名が残る場所だが、調査地は「塔の坊」だけで寺名や伽藍配置などは不明である。しかし、その小字名からみるとかなり大きな寺であったと考えられる。祠堂は、調査地の一番高い場所に方形基壇が設けられ、その上に二間×二間の祠堂が建てられていた。この基壇付近の斜面の溝から、本製型觀音立像・金箔塗り光背などの仏具や、茶道具の茶釜・茶臼・中国陶磁器・天目茶碗・下駄・将棋駒、そして食器類の瓦器碗・土師器皿・箸などが多量に出土した。

この溝では木簡も出土していて、寿永三年（1184）の年号が書かれていた題箋軸のほか、「はせのたね」と稱の品種をかいだ荷札がみつかっている。この木簡は米俵の中身を表示した荷札である。「はせのたね」は「早稲の種」のことと、寺に搬入された物資のなかのひとつであろう。

2つの溜池のうち下流側のものは小字に「籠池」とあった地点で第4次調査を行なって確認し、小字どおりに溜池と水を引き込む旧河川がみつかった。その後第7次調査で上流側にもうひとつ溜池を検出し、「上の池」と命名された。池は木橋の取水施設・排水施設を伴っており、中世の溜池の調査例として貴重である。

瓦器焼成窯は第5次調査で1基、第6次調査で3基の合計4基確認し、そのうち第5次調査の1基はほぼ完全な形で残存していた。窯は半地下式の無段階窯であった。これらの窯で焼かれた瓦器は14世紀前半のいわゆる「大和型」の瓦器である。四條畷では出土する瓦器の約9割が「大和型」のもの（野島2006）、ここで焼かれた瓦器が用いられている可能性もある。

火葬墓群は第6次調査で確認し、平安時代のもので約20基検出しており、土器の中に多量の火葬人骨を納めて埋葬されていた。

平成22年（2010年）には清滻峠を越えた東側（現清滻第一トンネル南側）の地点で清滻街道の調査を行なった（村上・實盛2011）。調査地区は、大阪側から清滻峠を越え、下り始めた田原盆地の入り口地点にあたる。この調査地区付近に関しては、大阪府教育委員会が発行した「奈良街道」（大阪府教育委員会編1989）に取り上げられているのみで、そこでは国道163号が旧清滻街道であるとされていた。

この調査で検出した街道は、南側の山裾を削平し道路面を成形していく、南側にのみ側溝が掘られ、それが後世に広げられていて道路部分の幅がやや狭められていたが、側溝と道路部分を合わせると幅が約2.5～3 mあり、明治時代の文献に記されている清滻街道の幅「八尺」とほぼ一致していた。四條畷市域の西端から清滻峠に至るまでの清滻街道からほぼ直線的に山裾伝いに続く位置にあたっており、この道構が本来の清滻街道であると判断できた。

街道の側溝からは中世から近世にかけての銅銭六点が、近接した位置で、いずれも拳大の石の直下から出土した。このことから、これらの銅銭は意図的にその位置に置かれたと考えられる。この場所は村と村の間に立地しているので、交通の安全を願って置かれた可能性がある。出土した六点のうち一点が寛永通宝で、他の五点は中世に使われた宋銭であったので、この祭祀が行われた時期は江戸時代の初頭と考えられる。

他の出土遺物としては、中世から近代にかけての陶磁器・瓦などがあげられる。明治21年測量の地図ではすでに調査直前と同じ地形であることから、この頃には街道として機能は果たしていなかったと考えられる。

以上のことから、清滝街道はこの地点では遅くとも中世から街道として機能しており、明治時代初頭までは利用され、その後、国道163号が開通したためこの街道は利用されなくなり、現在に至ったのではないかと考えられる。

(實盛)

第2節 調査の経過

大阪府枚方土木事務所により、上清滝遺跡内を流れる清滝川において、渓流保全工事が計画された。周辺地域での発掘調査の状況や立地条件から、遺跡が存在することが十分に考えられた。発掘調査を開始するにあたっては、大阪府枚方土木事務所と協議を行い、工事に伴って埋蔵文化財が破壊されることが考えられることから、その記録保存のために事前に発掘調査を実施することになった。

平成5年度調査地区（KKT1993-1）については、平成5年7月13日付けで文化財保護法第57条の3の規定により発掘の通知があった。調査面積は1050m²で、調査期間は平成5（1993）年12月15日から平成6（1994）年3月19日までであった。

平成10年度1次および2次調査地区（KKT1998-1・2）については、平成9年12月8日付けで文化財保護法第57条の3の規定により発掘の通知があった。1次調査地区（KKT1998-1）の調査面積は150m²で、調査期間は平成11（1999）年1月21日から平成11年2月22日までであった。2次調査地区（KKT1998-2）の調査面積は277m²で、調査期間は平成11（1999）年3月10日から平成11年4月2日までであった。

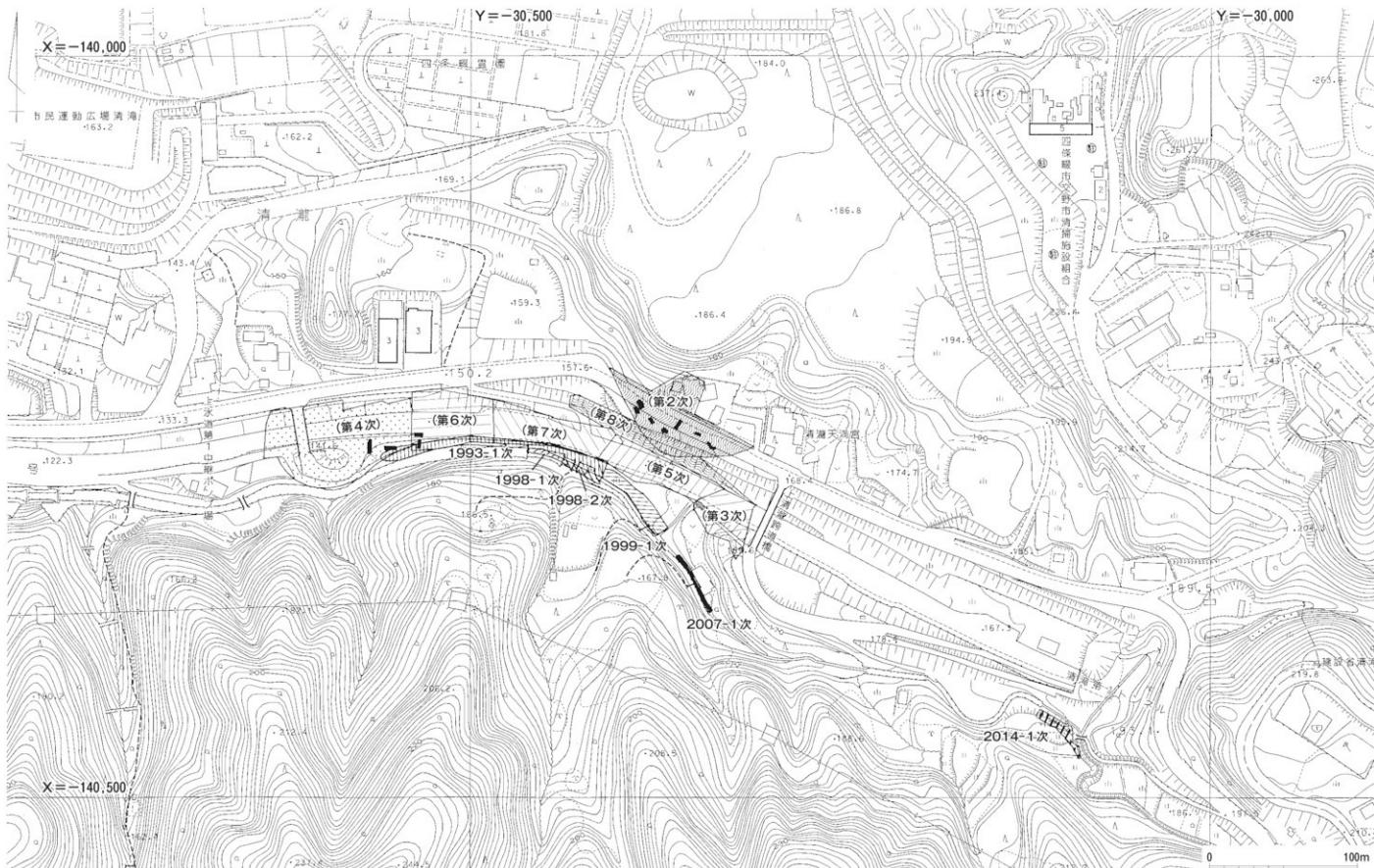
平成11年度調査地区（KKT1999-1）については、平成10年11月5日付けで文化財保護法第57条の3の規定により発掘の通知があった。調査面積は450m²で、調査期間は平成12（2000）年1月24日から平成12年2月29日までであった。

平成19年度調査地区（KKT2007-1）については、平成19年6月19日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により発掘の通知があった。調査面積は152m²で、調査期間は平成19（2007）年6月25日から平成19年7月6日までであった。

平成26年度調査地区（KKT2014-1）については、当初は上清滝遺跡の範囲外であり、平成22（2010）年6月16日に試掘調査を行なった。その調査で旧清滝街道を検出し土師器等の遺物も出土したため、平成22年6月21日付で埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議書を大阪府教育委員会に送付し、同年7月14日付で範囲拡大の通知があった。その後期間を置いて大阪府枚方土木事務所から平成26（2014）年7月18日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により発掘の通知があった。調査面積は220m²で、調査期間は平成26年11月4日から平成27（2015）年1月14日までであった。

発掘調査報告書の作成については、大阪府枚方土木事務所との協議により、渓流保全事業がすべて完了した翌年度から2ヶ年かけて行なうこととしていた。その事業が平成26年度に完了したことから、平成27年2月25日付け枚土第8049号で大阪府枚方土木事務所から「淀川水系清滝川渓流保全工事埋蔵文化財調査の完了に伴う報告書作成について（依頼）」が提出された。そのことについて、四條畷市教育委員会から平成27年3月2日付け職教第1944号で「淀川水系清滝川渓流保全工事埋蔵文化財調査の完了に伴う報告書作成について（回答）」を大阪府枚方土木事務所へ提出した。これらの事務手続きを経て、1ヶ年目として平成27年4月1日付けで「淀川水系清滝川渓流保全工事埋蔵文化財調査報告書作成業務委託」の委託契約書を締結した。委託期間は、平成27年4月1日から平成28年3月31日までであった。2ヶ年目については平成28年4月1日付けで「淀川水系清滝川渓流保全工事埋蔵文化財調査報告書作成業務委託」の委託契約書を締結した。委託期間は、平成28年4月1日から平成29年3月24日までであった。

(實盛)



第2図 調査地区全体図（座標は旧日本測地系）

第3章 上清滻遺跡（KKT1993-1）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区は、現国道163号と清滻川とに挟まれた場所にあたり、国道163号発掘調査の第4・6・7次調査の南隣にある。発掘調査地区の現況は改修前清滻川の右岸にあたり、旧清滻街道と伝承される箇所であった。約10~20cmの表土下には、近世~中世の包含層が堆積しており、その下層が遺構検出面であって、伝承通り街道面を一部で検出するとともに、複数の旧河川を検出した。その後旧河川の肩部堆積土等を取り除き、地山面を検出した（第3~6図）。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第7~9図）。

KKT1993-1 土層説明

■ A~L断面（第7~9図）

1 表土	30 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/3
2 搾乱 にぶい黄橙色砂質土 10YR7/3	31 灰白色細砂層 2.5Y 8/2
旧久門家に関連するものと思われる	32 灰黄色粗砂層 2.5Y 7/2
3 盛土（55層と同一の可能性有り）	33 灰白色粘質土 2.5Y 8/2
4 盛土	34 浅黄色砂礫層 2.5Y 7/4
5 盛土2	35 灰黄色粗砂層 2.5Y 6/2
6 旧耕土	36 灰白色砂質土 10YR 7/1
7 床土	37 淡黄色細砂層 2.5Y 8/3
8 搾乱	38 灰黄色砂質土 2.5Y 6/2に花崗岩を削った もの混入
9 黄色砂質土 2.5Y 8/6	39 灰白色砂礫層 10YR 8/1
10 淡黄色砂質土 2.5Y 8/4	40 浅黄色粗砂層 2.5Y 8/4
11 淡黄色砂質土 2.5Y 8/3	41 にぶい黄色細砂層 2.5Y 6/4
12 淡黄色シルト層 2.5Y 8/4	42 にぶい黄色砂礫層 2.5Y 6/4
13 淡黄色粗砂層 2.5Y 8/4に暗赤褐色粗砂層 2.5YR 3/6（鉄分）が混入	43 黄灰色砂礫層 2.5Y 5/1
14 橙色粗砂層 7.5YR 6/8 鉄分混入	44 にぶい黄色粗砂層 2.5Y 6/3 多量に黒色 鉄分or炭化物が付着している
15 青灰色砂質土 5B 5/1	45 淡黄色砂質土 2.5Y 8/3と白色土を交互に 版築している 旧街道面の可能性有
16 青灰色シルト粘土層 5B 5/1	46 灰色砂質土 7.5Y 6/1と黄橙色砂質土 10YR 8/8と白色土（花崗岩or漆喰）を交互 に版築している 旧街道面の可能性有
17 灰黄色粗砂層 2.5Y 7/2	47 浅黄色砂質土 2.5Y 7/3 旧街道面？
18 灰白色シルト層 2.5Y 8/1	48 灰白色細砂層 2.5Y 8/1
19 灰白色砂質土 2.5Y 8/1	49 灰色シルト層 5Y 5/1
20 灰白色粗砂層 2.5Y 8/2に鉄分混入	50 灰色砂質土 7.5Y 4/1
21 灰白色粗砂層 2.5Y 8/2	51 灰色粗砂層 7.5Y 4/1
22 淡黄色細砂層 2.5Y 8/3	52 淡黄色砂質土 2.5Y 8/3
23 淡黄色粗砂層 2.5Y 8/3	53 灰白色シルト層 7.5Y 7/1
24 灰白色シルト層 5Y 7/2に淡黄色粗砂 2.5Y 8/4混入	54 灰白色細砂層 2.5Y 8/2 鉄分混入
25 淡黄色砂礫層 2.5Y 7/3 鉄分混入	55 灰白色粗砂層 2.5Y 8/2
26 にぶい黄褐色砂質土 10YR 5/3	56 浅黄色砂礫層 2.5Y 7/3
27 花崗岩を削った土を埋めたもの	
28 にぶい黄橙色砂質土 10YR 6/3	
29 黄橙色粘質土 7.5YR 8/8	

- | | | | |
|----|--------------------------------------|----|----------------------|
| 57 | 黄灰色砂質土 2.5Y 6/1
(3層と同一の可能性有り) | 62 | 花崗岩を含む礫層 |
| 58 | 灰色砂質土 5Y 4/1に灰白色細砂
7.5Y 8/1が層状に混入 | 63 | 明黃褐色砂礫層 2.5Y 7/6 |
| 59 | 淡黄色砂礫層 5Y 8/3 | 64 | 灰白色砂質土 5Y 8/2 |
| 60 | 灰白色細砂層 10Y 7/1 | 65 | 灰色砂質土 7.5Y 5/1 |
| 61 | 灰白色細砂層 10Y 8/1 | 66 | 明青灰色シルト層 5B 7/1 |
| | | 67 | 明オリーブ灰色細砂層 2.5GY 7/1 |
| | | 68 | 灰白色粗砂層 N 8/ |

■ I~M断面（第9図下）

- 1 表土1
- 2 表土2
- 3 旧耕土
- 4 床土
- 5 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/3
- 6 淡黄色砂質土 2.5Y 8/4
- 7 灰白色細砂層 2.5Y 8/1
- 8 灰黄色粘質土 2.5Y 7/2に灰白色粗砂
5Y 8/2混入
- 9 灰黄色粘質土 2.5Y 7/2
- 10 黄橙色粗砂層 7.5YR 8/8

- 11 灰白色粗砂層 5Y 7/1 鉄分含有
- 12 灰白色細砂層 10YR 8/1
- 13 灰オリーブ色砂質粘質土 5Y 6/2
中世遺物包含層
- 14 黄橙色細砂層 10YR 7/8
- 15 明オリーブ灰色砂質土 5GY 7/1
- 16 明オリーブ灰色粘質土 2.5GY 7/1
- 17 黄褐色粘質土 10YR 5/6
- 18 暗オリーブ褐色粘質土 2.5Y 3/3
腐植土含有

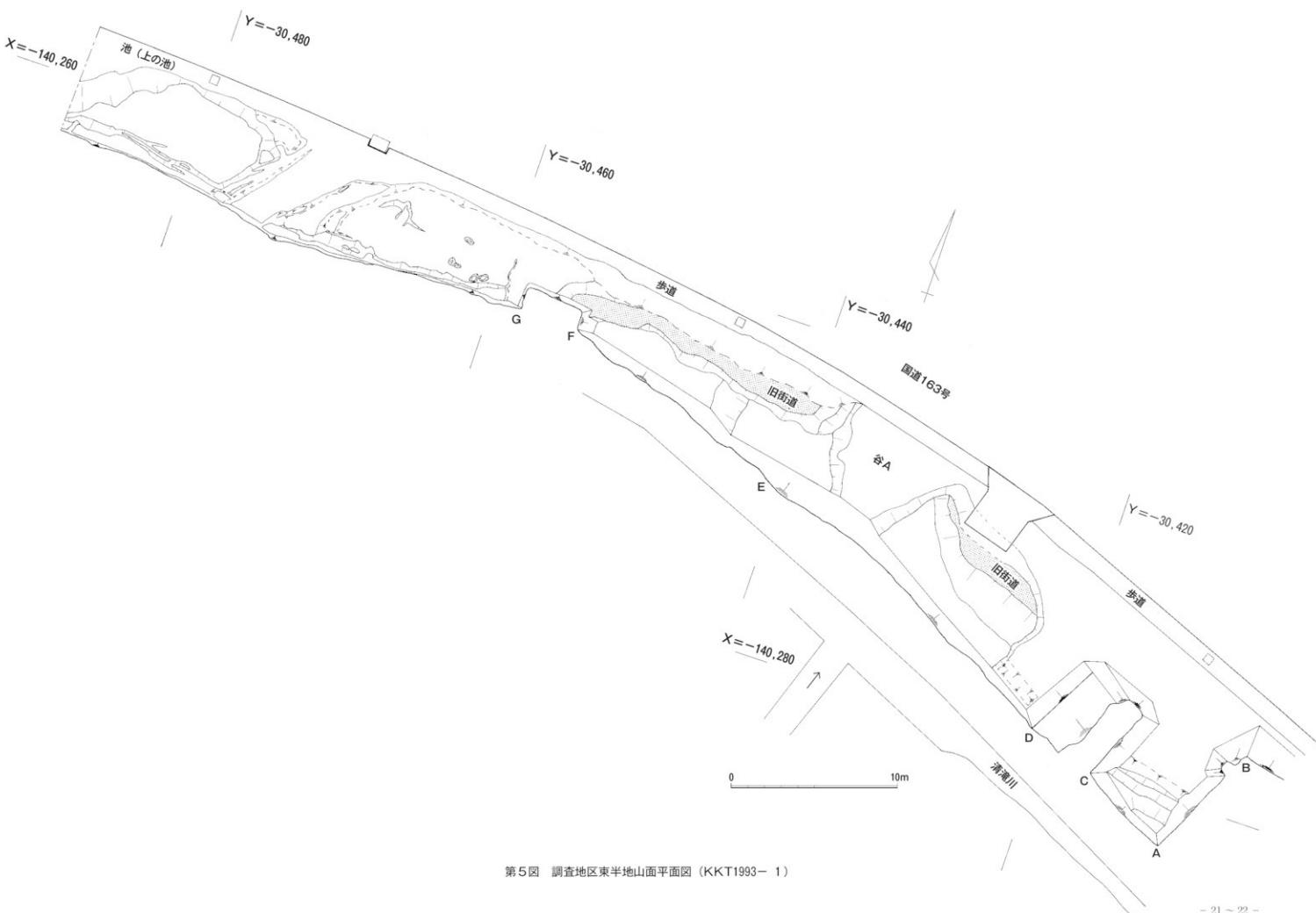
(村上 始・實盛)



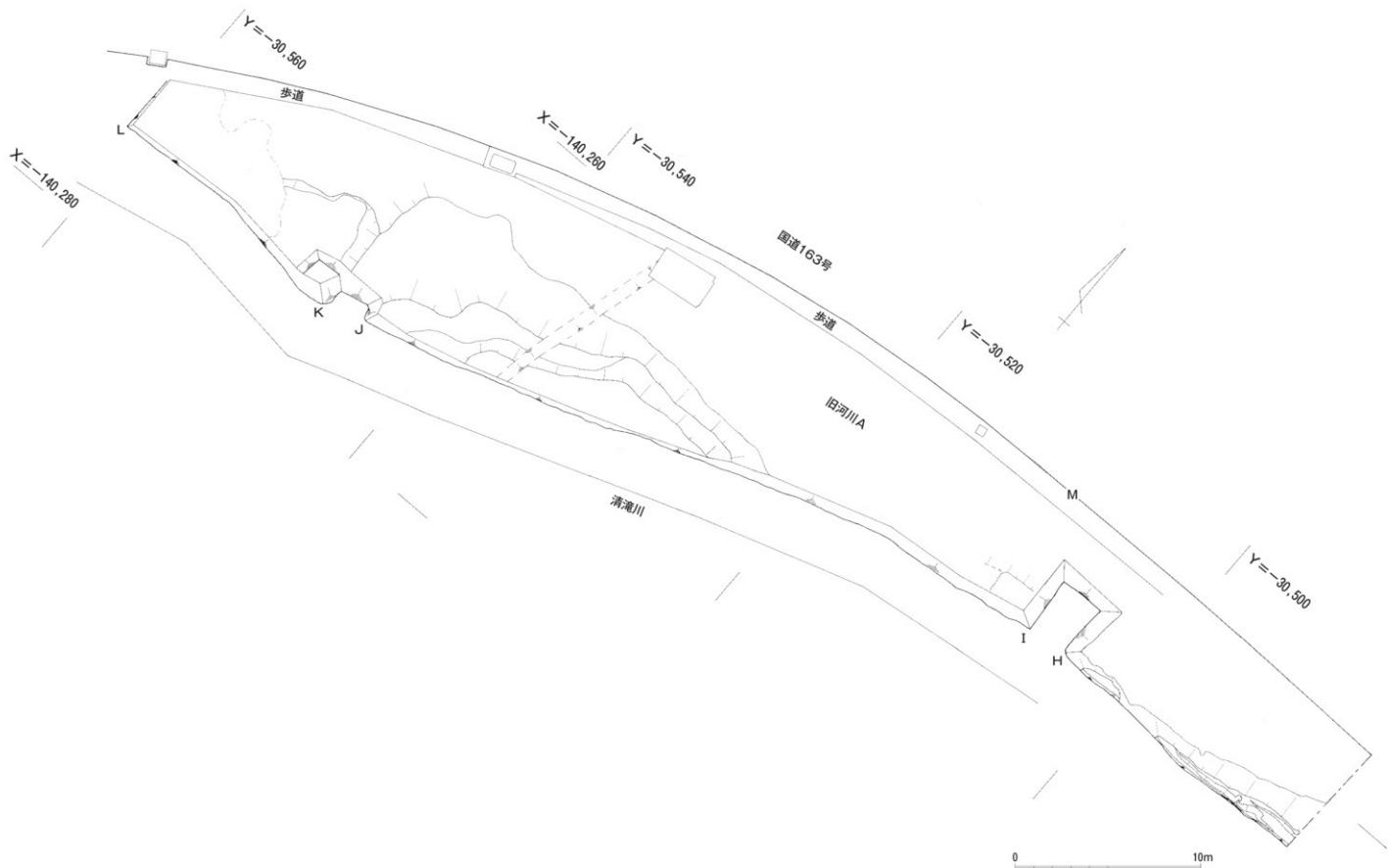
第3図 調査地区東半第1遺構面平面図 (KKT1993-1)



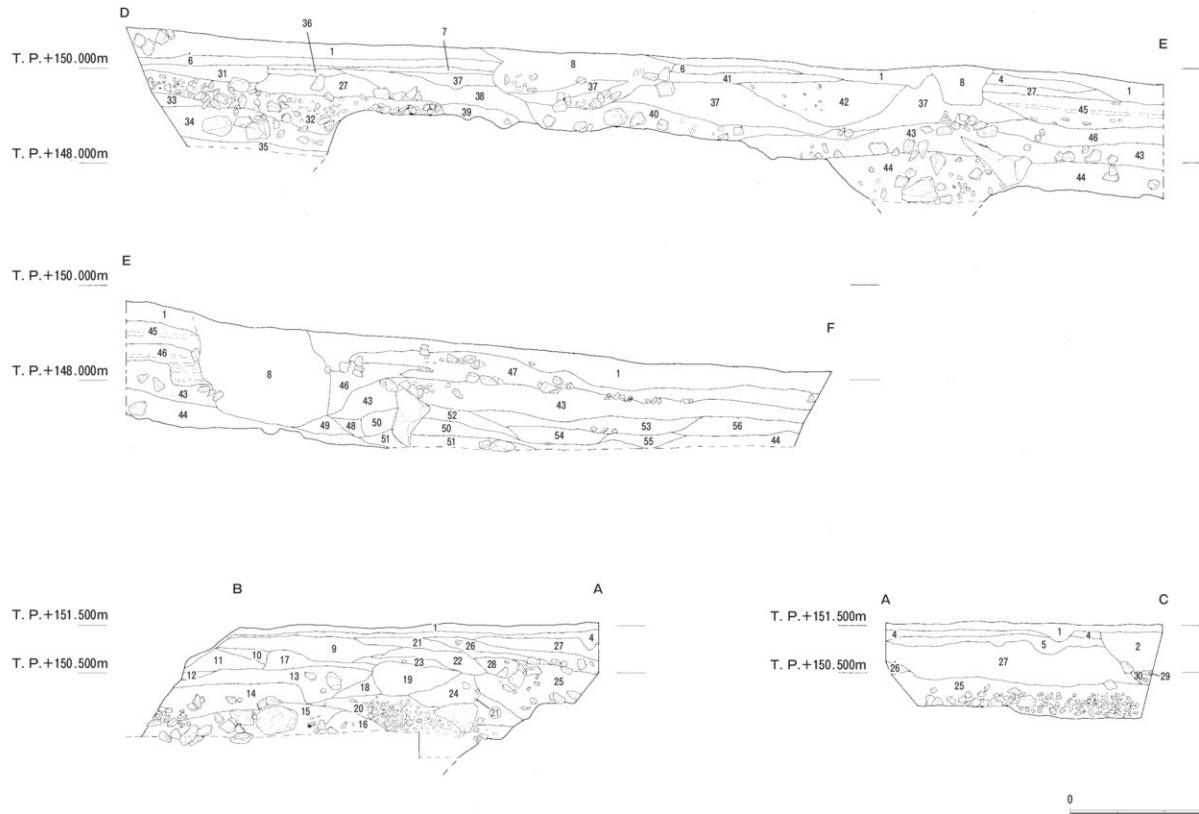
第4図 調査地区西半第1遺構面平面図 (KKT1993-1)



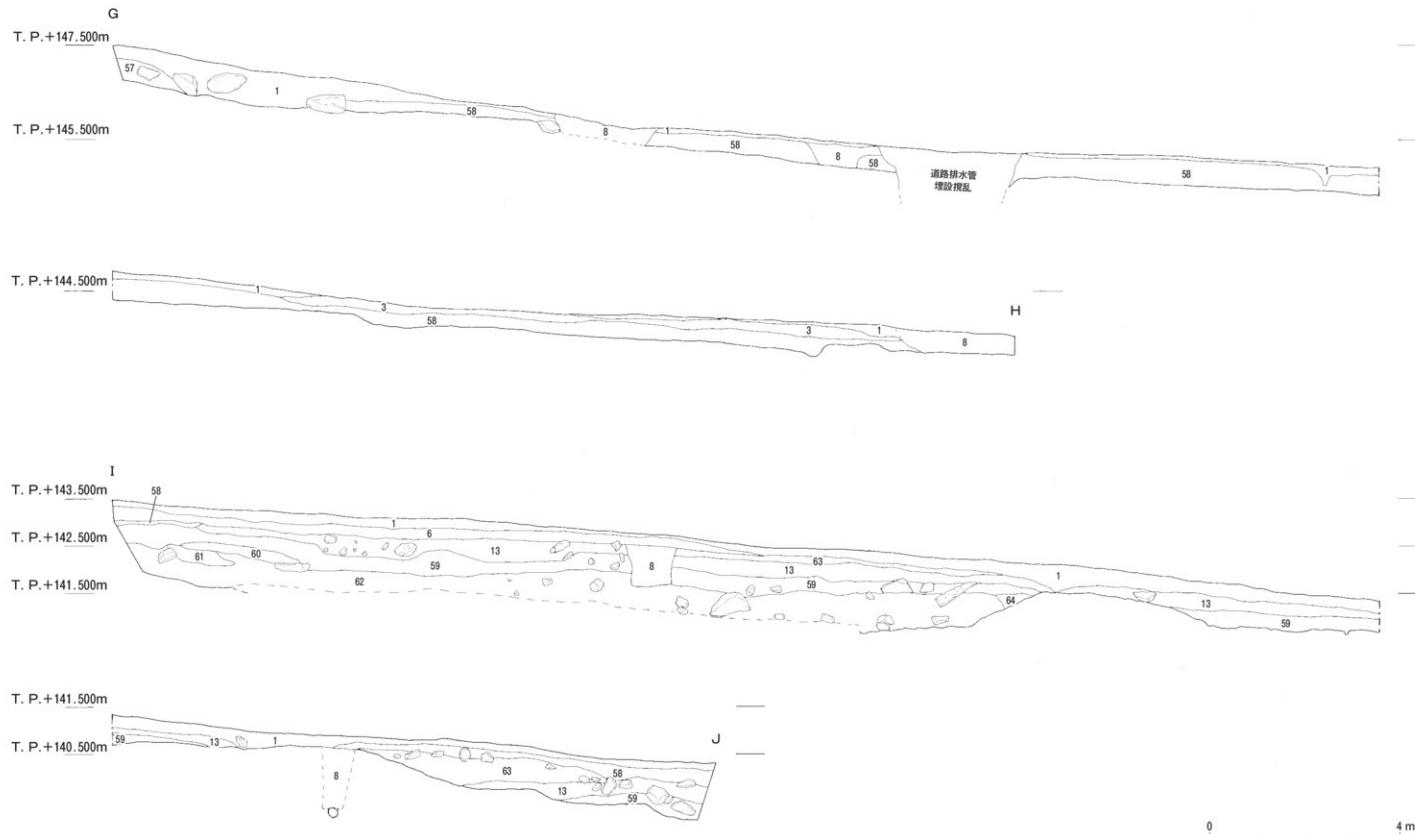
第5図 調査地区東半地山面平面図 (KKT1993- 1)



第6図 調査地区西半地山面平面図 (KKT1993-1)

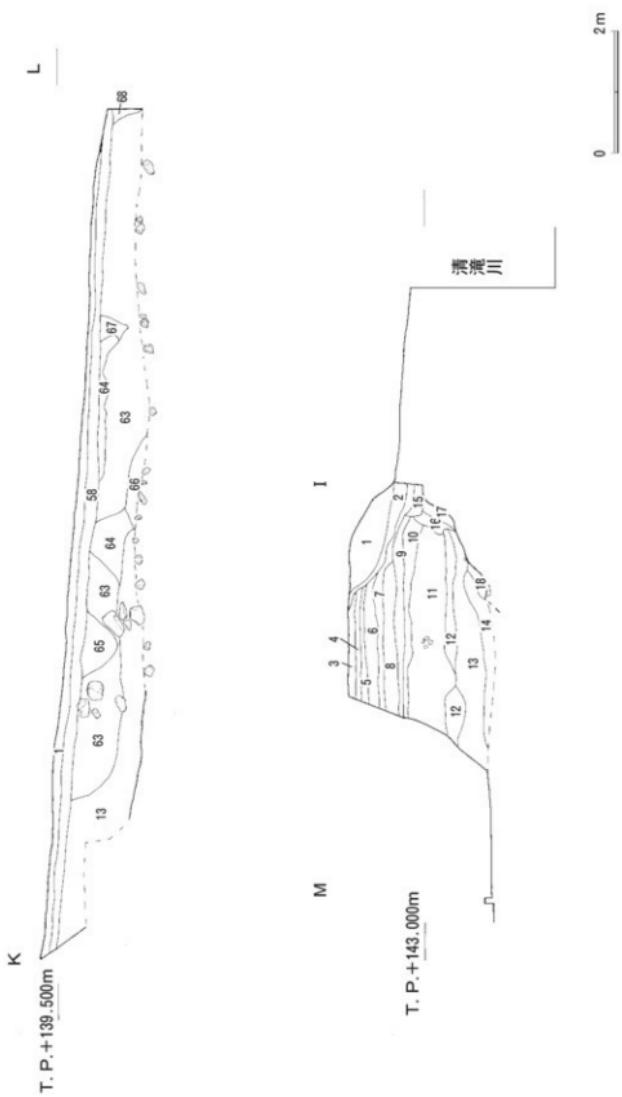


第7図 調査地区断面図 (KKT1993-1) (1)



第8図 調査地区断面図 (KKT1993-1) (2)

第9図 調査地区断面図 (KKT1993-1) (3)



第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するものであった。検出した主な遺構は、旧街道、池（上の池）、旧河川、谷状遺構である（第3～6図）。

旧街道 $Y = -30423$ から $Y = -30456$ にかけての範囲で、旧街道面を検出した。街道面は幅最大1.5m、検出できた総延長は約33mである。街道上面の標高は、東端でT. P. +148.990m、西端でT. P. +148.000mであった。周囲より一段高くなっている、北側には旧河川が流れる。 $Y = -30429$ から $Y = -30438$ にかけての範囲は、後述する谷状遺構により切られている。第11図-9の瓶が、この街道上に設定した下層確認トレンチから出土しているため、それより新しい時期に機能した街道面である（写真図版1-1）。

旧河川A 調査地区の西端から、 $Y = -30490$ 付近までの範囲で、旧河川を検出した。河川肩部は左岸のみ一部を検出した。右岸は国道163号建設地の第6次調査（野島2006）で検出しており、幅約17.6m、深さ約2.5mに復元できる。第7次調査で検出した上の池から、第4次調査で検出した龍池へと東から西に流れる旧河川である。検出した左岸の東側上端の標高はT. P. +144.720m、西側上端はT. P. +140.230m、検出できた範囲の底部は東端がT. P. +143.510m、西端はT. P. +137.990mであった。（写真図版1-2・2-1）。

旧河川B 調査地区の東端から、 $Y = -30430$ までの範囲で、旧河川を検出した。河川肩部は左岸のみ一部を検出した。右岸は、国道163号建設地の第7次調査（野島2006）で、調査区南端が落ち込んでいるのが該当するとみられ、幅約2m、深さ0.3～0.8mほどの河川である。この河川は第7次調査で検出した上の池へと流れ込む河川本流から枝分かれする可能性が高く、東から西へと流れて後述の谷状遺構へと流れ込む。検出した左岸の東側上端の標高はT. P. +149.440m、西側上端はT. P. +148.770m、検出できた範囲の底部は東端がT. P. +149.060m、西端はT. P. +147.890mであった（写真図版2-2）。

瓦質風呂（第10図-22）、磁器神酒セリ（第13図-23）、白磁碗（第13図-24）、瓦（第13図-25～27）、磁器人形（第13図-28）などが出土した。

谷（谷状遺構A） $Y = -30429$ から $Y = -30438$ にかけて、旧街道を切るように検出した南側山塊部からの谷状遺構である。南端での幅4.4m、街道を切る北端での幅9.2mで、南から北へと扇状に広がっており、遺構内には大小の岩が数多く堆積していた。南東上端の標高はT. P. +148.235m、北東上端の標高はT. P. +148.461m、底部は最も深い個所でT. P. +147.152mであった（写真図版2-2）。

土師質土器炮烙（第14図-29）、瓦質土器擂鉢（第14図-30）、陶器甕（第14図-31）、肥前磁器碗（第14図-32）などが出土した。

池（上の池） 国道163号建設地の第7次調査（野島2006）で検出した上の池の南岸の一部を、 $Y = -30476$ から $Y = -30490$ 付近にかけて検出した。上の池の規模は、東西32m、南北14mと報告されたが、今回検出した南岸が池の堤の最上部であるとみられ、上の池の南北規模は20mに広がる可能性が高い。上端の標高はT. P. +146.330m、検出できた範囲の下端はT. P. +143.800mであった（写真図版3-1）。

青磁碗（第14図-33）、軒平瓦（第14図-34）、石仏（第15図-35）などが出土した。

検出した遺構のうち、旧河川Aと池（上の池）に関しては、前述のとおり国道163号建設地の調査（野島2006）で検出した遺構の続きの部分であった。谷状遺構については、同調査においても今回検出した谷状遺構Aに連なるとみられる地形の変わる箇所を検出しており、谷状遺構Aもさらに北方へと向かい、旧河川本流に合流するようである。

旧河川A・B・池からは、報告した石仏以外にも多くの石仏や五輪塔が出土し、それらは現地付近の墓地にて保存している（写真図版3-2）。

（實盛）

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

縄文土器

1 深鉢 脇部径：23.0cm（復元）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）。断面は褐灰色（7.5YR 4/1）。胎土：粗。長石・雲母を少量、角閃石を多く含む。生駒西麓産の胎土。焼成：良好。残存度：小片（3片）。外面には山形文を多用する。縄文時代早期後半。穗谷式と思われる。X = -140, 270, Y = -30, 530地区出土。復元図面は、口縁部は向畠遺跡（岐阜県）、底部は帝积豊松堂面洞窟遺跡（広島県）出土の穗谷式深鉢を参考にした。（第10図-1、写真図版18-1-1）

土師器

2 盆 口径：6.9cm（復元）。器高：1.7cm（残存）。厚さ：0.35cm。色調：内・外面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：密。直径1mm以下の赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部外面はユビオサエを施している。Jbタイプ。14世紀代のものと思われる。（第10図-2、写真図版18-2-2）

3 盆 口径：8.6cm（復元）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：内・外・断面は灰色（5Y 4/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整。底部外面は未調整。Jbタイプ。14世紀代と思われる。（第10図-3、写真図版18-2-3）

4 盆 口径：8.2cm。器高：1.3cm。厚さ：0.4cm。色調：内・外面はにぶい橙色（7.5YR 7/3）。胎土：密。直径1mm以下の赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内面はZ字状にナデ調整、底部外面はユビオサエを施している。切り込み円板技法により成形。Jbタイプ。14世紀代のものと思われる。（第10図-4、写真図版18-2-4）

5 盆 口径：10.0cm。器高：1.6cm。厚さ：0.3cm。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや密。直径2mmの石英・長石・黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。口縁部の一部に煤焦げ箇所があることから灯明皿として使用したものと思われる。Jbタイプ。13世紀末～14世紀前半のものと思われる。（第10図-5、写真図版18-2-5）

6 盆 口径：7.1cm。器高：1.8cm。厚さ：0.4cm。色調：内・外面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：密。直径2mm以下の石英・赤色粒子を含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整、体部外面はユビオサエを施している。Gbタイプ。14世紀後半のものと思われる。（第10図-6、写真図版18-2-6）

瓦質土器

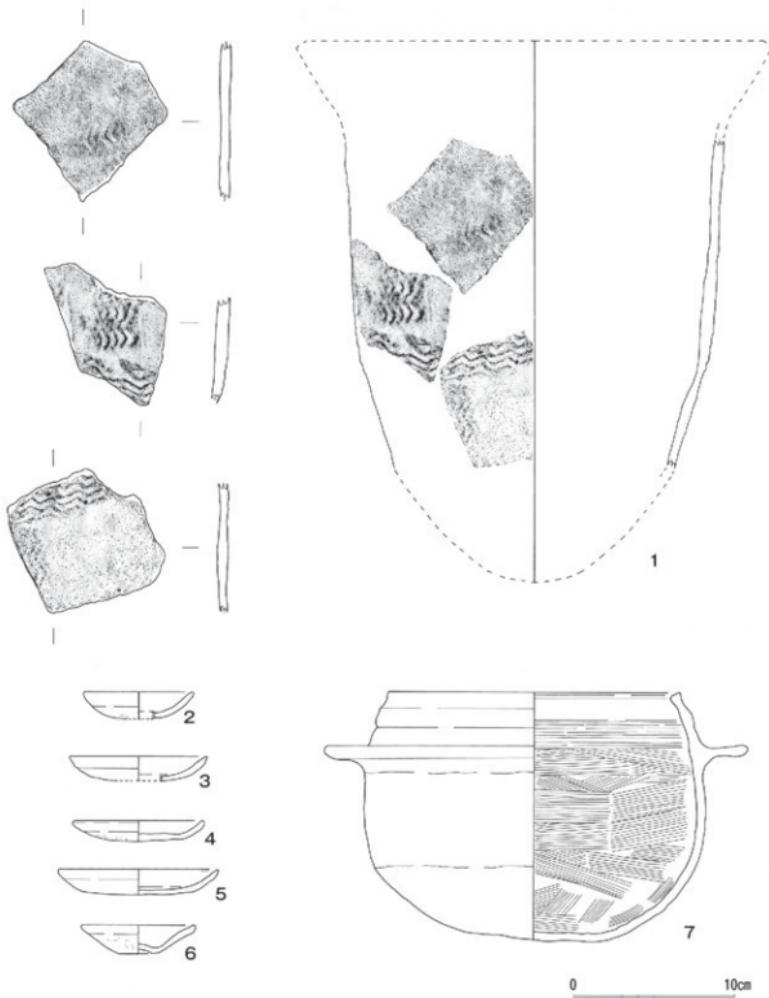
7 羽釜 口径：18.0cm。器高：15.4cm。厚さ：0.4～1.0cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。粘土帯は約2.5cm。体部外面はナデ調整、体部内面は幅約1.8cmのハケメ調整を施している。15～16世紀初頭のものと思われる。KKT1998-1の谷状遺構Bから出土したものと接合。（第10図-7、写真図版18-2-7）

須恵質土器

9 瓶 底径：6.0cm。最大径：7.6cm（復元）。器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.3～1.1cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：やや密。直径2mm以下の石英・長石・黒色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。ロクロナデ成形。底面外面に自然釉、中心に孔が開けられている。中世のものと思われる。街道上の下層確認トレンチ出土。（第11図-9、写真図版18-2-9）

陶器

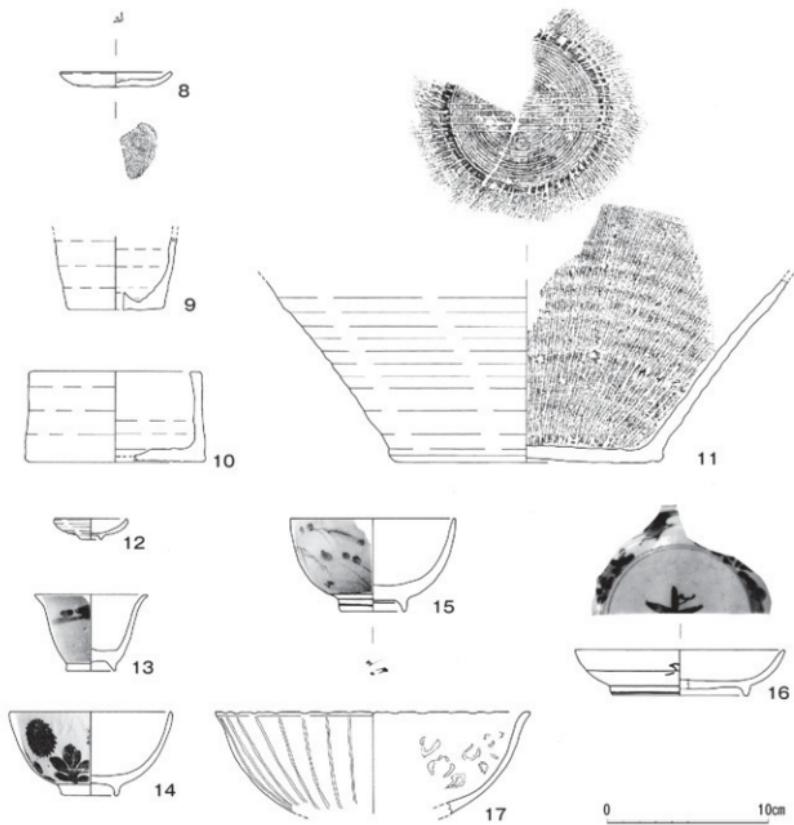
8 盆 口径：7.0cm。器高：0.9cm。厚さ：0.3cm。色調：内・外面は明褐色（7.5YR 5/8）、断面



第10図 出土遺物（包含層・KKT1993-1）(1)

は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径1mm以下の赤色粒子と黒色粒子を含む。焼成：良好。残存度：2/5。体部内外面は回転ナデ調整を施し、柿釉をかける。底面は回転糸切り。見込み部に印判を捺す。灯明皿と思われる。近世～近代と思われる。（第11図-8、写真図版18-2-8）

10鉢 口径：10.7cm（復元）。底径：11.2cm（復元）。器高：5.65cm。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内面は赤褐色（10R 4/4）、外面は暗赤灰色（7.5R 3/1）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長



第11図 出土遺物（包含層・KKT1993-1）(2)

石をやや多く含む。直径4mmの灰褐色の礫1点混入。焼成：良好。残存度：2/5。ロクロ成形。中世から近世のものと思われる。（第11図-10、写真図版18-2-10）

11摺鉢 底径：16.2cm（復元）。器高：11.3cm（残存）。厚さ：0.4~0.9cm。色調：内・外・断面はにぶい褐色（7.5YR 6/3）。胎土：やや密。直径2mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。体部内面は7条を1単位とするスリ目、見込み部には同心円のスリ目に直行して1単位のスリ目を施している。17世紀代の信楽焼と思われる。KKT1998-1の谷状造構Bから出土したものと接合。（第11図-11、写真図版18-2-11）

磁器

12紅皿 口径：4.6cm（復元）。高台径：1.4cm（復元）。器高：1.3cm。厚さ：0.1~0.3cm。色調：内・外面は灰白色（5Y 7/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/5。内外面に施釉する。型

押成形。江戸時代のものと思われる。(第11図-12、写真図版19-1-12)

13肥前磁器染付小坏 口径：7.0cm（復元）。高台径：3.0cm（復元）。器高：4.7cm。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内・外面は灰白色（10Y 7/1）、断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面に文様を描いている。17世紀末～18世紀中葉のものと思われる。(第11図-13、写真図版19-1-13)

14肥前磁器染付碗 口径：10.0cm（復元）。高台径：3.4cm（復元）。器高：5.2cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/2。体部外面にはコンニャク印判による菊花文が捺されている。17世紀末～18世紀中葉のものと思われる。KKT98-1の遺物包含層から出土したものと接合。(第11図-14、写真図版19-1-14)

15肥前磁器染付碗 口径：10.2cm（復元）。高台径：4.0cm（復元）。器高：5.8cm。厚さ：0.2～0.9cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面に草花文様、高台内部に文様を描いている。18世紀前半～18世紀中葉のものと思われる。(第11図-15、写真図版19-1-15)

16肥前磁器染付皿 口径：13.0cm（復元）。高台径：8.4cm（復元）。器高：2.8cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部内外面に文様を描いている。体部内面は草花文か。18世紀中葉～18世紀末頃のものと思われる。(第11図-16、写真図版19-1-16)

貿易陶磁器

17龍泉窯系青磁蓮弁文碗 口径：19.6cm（復元）。器高：6.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面はオリーブ灰色（10Y 5/2）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部は輪花状に成形。体部外面に線描き蓮弁文が施され、内面に花文と思われる文様が凹印される。14世紀初頭～15世紀前半頃と思われる。(第11図-17、写真図版19-1-17)

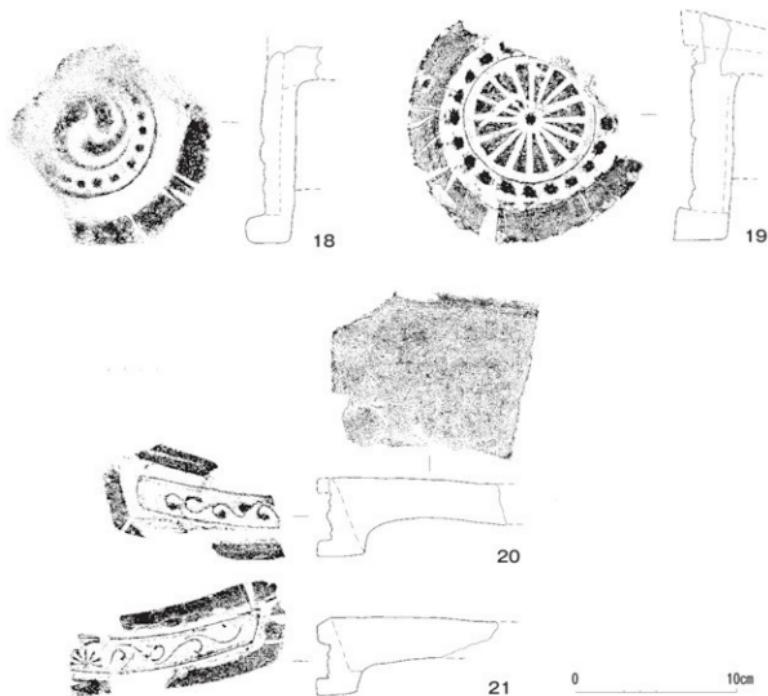
瓦

18巴文軒丸瓦 瓦当面径：11.5cm以上。外縁高：1.2cm。厚さ：1.8～2.8cm。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外縁の内側に1条の圓線を巡らせて、その内側に20個の珠文が巡る。中世のものと思われる。(第12図-18、写真図版19-2-18)

19菊花文軒丸瓦 瓦当面径：14.5cm（復元）。外縁高：1.2cm。厚さ：2.2～3.3cm。色調：内・外面は暗灰色（N 2/）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：密。直径1mm程度の褐色系砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。瓦当面の16弁の菊花は三角形を呈する。外縁の内側に15個以上の珠文が巡り、その内側に1条の圓線が巡る。13世紀代のものと思われる。清流川の左岸側にある小字「觀音堂」と称する畠地で採集した遺物である。貝塚市地蔵堂から類似品が出土している。(第12図-19、写真図版19-2-19)

20唐草文軒平瓦 外縁高：0.9cm。厚さ：1.0～4.9cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1mm程度の黒色粒子を多量に含む。焼成：良好。残存度：小片。額部瓦当裏面はヨコナデ調整を施す。外縁の内側に1条の圓線を巡らす。平瓦部の凹面に布目痕が残る。瓦当面貼付技法による成形。中世のものと思われる。(第12図-20、写真図版19-2-20)

21半截菊花唐草文軒平瓦 外縁高：0.8cm。厚さ：1.0～4.7cm。色調：内・外・断面は青灰色（5B 6/1）。胎土：密。直径1～3mm程度の砂粒と小石をやや多く含む。焼成：良好。（須忠質）残存度：小片。額部瓦当裏面はヨコナデ調整を施している。瓦当上縁は面取りされている。外縁の内側に1条の圓線を巡らす。瓦当面貼付技法による成形。半截菊花文が盛行する15世紀代のものと思われる。A-B断面24層より出土。(第7図-②)、(第12図-21、写真図版19-2-21)



第12図 出土遺物（包含層・KKT1993-1）(3)

2. 旧河川B出土遺物

瓦質土器

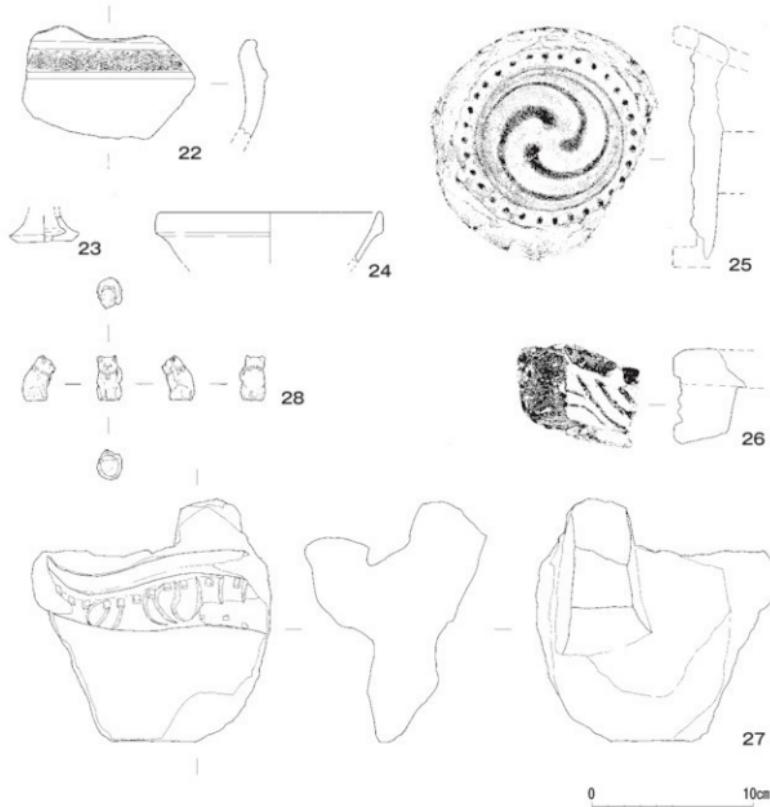
22風呂 厚さ：0.7~1.5cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面には2条の凸線の間に花菱文が押印されている。15世紀代の喫茶用具と思われる。（第13図-22、写真図版20-1-22）

磁器

23神酒徳利 底径：3.3cm（復元）。最大径：4.3cm（復元）。器高：1.6cm（残存）。厚さ：0.3cm。色調：外面は明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）、素地は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に施釉。江戸時代の神酒徳利底部。（第13図-23、写真図版20-1-23）

貿易陶磁器

24白磁碗 口径：13.8cm（復元）。器高：3.2cm（残存）。厚さ：0.3~0.7cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。12世紀代のものと思われる。（第13図-24、写真図版20-1-24）



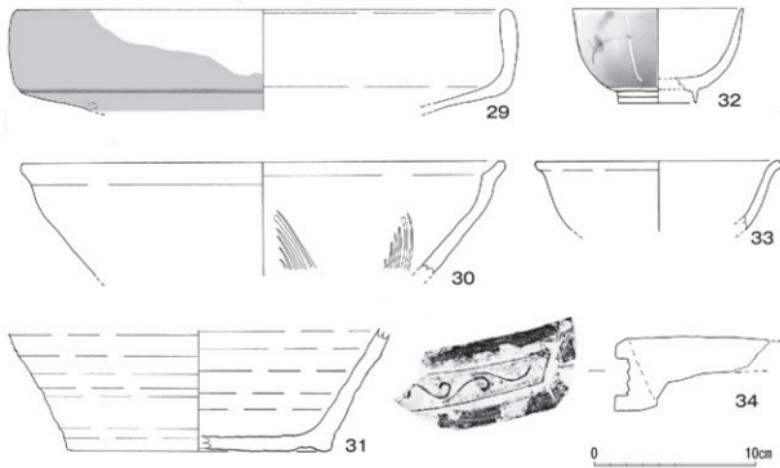
第13図 出土遺物（旧河川B・KKT1993-1）

瓦

25巴文軒丸瓦 厚さ：1.5～2.0cm。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外縁の内側に33個の珠文が巡り、その内側に1条の圓線を巡る。中世のものと思われる。（第13図-25、写真図版20-2-25）

26波状文軒平瓦 外縁高：0.6cm。厚さ：3.4cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（7.5Y 7/1）。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。頸部貼付技法による成形。15世紀代のものと思われる。（第13図-26、写真図版20-2-26）

27鬼瓦 厚さ：3.8～5.3cm。色調：外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。鬼面の眉の一部と思われる。中世のものと思われる。（第13図-27、写真図版20-2-27）



第14図 出土遺物（谷、池・KKT1993-1）

人形

28招き猫 高さ：2.8cm。幅1.5cm。厚さ：1.5cm。色調：灰白色（5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好、磁器質。残存度：ほぼ完形。前後2個の合わせ型による成形。型は磨滅が少なく、ケズリ痕まで転写されている。（第13図-28、写真図版20-1-28）

3. 谷（谷状遺構A）出土遺物

土質質土器

29培燒 口径：30.6cm（復元）。器高：6.3cm（残存）。厚さ：0.4~1.0cm。色調：内・外・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや密。直径3mm以下の長石・黒色砂粒・赤色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面ともに回転ナデ調整、底部はユビオサエ調整を施している。外面にはスス・炭化物が付着している。江戸時代のものと思われる。（第14図-29、写真図版21-1-29）

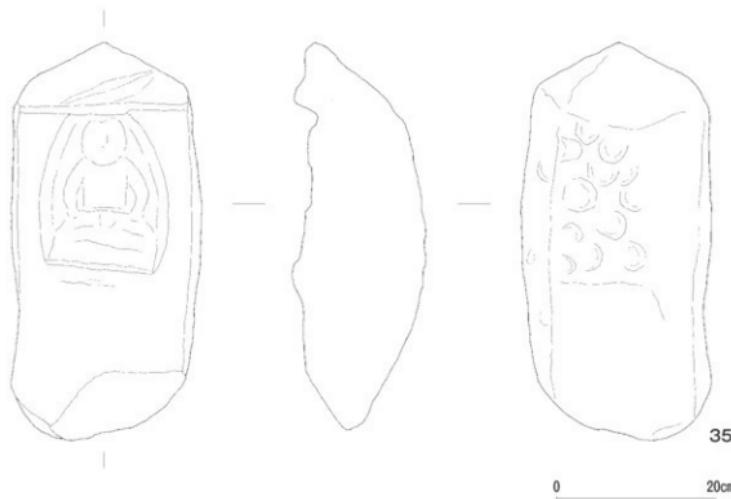
瓦質土器

30摺鉢 口径：30.0cm（復元）。器高：7.0cm（残存）。厚さ：0.6~0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 8/）。口縁端部の断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内面に6条を1単位とするスリ目を施す。16世紀後半のものと思われる。（第14図-30、写真図版21-1-30）

陶器

31甕 底径：16.4cm（復元）。器高：7.6cm（残存）。厚さ：0.9cm。色調：内面は緑灰色（7.5GY 5/1）、外面はにぶい赤褐色（2.5YR 5/4）、断面は褐灰色（10YR 6/1）、底部外面は橙色（5YR 7/6）。

胎土：やや粗。直径2mm以下の長石・石英等を多量に含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内面には自然釉と降灰がみられる。14世紀代の信楽焼と思われる。（第14図-31、写真図版21-1-31）



第15図 出土遺物（池・KKT1993-1）

磁器

32肥前磁染付碗 口径：10.6cm（復元）。高台径：4.8cm（復元）。器高：5.9cm。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面に簡略化された草花文と思われる文様を描いている。18世紀前半～18世紀中葉のものと思われる。（第14図-32、写真図版21-1-32）

4. 池（上の池）出土遺物

貿易陶磁器

33龍泉窯系青磁端反碗 口径：15.2cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.6cm。色調：内・外面はオリーブ灰色（2.5GY 6/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。

残存度：小片。体部内外面ともに無文。15世紀～16世紀代のものと思われる。（第14図-33、写真図版21-1-33）

瓦

34半截菊花唐草文軒平瓦 外縁高：0.8cm。厚さ：1.0～4.6cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。額部瓦当裏面はヨコナデ調整を施している。瓦当上縁は面取りされている。外縁の内側に1条の圓線を巡らす。瓦当面貼付技法による成形。半截菊花文が盛行する15世紀代のものと思われる。（第14図-34、写真図版21-1-34）

石造物

35石仏 高さ：49.5cm（残存）。幅：21.6cm。厚さ：16.6cm（最大）。色調：にぶい黄橙色（10YR 7/2）。表面には結跏趺坐した如来を表現している。背面には荒い加工痕が残っている。X = -140,260, Y = -30,490地区出土。（第15図-35、巻頭写真図版7-2、写真図版21-2-35）

（村上・實盛）

第4章 上清滻遺跡（KKT1998-1）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区は、現国道163号と清滻川とに挟まれた場所にあたり、1993-1次調査の南隣にあたる。1993-1次調査で、安全のため調査対象外としていた地区について、工事の進行に合わせ調査できる状況となつたため発掘調査を行なつた。発掘調査地区の現況は改修前清滻川の右岸にあたり、IH清滻街道と伝承される箇所であった。約10cmの表土下で、伝承通り街道面を検出した。その後上層の街道を形成する土層等を取り除き、地山面を検出した（第16図）。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第16図）。

KKT1998-1 土層説明

1 挿乱	17 灰白色砂層 7.5Y 8/1
2 黄灰色砂層 2.5Y 5/1	18 灰色砂層 N 6/
3 黄灰色砂層 2.5Y 6/1	19 にぶい褐色砂層 7.5YR 5/3
4 にぶい黄褐色礫層 10YR 5/3	20 灰黃褐色砂層 10YR 5/2
5 黄灰色砂層 2.5Y 4/1	21 褐灰色砂層 10YR 5/1
6 にぶい黄橙色砂層 10YR 6/4	22 灰黃褐色砂層 10YR 5/2
7 灰黄色砂層 2.5Y 6/2 灰混じり	23 灰色砂層 N 6/ シルト混じり
8 褐灰色砂層 7.5YR 5/1	24 灰白色砂層 2.5Y 7/1
9 褐灰色砂層 10YR 6/1	25 褐灰色砂層 10YR 5/1
10 褐灰色砂層 7.5YR 6/1	26 黄灰色礫層 2.5Y 5/1
11 明青灰色砂層 5BG 7/1	27 灰色砂層 N 4/
12 褐灰色砂層 10YR 5/1	28 灰色砂層 N 5/
13 灰黃褐色砂層 10YR 6/2	29 黄灰色砂層 2.5Y 5/1
14 明緑灰色砂層 10G 7/1	30 灰色砂層 N 4/
15 褐灰色砂層 10YR 4/1	31 にぶい赤褐色礫層 5YR 4/4 鉄分含む
16 灰黃褐色砂層 10YR 6/2	

（實盛）

第2節 検出遺構

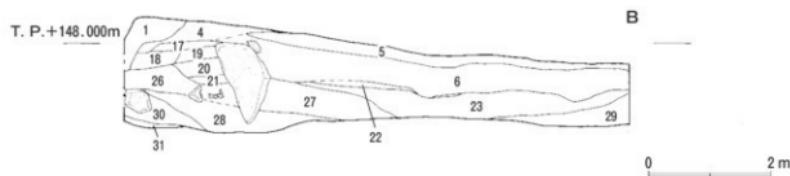
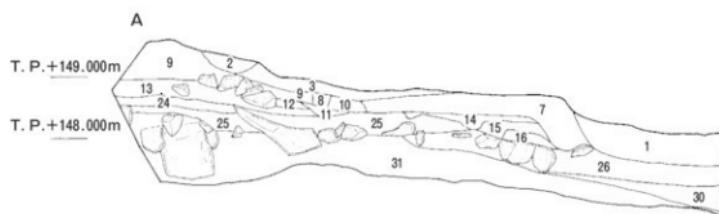
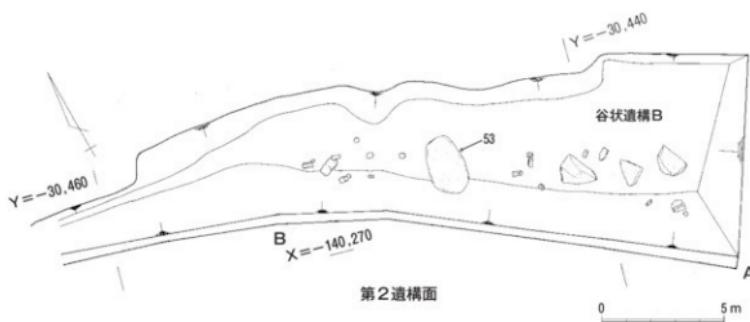
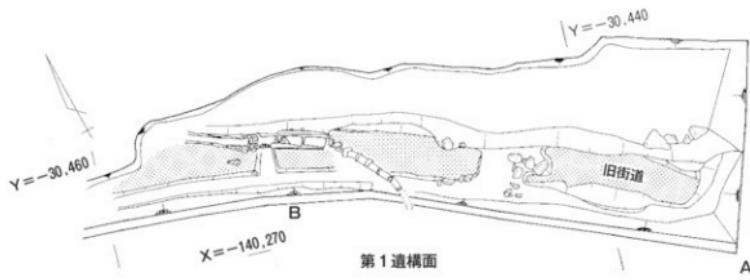
今回の調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するものであった。検出した主な遺構は、第1遺構面の旧街道、第2遺構面の谷状遺構である（第16図）。

旧街道 第1遺構面全域で近世後期以降に属するとみられる旧街道面を検出した。検出した街道の幅は約1.5-1.8m、検出した長さは24mである。街道面には一部に石敷きがみられ、坂道に対応し整備されている。街道面の標高は東端でT.P.+148.940m、西端はT.P.+147.240mであった（写真図版4-1・2）。なおこの街道面を切るように土管と石組みによる近世から近代に属する導水路を検出している（写真図版5-1）。この街道面に属する第1遺構面の包含層からは、肥前磁器染付皿（第17図-49）と泥面（第17図-51）が出土した。

谷状遺構B 第2遺構面全域は、1993-1次調査で検出した谷状遺構Aと肩を共有し、東から西へと低くなる別の谷状遺構（谷状遺構B）の内部であった。検出できた範囲の底部は東端がT.P.+147.386m、西端はT.P.+145.398mであった（巻頭写真図版2-1・2、写真図版5-2・6-1）。

土師器・土師質土器（第17図-36~40）、陶器（第17図-41~43）、磁器（第17図-44~48・50）、土製品（第17図-52）、青銅鏡（第18図-53）などが出土したほか、1993-1次調査の出土遺物と接合したものもあった（第10図-7、第11図-11）。これ以外に数多くの石仏や五輪塔が出土し、それらはすべて河川工事後の現地にて保存している（写真図版6-2）。

（實盛）



第16図 調査地区平面図・断面図 (KKT1998-1)

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

土師器

36皿 口径：8.2cm。器高：1.6cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径1mm程度の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：8/9。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。中世のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-36、写真図版22-2-36）

37皿 口径：10.0cm。器高：2.0cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施している。Jbタイプと思われる。14世紀代のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-37、写真図版22-2-37）

38皿 口径：11.0cm。器高：1.8cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：3/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整、底部外面はユビオサエを施している。口縁端部に面取りはみられるが不明瞭である。Jbタイプと思われる。14世紀代のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-38、写真図版22-2-38）

土師質土器

39焙烙 口径：31.6cm（復元）。器高：6.8cm（残存）。厚さ：0.3～1.3cm。色調：内・外・断面は橙色（7.5YR 7/6）。胎土：密。直径1mm以下の赤色粒子と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面ともにヨコナデ調整を施している。体部外面の突帯部以下は被熱のためか暗灰色（N 3/）に変色している。18世紀以降のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-39、写真図版22-2-39）

40火鉢 口径：20.0cm（復元）。器高：11.8cm。厚さ：0.7～2.2cm。色調：内・外面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。体部外面は丁寧なナデ調整、体部内面の上半部は丁寧なヨコナデ調整を施している。体部内面の下半部は被熱のためか器壁が粗くなっている。底部の3か所に台形の脚が付けられている。江戸時代のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-40、写真図版22-2-40）

陶器

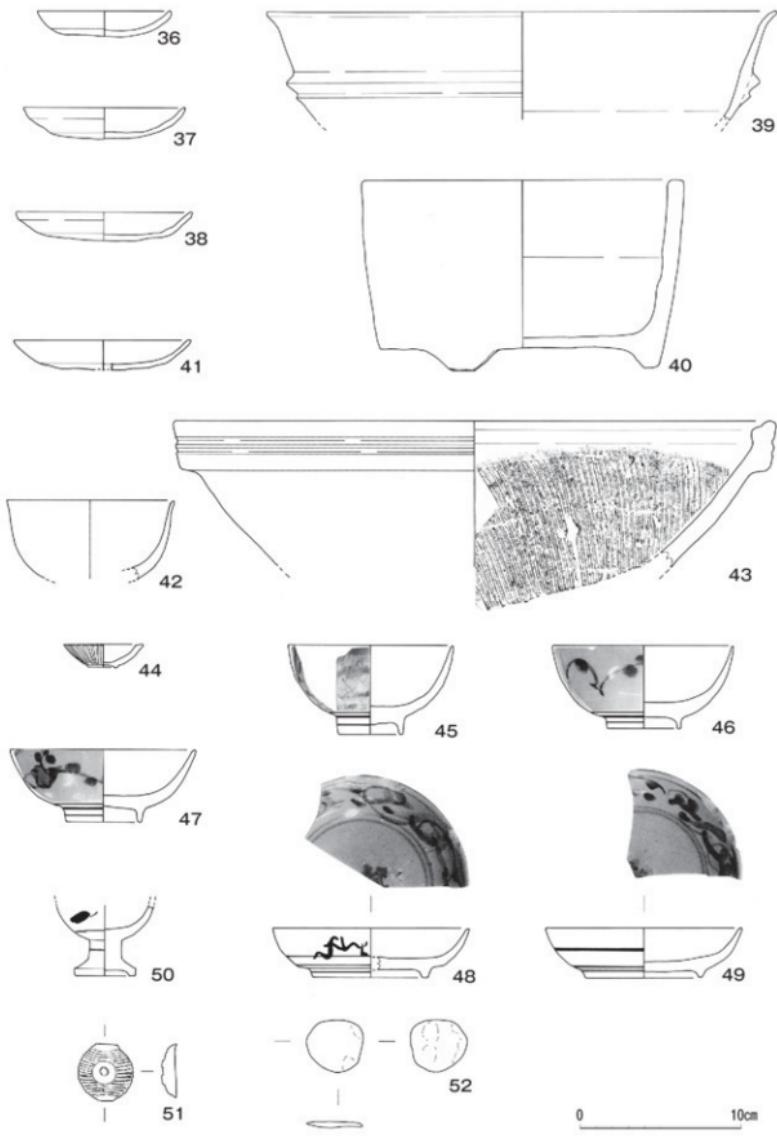
41皿 口径：11.0cm（復元）。器高：1.9cm（残存）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内面は明赤褐色（5YR 5/8）、外・断面は黄橙色（5YR 5/8）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面は回転ナデ調整を施し、体部内面に柿袖をかけている。底面は回転糸切り。灯明皿と思われる。近世のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-41、写真図版22-2-41）

42肥前青緑釉陶器碗 口径：10.4cm（復元）。器高：5.0cm（残存）。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・断面は灰白色（2.5Y 7/1）、外面は緑灰色（5G 6/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に銅緑釉、体部内面に透明釉をかけ分けている。佐賀県嬉野市内野山窯の製品。17世紀末～18世紀前半のものと思われる。第2遺構面に属する。（第16図-42、写真図版22-2-42）

43摺鉢 口径：37.2cm（復元）。器高：9.1cm（残存）。厚さ：1.0～1.5cm。色調：内・外・断面はにぶい赤褐色（5YR 4/3）。胎土：密。直径1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内面は9条を1単位とするスリ目を施し、その上端はスリ消していない。17世紀～18世紀前半の堺焼と思われる。第2遺構面に属する。（第16図-43、写真図版22-2-43）

磁器

44白磁紅皿 口径：5.0cm（復元）。高台径：0.15cm。器高：1.4cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/2。型押成形。18世紀後半のもの



第17図 出土遺物 (KKT1998-1) (1)



第18図 出土遺物 (KKT1998-1) (2)

と思われる。第2造構面に属する。(第16図-44、写真図版22-2-44)

45肥前磁器染付碗 口径：10.2cm（復元）。高台径：4.0cm（復元）。器高：5.5cm。厚さ：0.2～1.1cm。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 7/1）、断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：緻密。焼成：やや不良。残存度：1/2。体部外面には文様、高台内面には円を描いている。見込み部は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。第2造構面に属する。(第16図-45、写真図版22-2-45)

46肥前磁器染付碗 口径：11.2cm（復元）。高台径：4.6cm（復元）。器高：5.1cm。厚さ：0.2～0.9cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面には草花文様を描いている。見込み部は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。第2造構面に属する。(第16図-46、写真図版22-2-46)

47肥前磁器染付碗 口径：11.4cm（復元）。高台径：4.7cm（復元）。器高：4.5cm。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/2。体部外面には梅文様を描いている。見込み部は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。第2造構面に属する。(第16図-47、写真図版22-2-47)

48肥前磁器染付皿 口径：12.2cm（復元）。高台径：7.2cm（復元）。器高：3.1cm。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内面は灰白色（2.5Y 7/1）、外面は灰白色（7.5Y 7/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部内外面には文様、高台内面には円を描いている。見込み部にはコンニャク印判による五弁花文が捺されている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。第2造構面に属する。(第16図-48、写真図版22-2-48)

49肥前磁器染付皿 口径：12.2cm（復元）。高台径：7.2cm（復元）。器高：3.1cm。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内・外・断面は灰白色（2.5Y 7/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/4。体部

内面には文様、体部外面には線と高台内面には円を描いている。見込み部にはコンニャク印判による五弁花文が捺されている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。第1遺構面に属する。(第16図-49、写真図版22-1-49)

50肥前磁器染付仏飯器 高台径：3.6cm（復元）。器高：4.4cm（残存）。厚さ：0.3～1.0cm。色調：内・外面は明緑灰色（10GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面には文様、脚部には線を描いている。底部は削り出し成形されている。18世紀

後半～19世紀後半のものと思われる。第2遺構面に属する。(第16図-50、写真図版22-2-50)

土製品

51泥面子 長さ：3.5cm。幅：3.4cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：にぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。江戸時代の玩具と思われる。第1遺構面に属する。(第16図-51、写真図版22-1-51)

52円盤状土製品 長さ：3.2cm。幅：3.5cm。厚さ：0.4 cm。色調：にぶい橙色（10YR 7/3）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。手づくねによる成形で、指頭痕が残っている。用途不明遺物である。第2遺構面に属する。(第16図-52、写真図版22-2-52)

青銅製品

53鏡 松樹双鳥鏡 面径：7.8cm。縁高：3.4cm。鏡体の厚さ：0.1cm。縁は久保智康のII類、すなわち中縁である（久保1997、1999）。鉢は欠損しており形状は不明である。懸垂用の孔が2箇所空たれており、御正跡などとして用いられたとみられる。内区は欠損部の右に樹木の幹と思われる表現が残り、葉の形状から松樹であろう。内区向かって上部に対向する双鳥が配され、雀の表現である。左下の流水表現にやや硬化がみられるが、双鳥の配置が向かって左に定型化しておらず、12世紀後半のものと思われる。第2遺構面（谷状遺構B）最下層で巨石の脇から出土した。(第16図-53、第18図-53、巻頭写真図版8-2、写真図版23-1・2-53)

これら以外に、1993-1次調査の出土遺物と接合したものがあった（第10図-7、第11図-11）。両遺物の詳細は前章第3節で述べているが、7は15～16世紀初頭のものと思われる瓦質羽釜、11は17世紀代信楽焼と思われる陶器摺鉢である。これらはいずれも第2遺構面に属す。以上報告してきたうち第2遺構面包含層出土の遺物は、第2遺構面全体が谷状遺構Bの範囲内に属すため、谷状遺構Bの出土遺物である。

(村上・實盛)

第5章 上清滻遺跡（KKT1998-2）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区は、現国道163号と清滻川とに挟まれた場所にあたり、1993-1次調査の南隣、1998-1次調査の東隣にあたる。1993-1次調査で、安全のため調査対象外としていた地区について、工事の進行に合わせ調査できる状況となったため1998-1次調査に続けて、東側と西側の2地区に分け反転で発掘調査を行なった。発掘調査地区的現況は改修前清滻川の右岸にあたっていた。約10cmの表土下で、石で護岸された近世後期以降の街道を検出した。その後上層の街道を形成する上層等を取り除き、遺構面を検出した（第19図）。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第19図）。

KKT1998-2 土層説明

- 1 表土
- 2 盛土
- 3 搾乱
- 4 撥壁裏込
- 5 漆喰の様なもの
- 6 灰オリーブ色砂礫層 5Y 5/3
- 7 暗緑灰色砂質土 10GY 4/1

（村上・實盛）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するものであった。検出した主な遺構は、上層の街道と（写真図版7-1）、旧河川（谷状遺構A）、旧河川（谷状遺構C）である（第19図）。

旧河川（谷状遺構A） 調査地区的西端から、Y=-30427までの範囲で検出した谷状遺構である。右岸のみ一部を検出した。1993-1次調査で検出した谷状遺構Aと一連の遺構である。検出できた長さは9.3mあり、右岸の東端上端の標高はT.P.+148.651m、西端上端はT.P.+148.093m、検出できた範囲の最深部はT.P.+147.573mであった（巻頭写真図版3-2、写真図版7-2）。

土師器皿・壺（第22図-64・65）、須恵器坏（第22図-66）、瓦器碗（第21図-54）、青磁碗（第22図-69）、土製品（第21図-63）、石製品（第22図-70・第23図-71）、銅錢（第23図-72・73・75・76）などが出土した。

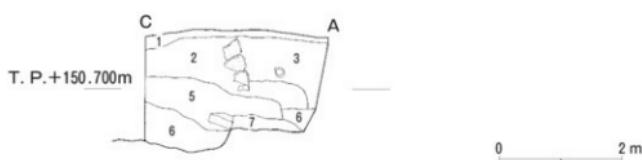
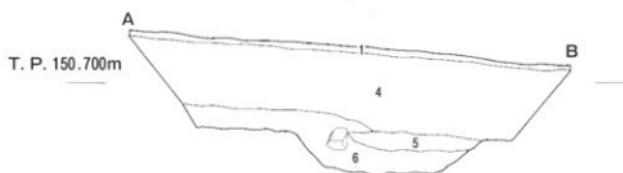
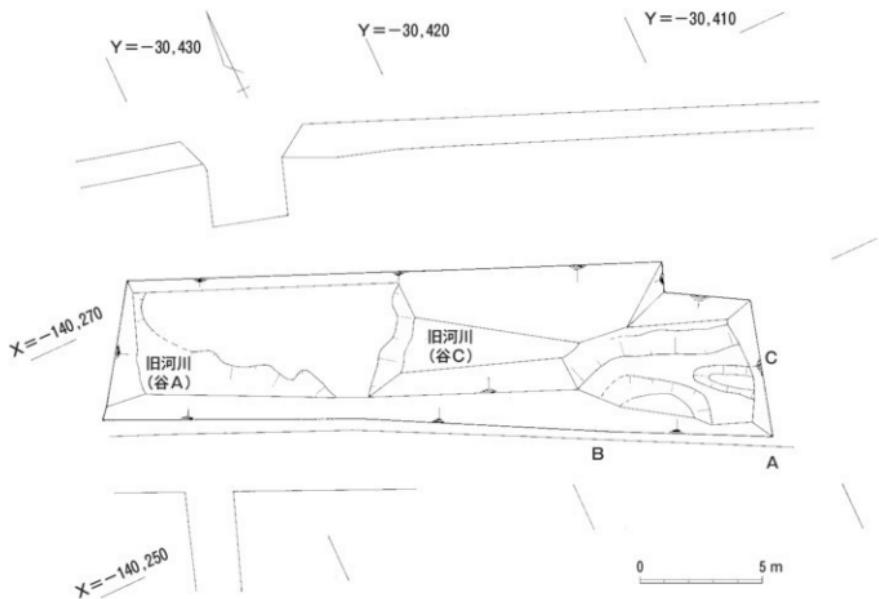
旧河川（谷状遺構C） 調査地区的東端から、Y=-30426までの範囲で検出した谷状遺構である。調査区南端でのみ両岸を検出し、幅は8.4m、深さ2.3mであった。遺構は南西から北東へと向かい、扇状に広がる。遺構内には花崗岩が多く転落する。調査区南端での東側上端の標高はT.P.+149.183m、西側上端はT.P.+148.546m、下端は北西端がT.P.+147.457m、南西端はT.P.+147.120m、検出できた最深部はT.P.+146.920mであった（巻頭写真図版3-1、写真図版8-1・2）。

瓦器碗（第22図-67・68）、銅錢（第23図-74・77）などが出土した。

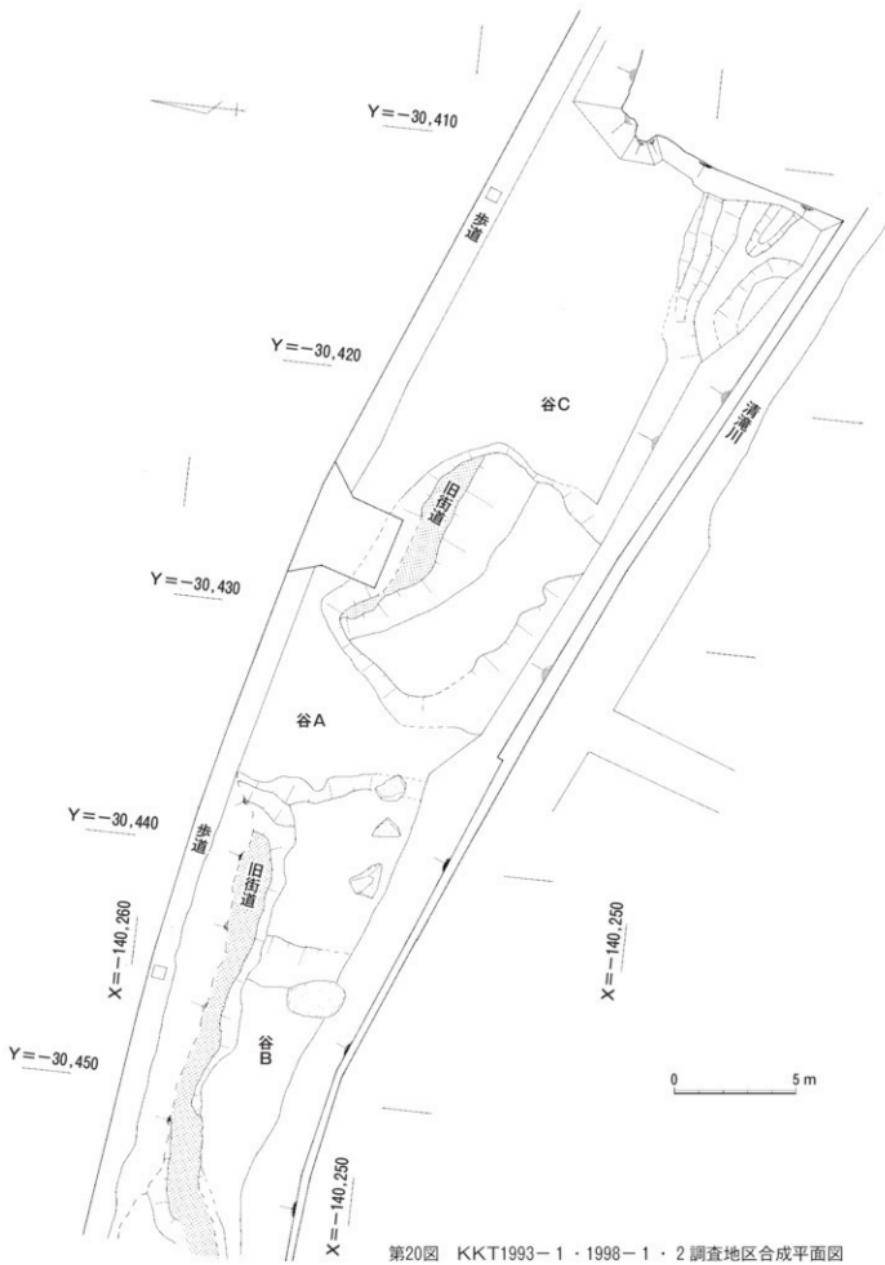
谷状遺構A・Cは、調査中いずれも「旧河川」として取り扱われていたが、今回周辺調査との対応関係を検討した結果別個の谷状遺構であることが判明したため分離し、遺物についても出土地区によって弁別した。遺物はすべて「旧河川」出土とされており、本書でも将来の混亂を避けるためその表記を残すこととする。

ここまで調査により、1993-1・1998-1・2次すべての図面を合成することができ、谷状遺構AからCと旧街道の配置関係が判明した（第20図）。

（實盛）



第19図 調査地区平面図・断面図 (KKT1998-2)



第20図 KKT1993-1・1998-1・2調査地区合成平面図

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

土師質土器

55培塔 口径：30.2cm（復元）。器高：5.1cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外面はにぶい橙色（5YR 7/4）、断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや密。直径2mm以下の長石・黒色砂粒・赤色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内外面ともにヨコナデ調整を施している。体部外面下半部にはスス・炭化物が付着している。江戸時代のものと思われる。（第21図-55、写真図版24-1-55）

瓦質土器

56浅鉢 口径：31.6cm（復元）。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.9cm。色調：内・外面は黄灰色（2.5Y 4/1）、断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・雲母・黒色粒子をやや多く含む。焼成：やや不良。断面は酸化炎焼成の様子を呈する。残存度：小片。体部内外面はヨコナデ調整を施している。14世紀後半～15世紀代のものと思われる。（第21図-56、写真図版24-1-56）

陶器

57摺鉢 口径：25.6cm（復元）。器高：10.5cm（残存）。厚さ：0.8～2.0cm。色調：内面は掲灰色（5YR 5/1）、外面は赤灰色（2.5YR 4/1）、断面と底部外面は赤色（10R 5/6）。胎土：やや粗。直径3mm以下の長石・石英を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部内面は8条を1単位とするスリ目を施し、その上端は強い回転ナデによりスリ消している。18世紀～19世紀前半の堀焼と思われる。（第21図-57、写真図版24-1-57）

磁器

58肥前磁器染付碗 口径：10.8cm（復元）。高台径：4.6cm（復元）。器高：6.3cm。厚さ：0.2～1.1cm。色調：内・外面は明緑灰色（7.5GY 8/1）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面には文様、高台内面には円を描いている。見込み部は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。（第21図-58、写真図版24-1-58）

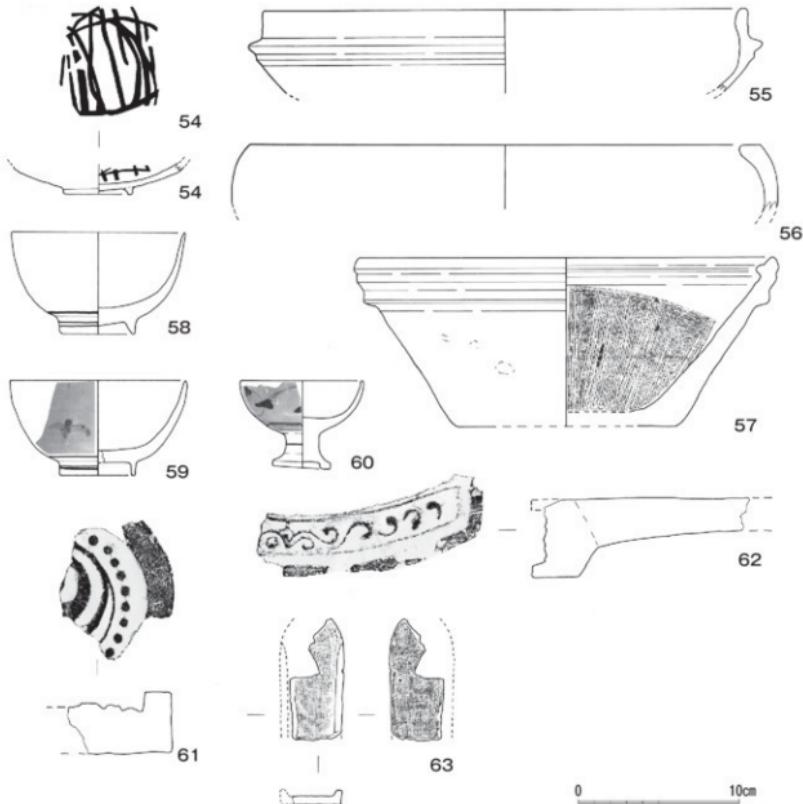
59肥前磁器染付碗 口径：11.0cm（復元）。高台径：4.6cm（復元）。器高：5.9cm。厚さ：0.2～0.8cm。色調：内・外面は灰白色（7.5Y 8/1）、断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/4。体部外面には文様を描いている。18世紀中葉～18世紀末のものと思われる。（第21図-59、写真図版24-1-59）

60肥前磁器染付仏飯器 口径：7.4cm。高台径：3.4cm。器高：5.3～5.4cm。厚さ：0.2～1.0cm。色調：内・外面は灰白色（2.5GY 8/1）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：4/5。体部外面には文様、脚部には線を描いている。底部は削り出し成形されている。18世紀後半～19世紀後半のものと思われる。（第21図-60、写真図版24-1-60）

瓦

61巴文軒丸瓦 外縁高：1.2cm。厚さ：1.5～2.7cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は灰白色（7.5Y 7/1）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。巴文の周間に9個以上の珠文が巡る。中世のものと思われる。（第21図-61、写真図版24-1-61）

62唐草文軒平瓦 外縁高：0.8cm。厚さ：2.0～4.8cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（7.5Y 6/1）。胎土：密。直径1mm程度の黒色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。頸部瓦当裏面はヨコナデ調整を施している。外縁の内側に1条の圓線を巡らす。瓦当貼付技法によ



第21図 出土遺物 (KKT1998-2) (1)

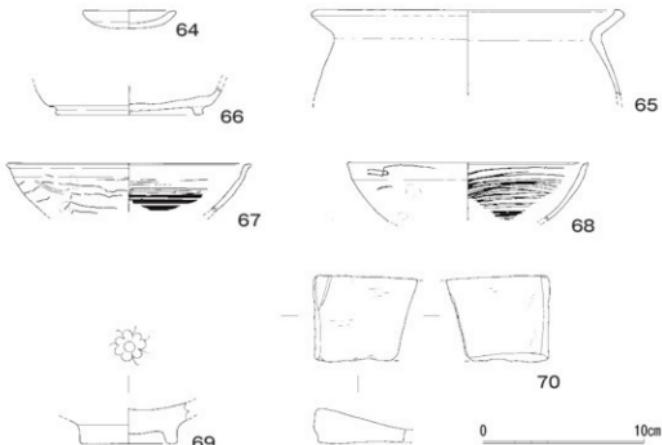
る成形。15世紀末～16世紀代のものと思われる。(第21図-62、写真図版24-1-62)

2. 旧河川（谷状遺構A）出土遺物

土器器

64皿 口径：5.8cm（復元）。器高：1.1cm。厚さ：0.4cm。色調：内・外面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：やや密。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。内外面の全体にススが付着していることから灯明皿と思われる。Jタイプ。14世紀代のものと思われる。(第22図-64、写真図版24-2-64)

65甕 口径：18.2cm（復元）。器高：5.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外面は橙色（5YR 7/6）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：密。直径2mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。平安時代のものと思われる。(第22図-65、写真図版24-2-65)



第22図 出土遺物 (KKT1998-2) (2)

須恵器

66環B 底径：8.2cm（復元）。器高：1.8cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の石英・長石を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。平安時代のものと思われる。（第22図-66、写真図版24-2-66）

瓦器

54碗 底径：4.3cm。器高：1.9cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：内・外面は灰色（N 5/）、断面は灰白色（5Y 7/1）。胎土：やや密。直径1mm程度の黒色・赤色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。底部外面はユビオサエ、見込み部には格子状の暗文を施している。大和型Ⅱ段階A型式で12世紀前半のものと思われる。（第21図-54、写真図版24-2-54）

貿易陶磁器

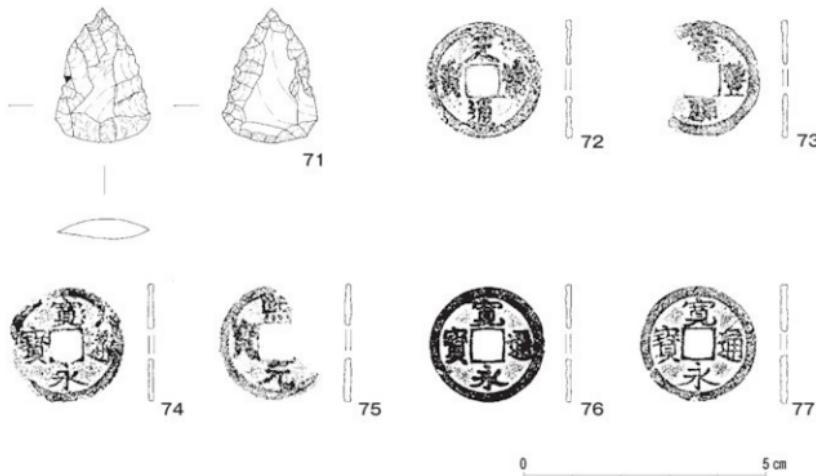
69龍泉窯系青磁碗 底径：6.0cm。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.7～1.6cm。色調：内・外面はオリーブ灰色（10Y 6/2）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。見込み部に線刻による花文が施されている。15世紀代のものと思われる。（第22図-69、写真図版24-2-69）

土製品

63用途不明 長さ：7.1cm（残存）。幅：3.3cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：表面は橙色（5YR 6/8）、裏面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：やや密。直径1mm以下の長石・黒色粒子を含む。焼成：良好。表面全体に施釉され、裏面の一部に垂れている。表裏一体に布目痕がある。江戸時代のものと思われる。（第21図-63、写真図版24-2-63）

石製品

70砥石 長さ：6.4cm（残存）。幅：5.3cm。厚さ：0.8～2.1cm。色調：明赤灰色（2.5YR 7/1）。



第23図 出土遺物 (KKT1998-2) (3)

表裏面ともに使用痕がみられる。(第22図-70、写真図版24-2-70)

71石器 長さ：2.75cm。幅：1.9cm。厚さ：0.4cm。色調：灰色（5Y 4/1）。サスカイト製。縄文時代の石器。(第23図-71、写真図版25-1-71)

銅錢

72天祐通宝 直径：2.4cm。厚さ：0.1cm。1017年初鑄の北宋錢。(第23図-72、写真図版25-1-72)

73元豐通宝 直径：2.4cm。厚さ：0.1cm。1078年初鑄の北宋錢。(第23図-73、写真図版25-1-73)

75熙寧元宝 直径：2.4cm。厚さ：0.1cm。1068年初鑄の北宋錢。(第23図-75、写真図版25-1-75)

76寛永通宝 直径：2.4cm。厚さ：0.1cm。1659年以前に鑄造された「古寛永通宝」。(第23図-76、写真図版25-1-76)

3. 旧河川（谷状遺構C）出土遺物

瓦器

67碗 口径：15.2cm（復元）。器高：3.0cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はユビオサエを施している。大和型Ⅲ段階A型式（古段階）で12世紀後半のものと思われる。(第22図-67、写真図版25-2-67)

68碗 口径：15.0cm（復元）。器高：3.6cm（残存）。厚さ：0.3cm。色調：内面は灰色（N 4/）、外表面は灰色（5Y 6/1）、断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：やや密。直径1mm以下の黒色・赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はユビオサエを施し

ている。大和型Ⅲ段階A型式（新段階）で12世紀末～13世紀初頭のものと思われる。（第22図－68、写真図版25－2－68）

銅錢

74寛永通宝 直径：2.4cm。厚さ：0.1cm。1659年以前に鋳造された「古寛永通宝」。（第23図－74、写真図版25－2－74）

77寛永通宝 直径：2.45cm。厚さ：0.12cm。1659年以前に鋳造された「古寛永通宝」。背面に斜方向の凸の筋が入る。（第23図－77、写真図版25－2－77）

（村上・實盛）

第6章 上清滻遺跡（KKT1999-1）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区は、現国道163号と清滻川とに挟まれた場所にあたり、国道163号発掘調査の第5次調査の南西隣にあたる。調査は東側地区と西側地区に分けて調査した。発掘調査地区的現況は改修前清滻川の右岸と宅地にあたり、旧清滻街道と伝承される箇所であった。約10~20cmの表土下には、近世~中世の包含層が堆積しており、その下層（表土下75cm）が遺構検出面であって、東側調査区において伝承通り街道面を一部で検出した（第15図）。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第15図）。

KKT 1999-1 土層説明

■東側調査区 北壁断面図（A-F断面）

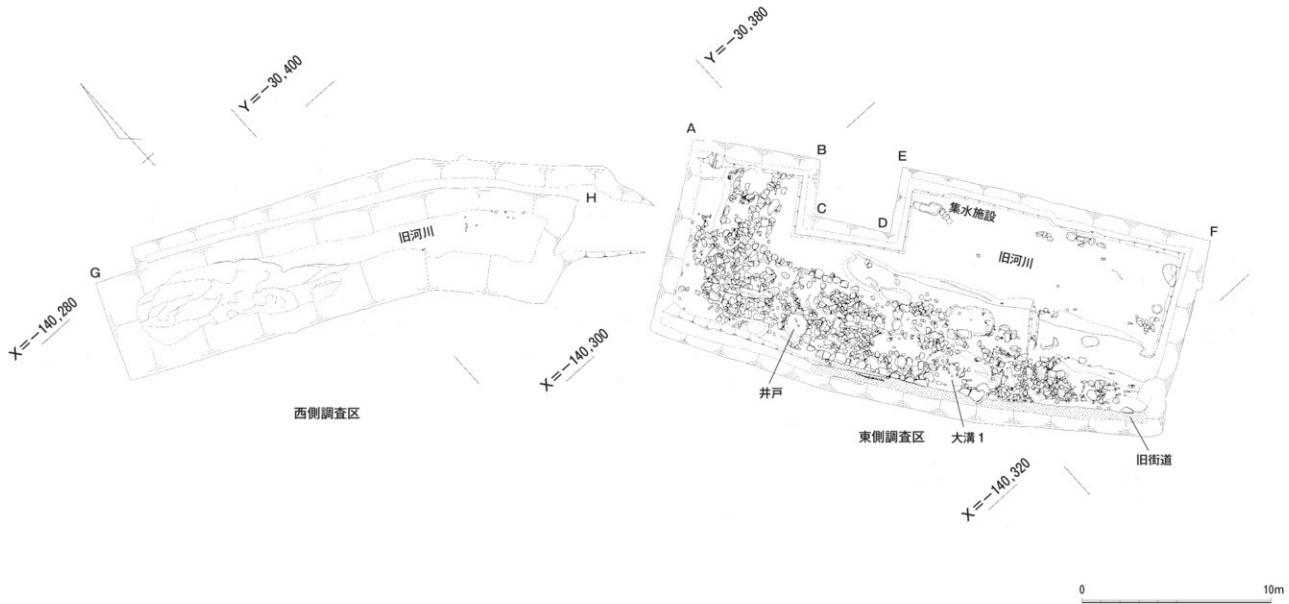
1 耕土	34 灰白色細砂層 10Y 8/1
2 床土A	35 灰白色砂層 N8/
3 床土B	36 黄灰色砂質土 2.5Y 6/1
4 攪乱層	37 灰白色砂層 N8/
5 明青灰色シルト層 5B 7/1	38 灰黄色砂質土 2.5Y 7/2
6 灰黄色砂礫層 2.5Y 7/2	39 にぶい橙色砂層 7.5YR 7/3
7 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/2	40 灰白色砂層 2.5GY 8/1
8 褐灰色砂質土 10YR 6/1	41 灰白色シルト層 2.5G 8/1
9 灰黄褐色砂質土 10YR 6/2	42 灰色砂質土 N5/ 腐植土混じり
10 淡黄色砂質土 2.5Y 8/3	43 灰白色砂層 2.5GY 8/1
11 灰白色シルト層 7.5Y 8/2	44 明緑灰色砂層 7.5GY 8/1
12 灰白色シルト層 7.5Y 7/1	45 淡黄色シルト層 5Y 8/3
13 灰白色砂質土 10YR 8/2	46 黄灰色砂質土 2.5Y 6/1
14 にぶい褐色砂質土 7.5YR 6/3	47 青灰色砂質土 5PB6/1
15 灰白色シルト層 7.5Y 8/1	48 緑灰色砂質土 10G 6/1
16 浅黄橙色砂質土 10YR 8/3	49 灰白色砂質土 5Y 7/1
17 浅黄色砂質土 2.5Y 7/3	50 淡黄色シルト層 5Y 8/4
18 褐灰色砂層 10YR 6/1	51 灰白色砂層 2.5Y 8/2に明青灰色シルト 5B 7/1混じり
19 灰白色粘土層 10YR 8/2	52 灰色礫混じり層 5Y 6/1
20 灰白色砂層 10YR 8/1	53 灰白色砂層 7.5Y 8/2
21 灰白色砂層 10YR 7/1	54 灰白色シルト層 10Y 8/1
22 褐灰色砂質土 10YR 6/1	55 灰白色砂層 7.5Y 8/1
23 灰白色砂質土 10YR 7/1	56 明緑灰色シルト層 10G 7/1
24 灰白色シルト層 10Y 8/2	57 灰色砂質土 7.5Y 6/1
25 灰白色砂層 10YR 8/2	58 淡黄色砂層 2.5Y 8/4
26 灰黄色砂質土 2.5Y 7/2	59 明緑灰色砂層 10G 7/1
27 灰白色シルト層 5GY 8/1	60 灰白色砂質土 2.5Y 7/1
28 灰白色砂層 7.5YR 8/2	61 灰白色砂礫層 2.5Y 7/1
29 灰白色砂質土 2.5Y 7/1	62 にぶい黄橙色砂層 10YR 7/3
30 灰白色砂層 5Y 7/1	63 明青灰色砂層 5BG 7/1
31 灰色砂質土 5Y 5/1	64 灰白色砂層 7.5Y 8/1
32 灰白色礫混じり層 5Y 8/1	65 灰白色砂層 7.5Y 7/1
33 灰色砂質土 7.5Y 6/1	

66	灰色砂質土	7.5Y 5/1	71	明緑灰色シルト層	10G 7/1
67	明緑灰色砂層	10G7/1	72	明青灰色砂層	5B 7/1
68	淡黄色砂層	2.5Y 8/3	73	灰褐色砂礫層	7.5YR 6/2
69	灰白色砂層	7.5Y 7/1	74	灰白色シルト層	10Y 8/1
70	灰白色砂層	2.5Y 7/1	75	灰白色砂礫層	10Y 8/1

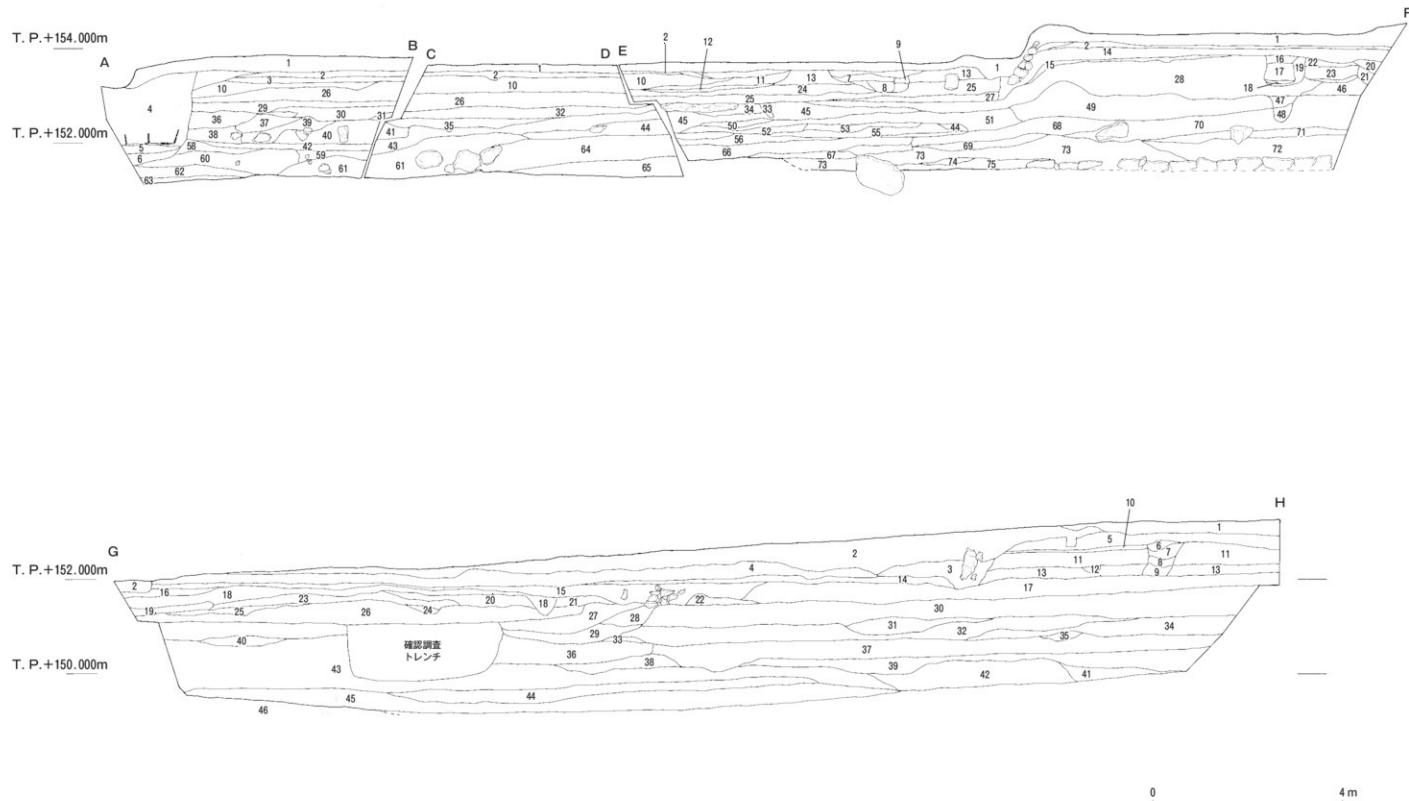
■西側調査区 北壁断面図 (G - H断面)

1	盛土及び旧耕土		25	灰白色シルト層	2.5Y 7/1
2	攪乱層		26	浅黄色砂層	2.5Y 7/3
3	耕土の上に攪乱混じる		27	灰白色砂礫混じり層	2.5Y 7/1
4	耕土		28	灰白色細砂層	2.5Y 8/1
5	床土		29	明黄褐色砂礫混じり層	10YR 7/6
6	淡黄色砂層	2.5Y 8/4	30	明緑灰色砂質土	10GY 7/1
7	浅黄色砂質土	2.5Y 7/3	31	淡黄色砂層	2.5Y 8/3 シルト層がプロック状に入る
8	灰黄色砂質土	2.5Y 7/2	32	緑灰色砂質土	5G 6/1 腐植混じり
9	灰黄色砂層	2.5Y 7/2	33	明オリーブ灰色シルト層	2.5GY 7/1
10	淡黄色シルト層	7.5Y 8/3	34	明緑灰色砂質土	10G 7/1
11	暗灰黄色砂質土	2.5Y 5/2	35	灰白色細砂層	10Y 7/1
12	灰白色砂層	7.5Y 8/1	36	明オリーブ灰色シルト層	5GY 7/1
13	灰オリーブ色砂質土	5Y 6/2	37	明黄褐色砂層	10YR 7/6 磨及び石混じり
14	黄灰色砂質土	2.5Y 6/1	38	黄色シルト層	2.5Y 8/6
15	灰オリーブ色砂質土	5Y 6/2	39	灰白色砂層	10Y 7/2
16	灰黄色砂質土	2.5Y 7/2	40	灰黄色シルト層	2.5Y 7/2
17	灰白色砂層	10YR 8/2	41	灰色粘質土	7.5Y 5/1
18	明黄褐色粘質土	10YR 7/6	42	明黄褐色砂礫層	2.5Y 6/6
19	灰白色砂層	2.5Y 8/1	43	黄灰色砂層及びシルト層	2.5Y 6/1
20	灰白色シルト層	2.5Y 7/1	44	灰色シルト層	5Y 5/1
21	にぶい黄色砂質土	2.5Y 6/3	45	灰色砂層	5Y 6/1
22	灰白色砂層	2.5Y 6/1	46	軟岩土	
23	にぶい黄色砂質土	2.5Y 6/3			
24	灰白色砂層	10YR 7/1			

(實盛)



第24図 調査地区平面図 (KKT1999-1)



第25図 調査地区断面図 (KKT1999-1)

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するものであった。検出した主な遺構は、旧街道、旧河川、大溝1、井戸である（第3～6図）。

旧街道 東側調査区の南壁沿いで長さ18mにわたって検出した。街道は片側の肩のみ検出し、一部に護岸の石列が残存していた。検出層位から江戸時代の街道とみられる。検出できた幅は最大で約0.8mであった。街道面の標高は南東端でT.P.+153.240m、北西端はT.P.+152.390mであった（写真図版9-2）。

旧河川 東側調査区の北半部、西側調査区のはば全域で検出した。河川肩部は左岸のみ一部を検出した。検出できた幅は約6m以上、深さは東側調査区で約1.5m、西側調査区で約1.7mである。右岸は国道163号建設地の調査でも検出しており、調査の空白地内にあるものとみられる。おそらくは幅10mほどであろう。第7次調査（野島2006）で検出した上の池へと流れ込む河川の上流の河川である。河川内最下層から方形に打ち削られた人頭大の花崗岩が2個並んでいる石列を検出しており（第25図断面図にのみ記載・写真図版11-1）、第5次調査（野島2006）で検出した大溝の延長方向にあたっていて、大溝が今回検出した旧河川に合流する箇所に関連して機能した施設である可能性がある。検出した左岸の上端の標高は東側調査区でT.P.+152.960m、西側調査区ではT.P.+150.380m、検出できた範囲の底部は東側調査区でT.P.+151.390m、西側調査区でT.P.+148.630mであった（写真図版10-1・2、11-1、12-2）。

土師器皿・羽釜（第26図-79～81）、須恵器・須恵質土器（第26図-82・83）、瓦質羽釜（第26図-84）、瓦（第26図-86）、砥石（第26図-87）など14～15世紀代を中心とした時期の遺物が出土した。また上層から江戸期の陶器（第26図-85）が出土した。

大溝1 東側調査区の南半部で検出した。左岸は旧街道の護岸石列を肩としている。東端では幅約2m、深さ約0.8mで西へ行くほど広くなって幅約4.5m、深さ約0.5mとなり、旧河川に合流する。大溝全城に人頭大の花崗岩を用いた石敷きがみられ、旧河川への合流部には大溝からの水の流れを調整するL字状の石列が存在する。鎌倉時代を中心とした時期の遺構である。上端の標高はT.P.+153.240m、西端の合流部の上端はT.P.+152.630m、検出できた範囲の底部は東端がT.P.+152.450m、西端はT.P.+152.150mであった（巻頭写真図版4-1、写真図版10-1、11-2）。

瓦器碗（第26図-88）などが出土した。

井戸 東側調査区のX=-140.306、Y=-30.385付近で検出した。直径1.7m、残存していた深さ1mで石組みの井戸である。井戸内からは図示していないが土師器皿が出土しており、室町時代の井戸とみられる。石組み上端の標高はT.P.+152.610m、底部はT.P.+151.600mであった（写真図版12-1）。

（實盛）

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

石製品

78砥石 長さ：4.6cm（残存）。幅：4.3cm。厚さ：0.3cm。色調：暗灰色（N 3/）。粘板岩製。表面裏面ともに使用痕がみられる。端部の一部が刃部状であることから石庖丁の転用も考えられる。（第26図-78、写真図版26-1-78）

2. 旧河川出土遺物

土師器

79皿 口径：7.8cm（復元）。器高：1.2cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。14世紀代のものと思われる。（第26図-79、写真図版26-2-79）

80皿 口径：14.6cm（復元）。器高：1.5cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内・外・断面はぶい黄橙色（10YR 7/2）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。口縁端部は面取りされている。Jaタイプ。14世紀代のものと思われる。（第26図-80、写真図版26-2-80）

81羽釜 口径：20.0cm（復元）。器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・外・断面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：密。直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。鍔の接着部の内面には梢円形のユビオサエ痕がみられる。口縁端部は外側に短く折り返し丸くおさめている。14世紀代のものと思われる。（第26図-81、写真図版26-2-81）

須恵器

82杯B 口径：16.0cm（復元）。底径：11.6cm（復元）。器高：5.1cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。9世紀中頃の平安時代のものと思われる。（第26図-82、写真図版26-2-82）

須恵質土器

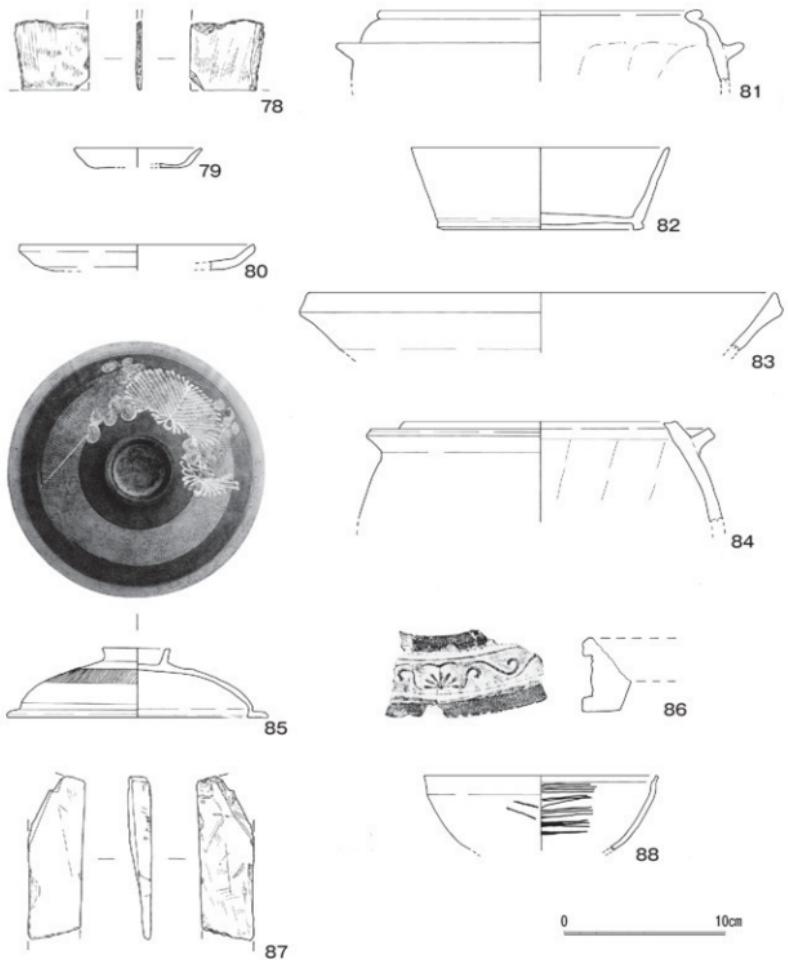
83束播系片口鉢 口径：29.0cm（復元）。器高：3.7cm（残存）。厚さ：0.6～1.1cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm程度の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部はヨコナデ調整を施している。第II期第2段階で12世紀末～13世紀初頭のものと思われる。（第26図-83、写真図版26-2-83）

瓦質土器

84羽釜 口径：17.0cm（復元）。器高：6.3cm（残存）。厚さ：0.7cm。色調：内・断面は灰白色（7.5Y 8/1）、外面は灰色（N 4/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はヨコナデ調整、体部内面は横方向のヘラナデ調整を施している。14世紀～15世紀代の三足釜と思われる。（第26図-84、写真図版26-2-84）

陶器

85行平鍋の蓋 口径：16.2cm。器高：4.3cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は黄橙色（10YR 8/8）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。体部外面はトビガンナで施紋し、白泥漿でイッチン描き、鉄泥漿で加彩している。18世紀後半以降のものと思われる。（第26図-85、卷頭写真図版9-2、写真図版26-2-85）



第26図 出土遺物 (KKT1999-1)

瓦

86半截菊花唐草文軒平瓦 外縁高: 0.6 cm. 厚さ: 4.5cm. 色調: 内・外・断面は灰色 (5Y 5/1)。胎土: 密。直径 1 mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成: 良好 (須恵質)。残存度: 小片。額部瓦当裏面はヨコナデ調整を施している。瓦当上縁は面取りされている。外縁の内側に 1 条の圓線を

巡らす。瓦当面貼付技法による成形。半截菊花文が盛行する15世紀代のものと思われる。(第26図-86、写真図版26-2-86)

石製品

87砥石 長さ：10.1cm（残存）。幅：3.5cm。厚さ：1.4cm。色調：浅黄色（2.5Y 7/3）。泥岩製。表裏面ともに使用痕がみられる。下端部は意図的に折り取った面を砥石として使用している。(第26図-87、写真図版26-2-87)

3. 大溝1出土遺物

瓦器

88碗 口径：14.4cm（復元）。器高：4.7cm（残存）。厚さ：0.15～0.3cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキは省略化が著しく、体部内面の圓線ヘラミガキも省略化がみられる。大和型Ⅲ段階B型式で13世紀前半のものと思われる。(第26図-88、写真図版26-1-88)

(村上・實盛)

第7章 上清滝遺跡（KKT2007-1）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区の現況は改修前清滝川の右岸にあたり、旧清滝街道と伝承される箇所であった。約10～40cmの表土下に街道面を一部で検出した。箇所によっては街道面が幾度も補修されている土層堆積であった（第27図）。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第27図）。

KKT 2007-1 土層説明

■旧街道断面（A-B断面）

- 1 灰色砂質土 N 5/1
- 2 明黄褐色砂質土 10YR 7/6 小石・鉄分混じり
- 3 灰白色砂質土 5Y 7/1 小石混じり
- 4 青灰色砂質土 5B 5/1 小石混じり
- 5 淡黄色粗砂 2.5Y 8/4 小礫少量含む 自然堆積土
- 6 灰白色シルト 10Y 7/1 やや大きめの礫を少々含む 自然堆積土
- 7 灰白色砂礫 2.5Y 7/1 大きな礫を多く含み巨石もみられる 部分的にシルトを含む自然堆積土
- 8 灰白色粗砂 5Y 7/1

※ 1層～4層

旧街道の路面で少なくとも4回程度の補修が考えられる

※ 2層～4層

人為的に固めているのでしまり非常に強い

■旧街道横断面（C-D・E-F断面）

- 1 現表土
- 2 灰色砂質土 5Y 5/1に黄橙色粘土 10YR 7/8ブロック花崗岩粒を含む
人為的に敷いたものと思われる 現在の街道にあたる
- 3 暗緑灰色砂質土 5G 3/1 しまりやや強い
- 4 旧表土 新しい瓦多く出土
- 5 浅黄色粘質土 2.5Y 7/4
- 6 暗青灰色砂質土 5B 3/1 しまり非常に強い 道路の補修の土と考える 旧街道にあたる
- 7 灰白色シルト 5Y 8/1 道路の補修の土と考える 旧街道にあたる
- 8 灰色砂質土 5Y 5/1 街道側溝埋土
- 9 浅黄色細砂 2.5Y 7/3 街道側溝埋土
- 10 にぶい黄褐色砂質土 10YR 5/4 山土か？
- 11 灰白色シルト 2.5Y 7/1に赤褐色 5YR 4/8（鉄分）粗砂混入
- 12 灰白色細砂 5Y 8/2 街道側溝埋土
- 13 黒色炭化物層
- 14 花崗岩の崩落もしくは、破碎したものを敷き詰め固めた層
- 15 2層（灰色砂質土 5Y 5/1に黄橙色粘土 10YR 7/8ブロック花崗岩粒を含む）に16層（橙色粘土 7.5YR 6/8）ブロック混入
- 16 橙色粘土 7.5YR 6/8
- 17 14層（花崗岩の崩落もしくは、破碎したものを敷き詰め固めた層）に2層（灰色砂質土 5Y 5/1に黄橙色粘土 10YR 7/8ブロック花崗岩粒を含む）混入

18 10層（にぶい黄褐色砂質土 10YR 5/4）に炭化物混入

※14層～17層

路面補修のため人為的に敷き固めたものと思われる。（旧宅地に近いことからそのための補修か）現在の街道にあたる。

（村上・實盛）

第2節 検出遺構

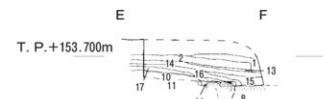
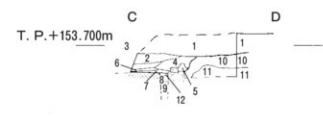
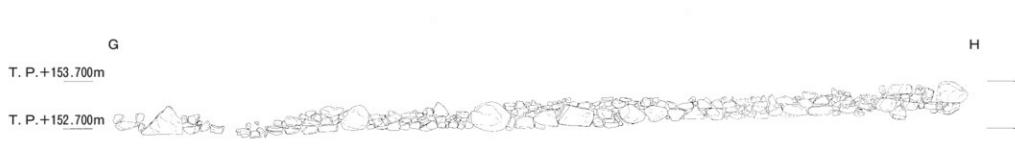
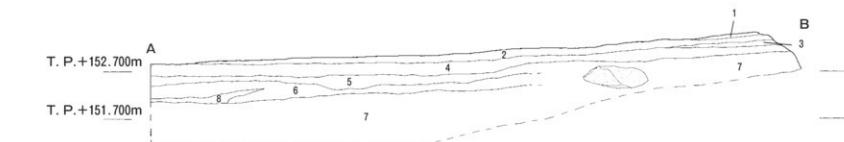
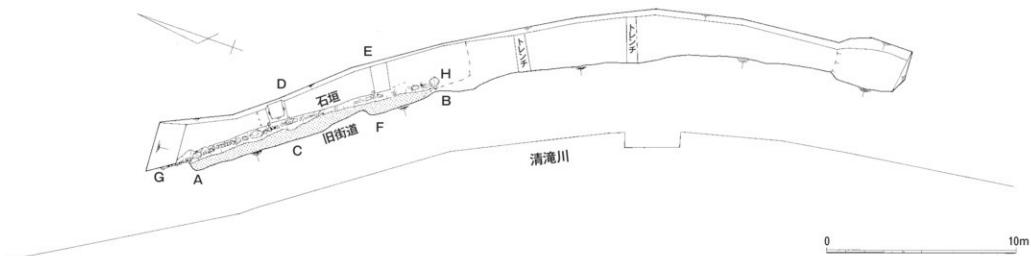
今回の調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するものであった。検出した遺構は、旧街道と石垣である。遺構はすべて調査地区の北半で検出し、南半は遺構が攪乱されている状況であった。攪乱部に設定したトレンチでは石垣のものとみられる石を検出しており、北半で検出した両遺構はいずれも南半まで延びていたとみられる（第27図）。

旧街道 調査地区的北端から、延長13.5mにわたって旧街道を検出した。旧街道の西肩は後世の攪乱により失われており、東肩のみ一部を検出した。検出できた幅は0.8mである。断面観察の結果、この街道は少なくとも4度にわたって整備されており（A-B断面1～4層）、3面の街道面が存在することがわかった。平面図に図示したのは第1街道面の状況である（第27図）。第1街道面の北端の標高はT.P.+152.857m、南端はT.P.+153.498m、第2街道面の北端の標高はT.P.+152.850m、南端はT.P.+153.250m、第3街道面の北端の標高はT.P.+152.610m、南端はT.P.+153.120mであった（巻頭写真図版5-1・2、写真図版13-1・2）。

第1街道面直上層から瓦器碗（第28図-90）、肥前磁器（第28図-91～93）、瓦（第28図-94）、砾石（第28図-95）などが出土した。第1街道面は出土遺物から江戸後期の街道面である。第3街道面は後述のとおり鎌倉期のもの可能性がある。第2街道面は室町～江戸前期のものである可能性があるろう。

石垣 調査地区的北端から、延長18mの石垣を検出した。前述の旧街道のうち最も古い第3街道面に伴い、石垣の下端は第3道面と高さがほぼ一致する。石垣の裏込め土からは、図示していないが黒色土器A類や瀬戸焼壺の小片が出土しており、石垣の築造は鎌倉期までさかのばる可能性がある。街道東側の斜面を擁護するために積まれた石垣であると考えられる。その後街道が4度にわたって補修され、その際には街道側溝の東岸として利用された。側溝は何度か土砂によって埋没し（旧街道横断面8・9・12層）、それに伴い街道の補修が行なわれたと考えられる。石垣上端の標高は北端でT.P.+153.115m、南端はT.P.+154.983m、下端は北端がT.P.+152.560m、南端はT.P.+152.980mであった（巻頭写真図版5-1・2、写真図版13-1・2）。

（村上・實盛）



第27図 調査地区平面図・断面図・石垣立面図 (KKT2007-1)

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

鉄製品

89鎌 長さ：15.8cm。刃部幅：2.75cm。刃部厚さ：0.3cm。残存度：9/10。茎部は欠損している。中世～近世のものと思われる。（第28図-89、写真図版27-1-89）

2. 第1街道面の直上層出土遺物

瓦器

90碗 口径：13.2cm（復元）。器高：3.0cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：内面は暗灰色（N 3/）、外側は灰色（N 4/）、断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部はヨコナデ調整を施している。体部外面のヘラミガキは省略化が著しく、体部内面の圓線ヘラミガキも省略化がみられる。大和型Ⅲ段階D型式で13世紀後半のものと思われる。（第28図-90、写真図版27-2-90）

磁器

91肥前磁器染付碗 口径：11.0cm（復元）。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面には文花を描いている。18世紀前半～18世紀中葉のものと思われる。（第28図-91、写真図版27-2-91）

92肥前磁器染付筒型碗 口径：7.0cm（復元）。器高：4.2cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外・断面は灰白色（5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面と口縁部内面に文様を描いている。18世紀後半～幕末のものと思われる。（第28図-92、写真図版27-2-92）

93肥前磁器染付蓋付碗の蓋 口径：10.0cm（復元）。器高：1.7cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外・断面は灰白色（10Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に文様と口縁部内面に線を描いている。18世紀後半～幕末のものと思われる。（第28図-93、写真図版27-2-93）

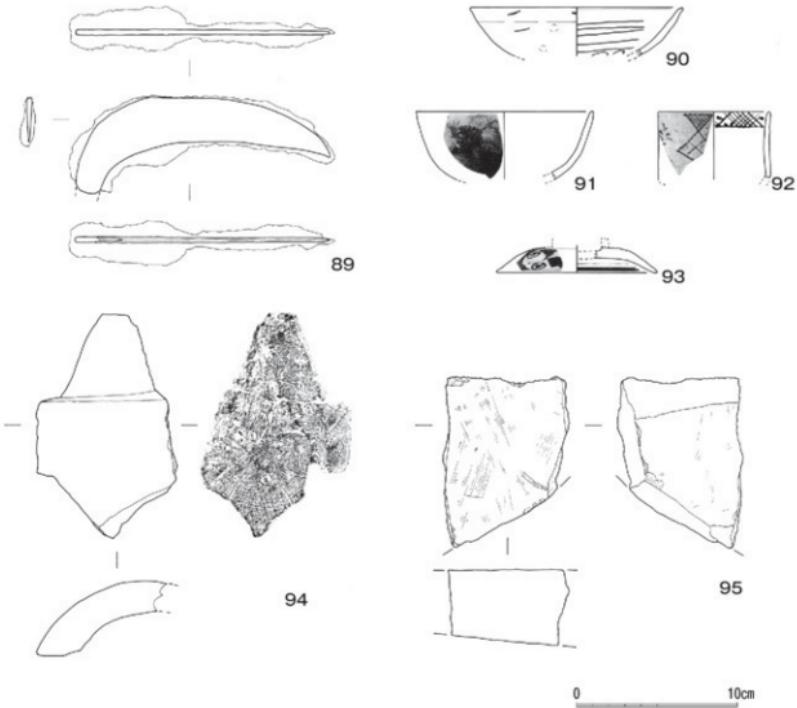
瓦

94丸瓦 長さ：14.0 cm（残存）。幅：8.7cm。厚さ：2.2cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。凹面に布目痕がみられる。一部にススが付着し赤変色している部分がみられることから、2次的な火を受けている可能性がある。中世のものと思われる。（第28図-94、写真図版27-2-94）

石製品

95砥石 長さ：10.6cm（残存）。幅：7.8cm（残存）。厚さ：4.7cm。泥岩質。表裏面ともに使用痕がみられる。（第28図-95、写真図版27-2-95）

（村上・實盛）



第28図 出土遺物 (KKT2007-1)

第8章 上清滻遺跡・清滻街道（KKT2014-1）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区は、清滻川の左岸にあたり、清滻第1トンネルの南側にあたる。発掘調査地区的現況は改修前清滻川の左岸にあたり、旧清滻街道と伝承される箇所であった。調査は1地区から4地区までに分け、1地区、2地区と3地区、4地区の3分割で調査を行なった。約10~20cmの表土および旧耕土下で第1遺構面を検出し、伝承通り街道面を一部で検出した（第29図）。その後上層の街道を形成する土等を取り除き、第2遺構面を検出し、この面でも街道面を検出した（第30図）。

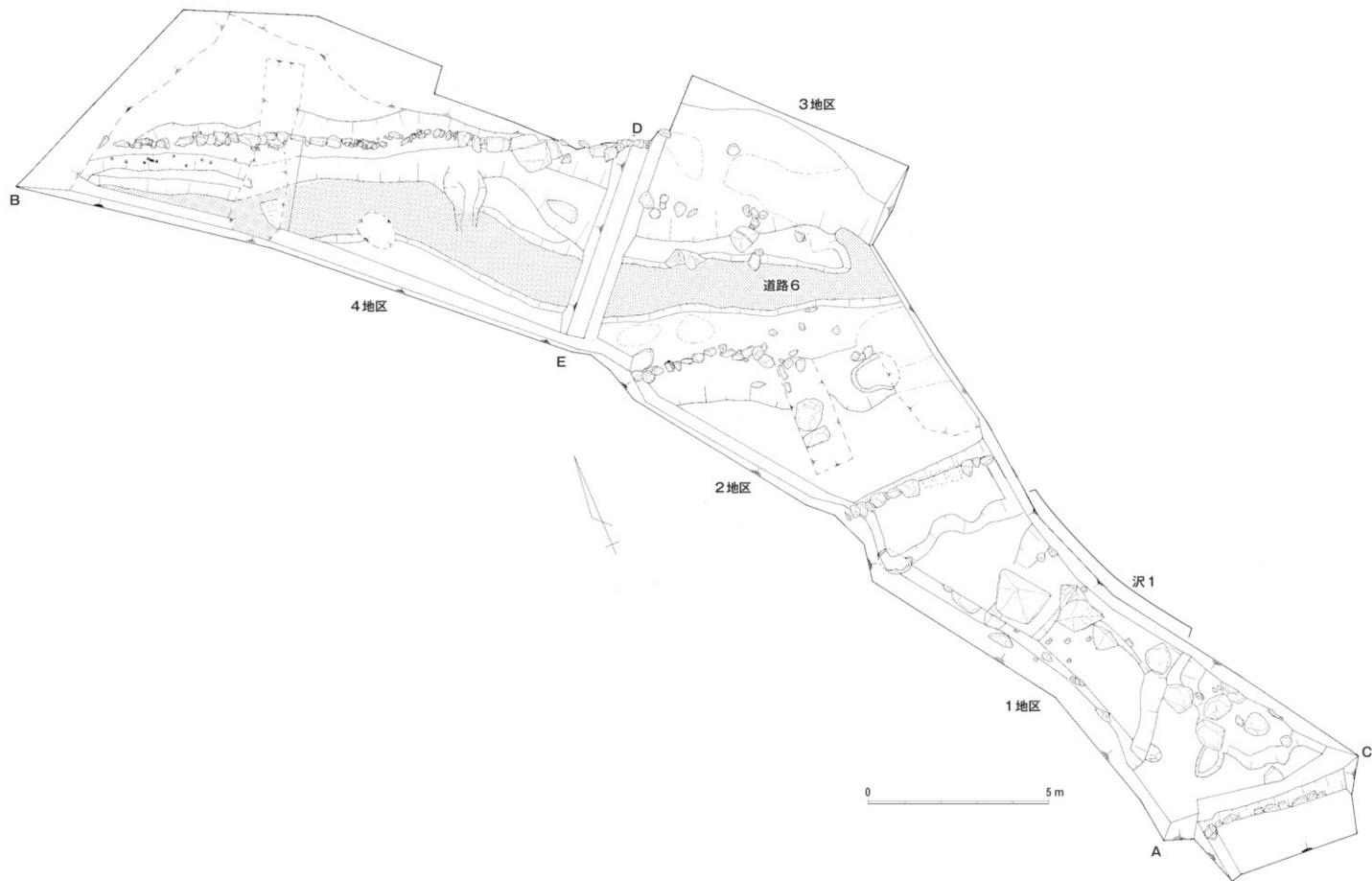
以下、壁面の各土層の説明を述べる（第31図）。

KKT2014-1 土層説明

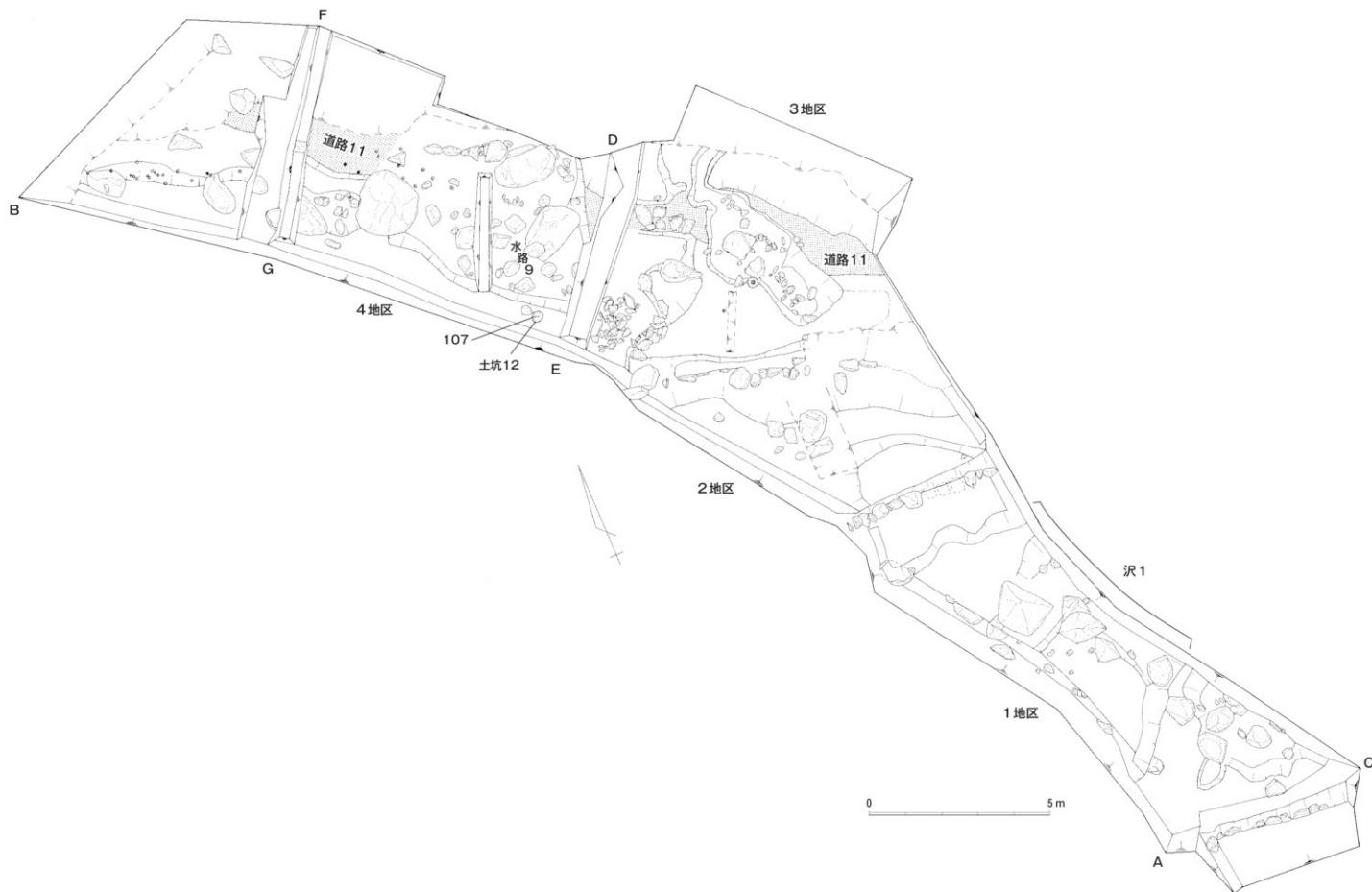
- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1 表土 | 32 暗灰色砂質土 10YR 6/1 包含層 |
| 2 耕土 | 33 32層（暗灰色砂質土 10YR 6/1）が明褐色 7.5YR 5/6に変色 |
| 3 床土 | 34 灰白色砂質土 2.5Y 7/1 粗砂混じり |
| 4 旧表土 石組みが機能している時のもの | 35 灰色砂質土 5Y 6/1 岩混入 しまり強い |
| 5 灰白色砂質土 5Y 8/2 花崗岩の粉状のもの混入 | 36 暗灰色砂質土 10YR 6/1 しまり無し |
| 6 灰白色砂質土 5Y 7/2 | 37 灰オーリープ色砂質土 5Y 6/2 |
| 7 灰白色砂質土 5Y 7/1 | 38 灰白色砂質土 10YR 7/1 |
| 8 灰白色砂質土 5Y 8/1 | 39 灰白色砂質土 2.5Y 7/1 |
| 9 灰白色砂質土 7.5Y 7/1 | 40 灰白色シルト N 7/ |
| 10 灰白色砂質土 2.5Y 7/1 | 41 灰白色砂質土 7.5Y 7/2 第1遺構面 |
| 11 灰白色砂質土 2.5Y 7/1の一部が鉄分により橙色に変色 | 42 暗灰色砂質土 7.5YR 6/1 粘性若干あり水路9 |
| 12 13層（灰白色砂質土 10Y 7/1）が鉄分により橙色に変色 | 43 灰白色砂礫層 5Y 7/1 |
| 13 灰白色砂質土 10Y 7/1 | 44 灰白色砂質土 10Y 7/1 |
| 14 灰色砂質土 7.5Y 6/1 | 45 灰白色砂質土 10Y 7/1に粗砂少量混入 |
| 15 灰色粗砂混じり砂質土 5Y 6/1 | 46 灰色粘質土 N 6/ |
| 16 黄灰色砂質土 2.5Y 6/1 | 47 45層（灰白色砂質土 10Y 7/1に粗砂少量混入）に灰白色粘質土 7.5Y 8/1少量混入 |
| 17 灰白色砂質土 5Y 8/2 | 48 灰白色粘質土 7.5Y 8/1 人工的に埋めた土と思われる |
| 18 灰白色シルト 2.5Y 7/1 | 49 浅黄色砂質土 2.5Y 7/3 |
| 19 灰色砂質土 7.5Y 5/1 粗砂混じり | 50 灰黄色砂質土 2.5Y 7/2 |
| 20 黄褐色砂質土 2.5Y 7/2 粗砂・砾混じり | 51 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/4 |
| 21 明褐色灰色粘質土 7.5YR 7/1 花崗岩混じり | 52 灰オーリープ色砂質土 7.5Y 6/2 |
| 22 暗灰色砂質土 10YR 6/1 | 53 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/3 |
| 23 灰色砂質土 7.5Y 6/1 岩混入 | 54 灰白色粗砂 5Y 7/2 しまりやや強い |
| 24 青灰色砂質土 5B 5/1 | 55 灰白色砂質土 2.5Y 8/1 |
| 25 青灰色砂質土 5B 6/1 粗砂・巨岩混入 | 56 灰白色粗砂 5Y 8/1 しまりやや強い |
| 26 暗灰色粘質土 10YR 4/1 | 57 灰白色シルト N 7/ |
| 27 灰白色砂質土 10YR 7/1 花崗岩片混入 | 58 灰白色砂質土 7.5Y 7/2 |
| 28 灰白色シルト 7.5Y 8/2 | 59 灰色砂質土 7.5Y 6/1 |
| 29 灰色砂質土 N 6/ | 60 灰白色砂礫層 5Y 7/1 |
| 30 灰色砂質土 7.5Y 6/1 | 61 灰白色砂質土 7.5Y 7/1 |
| 31 灰白色砂質土 2.5Y 7/1 | |

- 62 灰黄色砂質土 2.5Y 7/2に黄橙色粘土
10YR 8/6ブロック混入
- 63 にぶい黄橙色砂質土 10YR 7/2
- 64 青灰色砂質土 10BG 5/1 護岸工事による
埋土 近世以降か
- 65 灰色砂質土 N 6/ 石垣工事と関連するも
のか
- 66 灰色砂質土 10Y 6/1
- 67 灰白色砂質土 7.5Y 7/1
- 68 花崗岩の碎けた砂
- 69 浅黄色砂質土 5Y 7/3
- 70 灰白色砂質土 5Y 7/1
- 71 灰色砂質土 5Y 6/1 石積みが機能しなく
なった後の埋土
- 72 灰白色粗砂 7.5Y 7/1
- 73 明オリーブ灰色 2.5GY 7/1 軟花崗岩混
じり 地山

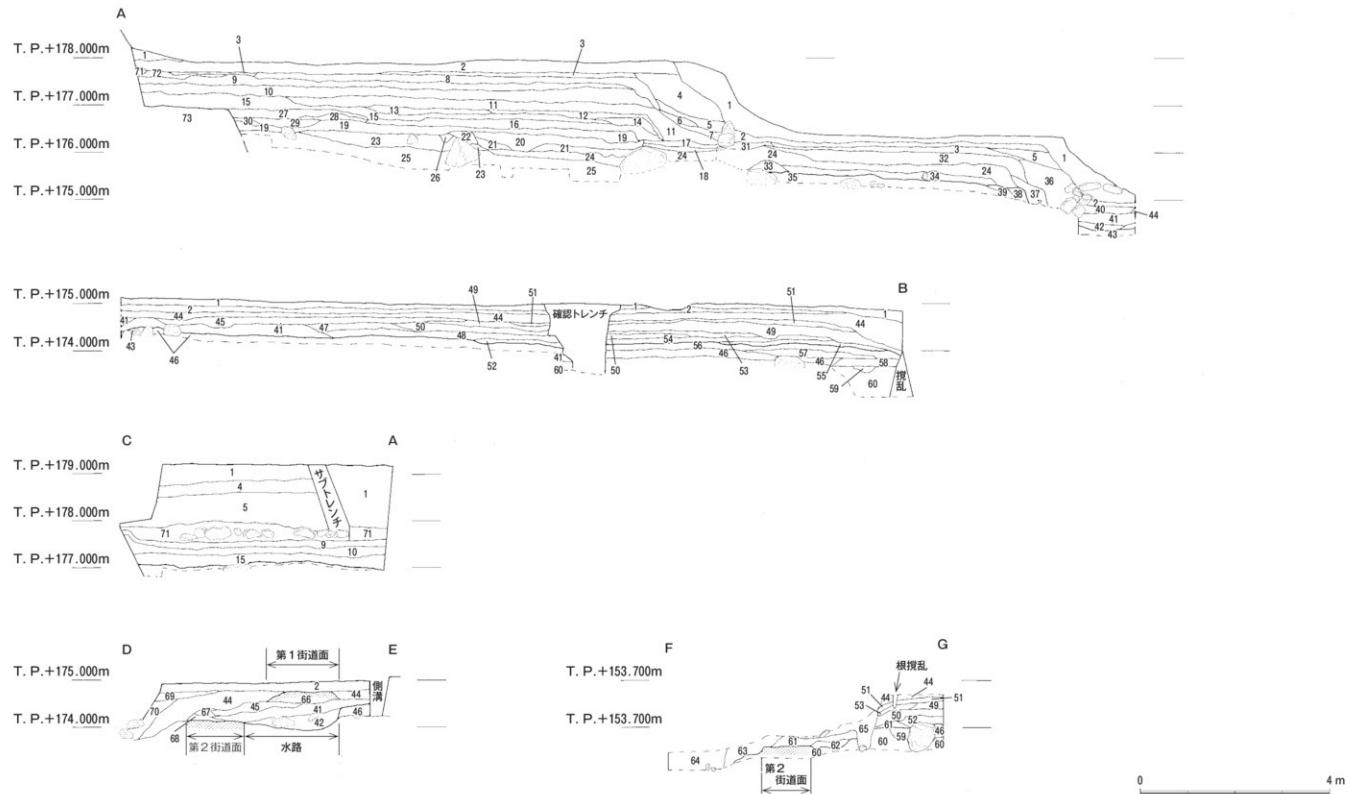
(實盛)



第29図 調査地区第1遺構面平面図 (KKT2014-1)



第30図 調査地区第2遺構面平面図 (KKT2014-1)



第31図 調査地区断面図 (KKT2014-1)

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構はおもに中世から近世に属するものであった。遺構は第1遺構面・第2遺構面それぞれで、総数12基検出した。検出した主な遺構は、道路（街道）、沢、土坑である（第3～6図）。なおこの調査では、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構番号は遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でついている。

1. 第1遺構面

道路6 3・4地区において検出した道路で、旧清滝街道の街道面である。道路面は幅最大1.6m、検出できた総延長は22.4mである。街道上面の標高は、東端でT.P.+174.869m、西端でT.P.+174.521mであった。周囲より一段高くなっている。（写真図版14-1、15-1）。

沢1 1地区において検出した南西側山塊部からの沢である。幅6.5～9m、深さ1mを測る。左岸の上端の標高はT.P.+176.101m、右岸上端はT.P.+176.889m、底部は調査地区東端がT.P.+175.573m、西端はT.P.+175.836mであった。なおこの沢は第2遺構面の段階からすでに存在し、第1遺構面の時期に至るまで存在し、第1遺構面が埋没するのとほぼ同時期に埋没したとみられる（写真図版17-1）。

繩文土器深鉢（第32図-103）、須恵器壺（第32図-104）、青磁碗（第32図-105）などが出土した。

2. 第2遺構面

道路11 3・4地区において検出した道路で、旧清滝街道の街道面である。道路面は検出できた幅最大1.2m、検出できた総延長は18.8mである。街道上面の標高は、東端でT.P.+174.850m、西端でT.P.+174.695mであった。周囲より一段高くなってしまい、3地区西端から4地区東半にかけての範囲は、後述する水路9により切られている（巻頭写真図版6-1、写真図版14-2、15-2、16-1）。

水路9 3地区西端から4地区にかけて、旧街道を切るように検出した南側山塊部からの水路である。南端での幅約2m、街道を切る北側での幅5.5mで、南から北へと折れながら扇状に広がっており、内部には大小の岩が多く堆積していた。南東上端の標高はT.P.+174.533m、南西上端の標高はT.P.+174.237m、北東上端の標高はT.P.+173.714m、北西上端の標高はT.P.+174.157m、底部は南端でT.P.+173.982m、北側でT.P.+173.654mであった（写真図版16-1）。

土坑12 4地区南東隅で検出した。直径0.3m、深さ0.13mで円形を呈する。上端の標高はT.P.+174.285m、下端はT.P.+174.157mであった（写真図版16-1・2）。

古墳時代に属する土師器高壙・壺（第30図-106・107）が出土した。

検出できた街道遺構（道路6・11）はいずれも清滝川左岸で、現況で橋がかかっている箇所へと統く形で検出した（巻頭写真図版6-1・2）。その先の右岸では現在も街道遺構が先へ延びる状況を確認でき（写真図版17-2）、江戸期の遺物も採集した（第32図-102）。この箇所には江戸期にも橋が架かり、ここで清滝川を右岸側へ渡って街道が続いていたとみられる。

（実盛）

第3節 出土遺物

1. 遺物包含層内出土遺物

土師器

96皿 口径：7.0cm。器高：1.4cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は淡黄色（2.5Y 8/3）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。18世紀代のものと思われる。（第32図-96、写真図版29-1-96）

97高坏 最大径：11.5cm（残存）。器高：3.3cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：内面は橙色（7.5YR 7/6）、外面はぶい橙色（7.5YR 7/4）。断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：やや粗。直径4mm以下の長石・石英・雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。坏部外面の側面はヨコナデ調整、坏部内部の底はナデ調整を施している。坏部外面の下部にはユビオサエ痕がみられる。布留3式に属するものと思われる。（第32図-97、写真図版28-2-97）

98甕 口径：12.8cm（復元）。器高：19.7cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内面は橙色（5YR 6/6）、外面は明赤褐色（2.5YR 5/6）、断面は橙色（5YR 7/6）。胎土：やや粗。直径5mm以下の石英・長石・黒色粒子・赤色粒子を多量に含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部内面はヘラケズリ調整、胴部外面はヨコハケ調整を施している。胴部外面の下部にススが付着している。布留3式に属するものと思われる。（第32図-98、写真図版28-2-98）

陶器

99皿 口径：7.0cm（復元）。器高：1.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内面は橙色（5YR 6/8）、外面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/4。体部内外面は回転ナデ調整を施し、口縁部外面と体部内面に柿軸をかけている。底面は回転糸切り。灯明皿と思われる。近世～近代のものと思われる。（第32図-99、写真図版29-1-99）

100灯明具 口径：5.0cm（復元）。底径：4.0cm（復元）。器高：3.5cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：素地は灰白色（2.5Y 8/1）、底部以外の内外面にはオリーブ黄色（5Y 6/3）の釉薬をかけている。胎土：密。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部内側の稜線部の一部に灯心を置くための凹部がある。18世紀後半のものと思われる。（第32図-100、写真図版29-1-100）

101台付き灯明皿 口径：6.2cm（復元）。底径：3.4cm（復元）。器高：4.7cm。厚さ：0.2～1.2cm。色調：素地は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、底部以外の内外面には灰白色（5Y 8/1）の釉薬をかけている。口縁部の一部は、使用によるものと思われる釉薬剥離がみられる。胎土：密。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。底部は回転糸切り。上部皿の口縁端に灯心の痕跡がある。江戸時代のものと思われる。（第32図-101、写真図版29-1-101）

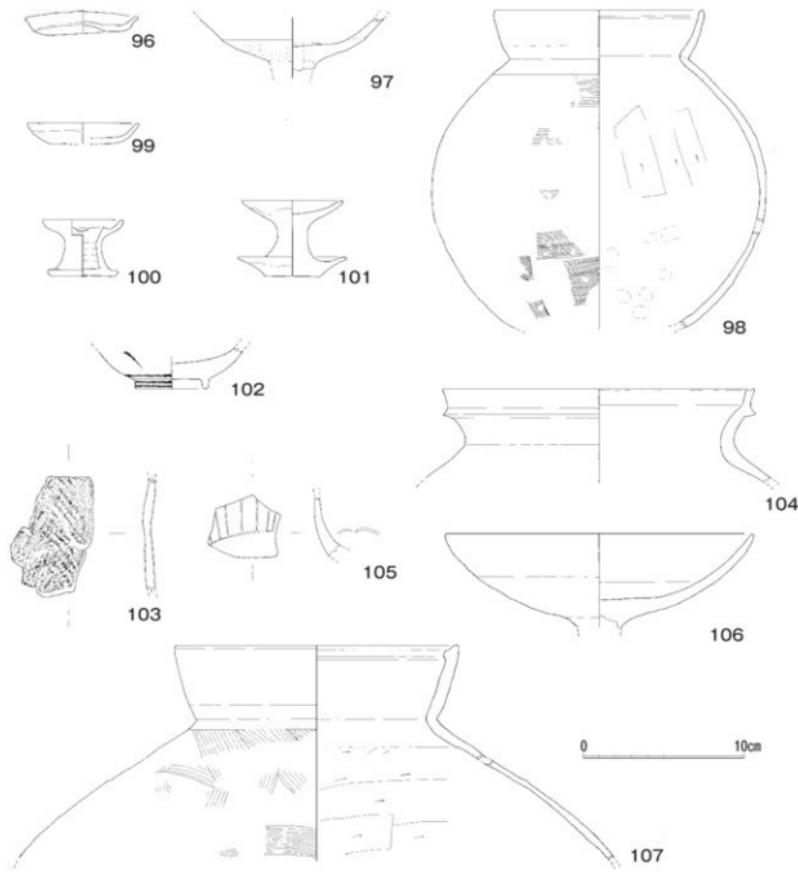
石製品

108石鎌 長さ：1.4cm（残存）。幅：1.7cm。厚さ：0.3cm。色調：灰色（5Y 6/1）。サヌカイト製。绳文時代の石鎌。（第33図-108、写真図版28-1-108）

109石鎌 長さ：3.1cm（残存）。幅：2.9cm。厚さ：0.4cm。色調：暗灰色（5Y 4/1）。サヌカイト製。弥生時代の石鎌と思われる。（第33図-109、写真図版28-1-109）

110尖頭器 長さ：2.5cm（残存）。幅：2.6cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：青灰色（5B 6/1）。サヌカイト製。尖頭器もしくはスクレイバーの一部と思われる。绳文時代のものとみられる。（第33図-110、写真図版28-1-110）

111用途不明 長さ：2.25cm。幅：1.3cm。厚さ：0.75cm。色調：灰白色（2.5Y 8/1）。石材は石英様である。研磨痕が不明なほど丁寧に磨かれている。下部の中央がやや凹状である。（第33図-111、写真図版29-2-111）



第32図 出土遺物 (KKT2014-1) (1)

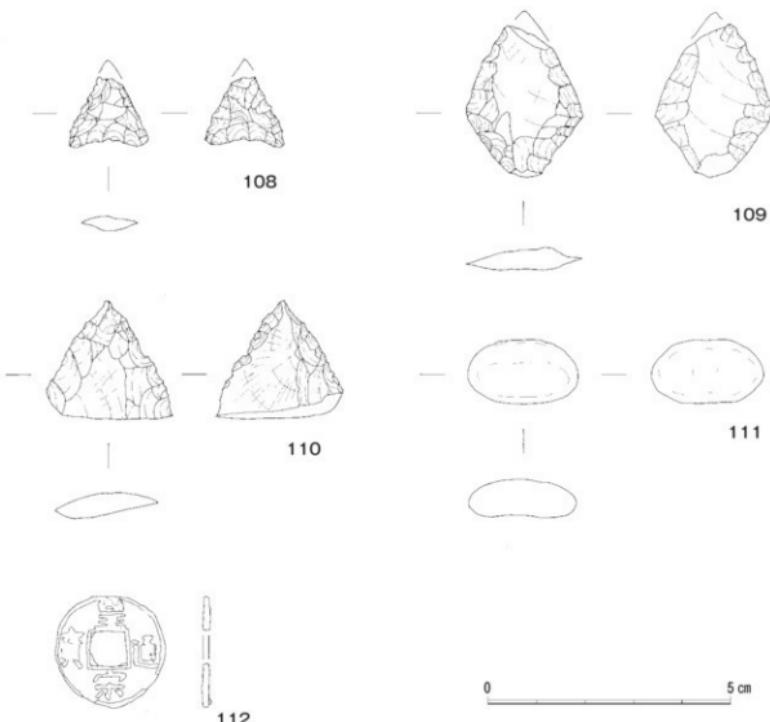
銅錢

112皇宋通宝 直径 : 2.3cm。厚さ : 0.1cm。1039年初鋤の北宋錢。腐食が著しく周縁に欠損部がみられる。模鑄錢の可能性がある。(第33図-112、写真図版29-2-112)

2. 街道面出土遺物

磁器

102肥前器染付碗 高台径 : 4.6cm (復元)。器高 : 2.3cm (残存)。厚さ : 0.4~1.0cm。色調 : 内・外面は明緑灰色 (10GY 8/1)、断面は灰白色 (N 8/1)。胎土 : 繊密。焼成 : 良好。残存度 : 1/3。体部外面に文様を描いている。見込み部は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀中葉~18世紀末のもの



第33図 出土遺物 (KKT2014-1) (2)

と思われる。調査地区外の清流川右岸で、清流街道の遺構が続く箇所（写真図版17-2）での採集遺物である。（第32図-102、写真図版30-1-102）

3. 沢1出土遺物

縄文土器

103深鉢 長さ：7.5。幅：5.1。厚さ：0.4~0.6cm。色調：内面は黄褐色（2.5Y 5/3）、外面はにぶい褐色（7.5YR 6/3）。胎土：粗。直径3mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒子・黒色粒子を多く含む。生駒西麓産の胎土。焼成：良好。残存度：小片。縄文時代前期末～中期前半の大歳山式もしくは船元式と思われる。（第32図-103、写真図版28-1-103）

須恵器

104壺 口径：19.4cm（復元）。器高：5.9cm（残存）。厚さ：0.5~0.9cm。色調：内・外面は灰色（N 6/）。断面は灰赤色（2.5YR 4/2）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の肩部以下に灰色の自然釉（5Y 5/1）、口縁部内面には灰色の自然釉（N 4/）がかかっている。体部外面の口縁端部下に断面三角形の凸帯がみられる。胎土など

から古墳時代中期の陶質土器の可能性が考えられる。(第32図-104、写真図版30-1-104)

貿易陶磁器

105龍泉窯系青磁蓮弁文碗 長さ：3.9cm。幅：4.2cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外面はオリーブ灰色（10Y 5/2）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面には線描き蓮弁文が施され、体部内面に線描きによる弧状の文様（花文か）が施されている。15世紀～16世紀代のものと思われる。(第32図-105、写真図版30-1-105)

4. 土坑12出土遺物

土師器

106高壺 口径：19.0cm（復元）。器高：5.8cm（残存）。厚さ：0.2～0.9cm。色調：内・外面は橙色（5YR 6/6）、断面はにぶい橙色（5YR 7/4）。胎土：密。直径1mm以下の石英・雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整、壺部内面はナデ調整、壺部外面はユビオサエ後ナデ調整を施している。布留4式に属するものと思われる。(第32図-106、写真図版30-2-106)

107壺 口径：17.4cm（復元）。器高：13.2cm（復元・残存）。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）、外・断面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：やや粗。直径3mm以下の石英・長石・黒色粒子・赤色粒子を多量に含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整、胴部内面はヘラケズリ調整、胴部外面はハケ調整を施している。布留4式に属するものと思われる。出土標高はT. P.+174.236mである。(第30図-107、第32図-107、写真図版30-2-107)

(村上・實盛)

第9章 調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

上清滻遺跡で実施した今回の一連の調査では、各調査区で旧清滻街道の遺構を検出し、中世以降の清滻街道のルートを追うことができた。また、中世以前の時期の遺物も若干出土し、知見を得ることができた。以下、特筆すべき遺構・遺物の時期ごとにまとめを行ないたい。

縄文時代 縄文時代の遺物は、1993－1次調査で穂谷式とみられる押型文の深鉢、1998－2次調査で石鑓、2014－1次調査で石鑓などと前期末～中期前半ごろの上器片が出土した。いざれも包含層あるいは沢の埋土からの出土であったが、押型文期の集落は清滻峠を挟んで反対側に位置する田原遺跡で検出しており（野島・櫻井1980）、上清滻遺跡の周辺にも縄文時代の集落が存在した可能性は十分に考えられる。今後のこの地域での発掘調査で、縄文時代の集落が発見できることを期待したい。

古墳時代 2014－1次調査で布留4式の土器を含む土坑を検出し、包含層からも布留3式の土器群の出土があった。周辺ではこの時期の遺構の検出は皆無であり、標高も高く隔離している。調査地点からは平野側の状況も目視できないので、高地から周囲の状況を確認する集落があったとも考え難い。前段階の布留2式期の集落は山麓の岡山南遺跡で検出しており（村上・實盛2016）、近接した時期にはこの地域が交通の要衝だったことで忍岡古墳が築かれる。また、今回遺構を検出した布留4式の時期は大和から河内へと大王墓の築造地が移る時期に近接している。一つの可能性としては、清滻街道の前身となる道が、大和と河内を結ぶ道の一つとして付近に存在しており、そこの交通にかかわりこの地に人の痕跡が残されたのではないかと考えたい。

中世以降 発掘調査を行なった全調査地区で清滻街道の遺構を確認した。1998－1・2次調査で検出した街道の遺構は、構築方法や方向等が一致しており、江戸後期以降の一連の街道であろう。この街道遺構は1998－1次調査で小石により舗装されていた部分があるのを確認しており、これは坂道に対応した整備であろう。

一方、隣接した1993－1次調査ではルートが少し平行にずれる別の街道遺構を検出しており、街道の構築上内より出土した土器から中世の街道遺構と考えられる。すなわち、この場所では中世の街道より少しずれた位置に江戸後期の街道が築かれたことが判明した。次節に述べるように土砂災害等の復旧に伴い街道の位置が変更されたものとみみたい。

1993－1次や1998－1次調査ではこの街道の脇にあたる位置の谷状遺構などから石仏や和鏡が出土している。特に和鏡は巨石の脇から出土しており、特筆すべき出土状況である。和鏡それ自体にも懸垂用の穿孔があり、御正軀等として用いられたとみられる点も注意すべきである。清滻・逢阪地区は巨石信仰が今に残る地域であり、逢阪の村内へと入る清滻街道の分岐道沿いには現在も巨石の狭間に役行者が祀られ信仰されている。これらの遺物はこういった信仰形態と関わり、街道通行の安全等を祈る形でこの場所に遺されたものと考えられる。

1999－1・2007－1次調査でも街道遺構を検出したが、この箇所では街道のルートは中世・近世とともに同じルートを通るものとみられる。2014－1次調査でもほぼ同じルートだったが、若干の位置変更が行われていた。なお、2014－1次調査のみ改修前清滻川左岸で街道遺構を確認した。2007－1次調査地区からは直線距離でおよそ240m離れた箇所であり、その間に河川は幾度も蛇行しながら流れることから、適宜街道を構築しやすい側の岸を利用して街道を構築したものと思われる。

この一連の調査で、国道163号建設による一連の調査（野島2006）と併せ清滻街道を含めた周辺の土地利用状況を復元することが可能になった。旧河川は上流から下流へと蛇行して西へ流れていって、2箇所に溜池（籠池・上の池）がある。その左岸には街道が通っていて、右岸では瓦器窯が操業している。旧河川の、上の池より上流には東からと南からの2本流れてきた大溝が合流する箇所があり、街道は南からの大溝の左岸を通り、奈良方面へと向かっている。その箇所の北方、ひときわ高い箇所には寺院がある（塔の坊）。このように当遺跡は、旧清滻街道を中心として人の動向が遺された遺跡であった。

（實盛）

第2節 清瀧街道について

1. 清瀧街道に関する資料

河内国と大和国を結ぶ東西の道は、竹ノ内街道・暗街道・古堤街道などがあり、清瀧街道は最も北を通るルートである。

以下、これまでの研究で明らかになっている文献や絵図・道標に示されている清瀧街道に関する資料のうち確認できたものまとめ。

1. 正保年間（1644～1647年）の『河内国絵図』には、「中垣内清瀧街道」として大坂京橋を起点として深野池の南端で中垣内街道（古堤街道）と分岐し、寝屋川市堀溝から東へ向って東高野街道と交差し清瀧峠を越えているルートが示されている。
2. 宽文12年（1672年）『河内国大絵図』には大坂京橋を起点として、清瀧越のところに「清瀧越 河内国境より大和高山村マデ拾八丁間（後略）」と記載されている。
3. 延宝3年（1675年）四條駿市郡屋本町の道標には「これより東清瀧やハたみちすじ」「延宝三乙卯年七月五日」と記載されている。
4. 元禄2年（1689年）貝原益軒の『南遊紀行』で「西田原より西の山を越えて、飯盛山の下に出、是を大坂越と云。山路十八町行て、清瀧嶺の茶屋一字あり、是大坂越の嶺なり、此の嶺高からざる故に、路けわしからず、此嶺を下り尽して城村に至る。是飯盛山の北の麓なり。」と記載されている。
5. 享保14年（1729年）『日本輿地通志畿内部 卷第三十五 河内国之九』には、「清瀧嶺 在甲可南村東 経路巨石雙時相對如門」と記載されている。
4. 天保15年（1844年）『上田原村明細帳』には「大和街道清瀧峠越え」と記載されている。
5. 明治15年『甲可村誌』には、「奈良街道（又ハ清瀧街道ト云フ）里道二等ニ属ス 東ハ下田原村ヨリ、西ハ清瀧村ニ至ル 長六町四拾六間幅八尺」と記載されている。
6. 明治15年『大阪府河内国讚良郡都菴村誌』には「里道 村ノ中央ヲ通ス。東方中野村界ヨリ来り、西方堀溝村界ニ至ル、長サ五町四拾八間、幅八尺、土人之ヲ清瀧街道（一ニ大和街道）ト云フ。」と記載されている。
7. 明治15年『大阪府河内国讚良郡南野村誌』には「里道 二条アリ。一ハ西方高野街道ヨリ、北方清瀧村ニ達ス。長拾町、幅八尺、土俗之ヲ山和街道ト云フ。」と記載されている。
8. 明治15年『大阪府河内国讚良郡清瀧村誌』には「清瀧街道、里道二等ニ属ス。東ハ中野村逢阪郷ヨリ、西ハ中野村ニ至ル。長二拾一町四拾九間、幅八尺。」と記載されている。
9. 明治15年『大阪府河内国讚良郡中野村逢阪郷誌』には「奈良街道（一ニ清瀧街道ト云フ）、里道二等ニ属ス。東ハ下田原村ヨリ、西ハ清瀧村ニ至ル。長六町四拾六間、幅八尺。」と記載されている。
10. 『大阪府誌 第五卷』には、清瀧峠について「清瀧の東同名の山頂にして謂はゆる清瀧街道なり、巨石多くして経路を夾み雙び崎ちて相対し宛然門を為せり。斯の門を過ぐれば一縷逶迤として直ちに大和に入る。」と記載されている。
11. 『大阪府誌 第四編』には、清瀧街道について「北河内郡甲可村大字南野に於ける東高野街道より起り、田原村大字下田原和河国界に於いて同郡磐船村より来る磐舟街道を併せ、奈良県生駒郡龍田町に入りて以て、奈良街道に合せり。専河内東北部と大和西北部との間の交通に便ぜるものにして本管内延長一里貳拾七町拾貳間路幅一間五分なり。地勢は全部山地により成り、亭々たる老杉路面を掩ひ、東進するに隨ひ阪路次第に急峻なり。」と記載されている。

2. 清瀧街道の名称について

名称については、上記の資料からも固定したものではなかったことがわかる。それについて山口博氏は、「江戸期の一般的な名称は大和街道逢坂越え又は大和街道清瀧峠越え」であり「明治15年に中野村上郷の名称を清瀧村に改称したことから清瀧街道と呼称するようになったと考える」としている。

明治15年の各村の村誌をみても、この頃に清滻街道の名称が定着したのではないかと思われる。ちなみに、『奈良街道 歴史の道調査報告書 第4集』（大阪府教育委員会編1989）によると、門真市から守口市にかけては地域において、江戸時代から明治時代初期まで「奈良街道・大和街道」と呼称されていたという。「守口街道」という名称は、明治35年から大阪府が「守口街道」の道標を建ててからのことである。

当時は、現代の国道163号のように起点から終点まで固定した名称のものは少なく、例えば明治時代であっても清滲街道と同ルートの道を守口では守口街道と呼ばれていたように、行き先がどこであるかということを示すことも含めて、村の中を通っている道にはその地域の名称を使い、そこを過ぎれば同じルートの一本道であってもその土地の呼称が付けられたのが一般的ではないかと考える。

3. 清滲街道のルートについて

寛文12年の『河内国大絵図』には大坂京橋を起点として、清滲越のところに「清滲越 河内国堺より大和高山村マデ拾八丁卅間（後略）」とあり、『大阪府志 第四編』によると、「北河内郡甲可村大字南野に於ける東高野街道より起り、田原村大字下田原和河国界に於いて同郡磐船村より来る磐舟街道を併せ、奈良県生駒郡龍田町に入りて以って、奈良街道に合せり。」とある。東高野街道より西側は守口街道であった。

つまり奈良県側の終着点については時代により変化があるが、大坂の京橋から発し、多少のルートの変化はあるにしても門真市・守口市を通って、四條畷市に入り、清滲峠を越えて府県境まで通じていたことは間違いないと考える。

4. 清滲街道の前身について

足利健亮氏は『行基年譜』の「天平十三年記」の中にある「直道一所 在自高瀬生馬大山登道 己上河内国茨田郡、摂津国云云」の「直道」を清滲街道としている。つまり、奈良時代前半に行基が新たに建設した道が後の清滲街道であり、『行基道』と呼称される所以であろうか。名称は別として清滲街道のルート付近には、白鳳時代の正法寺跡や平安時代の小松寺跡、中世の街道沿いの集落・寺跡である上清滲遺跡、同じく跡の集落である逢阪遺跡、戦国時代に三好長慶が城主であった飯盛城、同じくキリシタンの田原礼舎が城主であった田原城などが点在しており、古代から道を築くような重要なルートであったと考える。

5. 清滲街道の様子について

上記の資料から「西部のなだらかな道から山間地に通じ急峻な道筋となり、峠付近は巨石に挟まれたような所」であったことがわかる。道幅については、明治15年の各村誌によると村の中を通じていた道が8尺つまり約2.4mであったことがわかる。『大阪府志 第四編』には「路幅一間五分なり。」と記載されている。これはおそらく1.5間のことで約2.7mである。

以上、清滲街道について簡単にまとめてみた。

6. 平成22年の調査で判明した街道

これまで清滲街道に関しては、大阪府教育委員会が発行した『奈良街道 歴史の道調査報告書 第4集』（大阪府教育委員会編1989）に取り上げられているのみであったが、平成22年にこれまで街道のルートが不明であった箇所で清滲街道の遺構を発掘調査した（村上・實盛2011）。

その際に調査した街道は、全長約240mで東西の高低差は約17mであったが、道幅に関しては、それぞれの地区で異なっていた。その大きな原因のひとつは、調査地区的北側に広がっていた耕作地の開墾に伴うものである。耕作地がいつ頃開墾されたかは不明であるが、明治21年測量の地図をみるとすでに現在と同じ地形となっていることから、この頃にはすでに開墾されていたと考えられる。この開墾により街道の北側が大きく削られたことは断面の観察からも判明している。他の原因是、側溝の再掘削にあると考える。当初（時期は不明）付近の溜池から耕作地への給水は、土管を設けた取水

口から行っていたが、後に街道の側溝を利用して別の取水口から給水するようになった。その際に側溝の幅を大きくしたことが道路の幅員を狭めた原因であると考える。ただし、道路の端から側溝の端までを計測すると、そのほとんどが2.5m～3mであった。佐久間貴士氏の「道の幅員を示す場合は、側溝の幅も含めて計測する。」とのご教示からすると、前記したそれぞれの村誌に記載のあった「幅八尺」に合致する。これらの結果により、1. 南側の山裾を削平し道路面を成形している。2. 明治時代の「清瀧村誌」や「中野村誌」によると清瀧街道が「幅八尺」であると記されており、検出した道の幅も約八尺（約2.4m）である。3. 四條畷市域の西端から清瀧峰に至るまでの清瀧街道からほぼ直線的に山裾伝いに続く位置に当たる。といった結果から、この遺構が本来の清瀧街道であると判断できた。

7. 今回検出した街道について

今回の発掘調査で検出した清瀧街道が機能していた時期についてであるが、遺構面までの覆土が浅いことと街道という遺構の性格上、表土内の遺物に關しても重要であると考えたため、人力で掘下げ作業を行った結果、それぞれの遺構から中世から近世を中心とした時期の遺物が出土した。街道に関連する出土遺物は、近世のものが大半を占めており、街道面直上から出土した遺物は、時代の異なったものが混在している。このことは街道という遺構の性格を考えると、現在でも同様であるが道路はその管理のために必ずしも保守整備が必要であるということが挙げられる。特に現在と違って地道があり且つ山間部の山裾に存在していたことから、風雨による道路面の崩壊に対する修復や斜面からの土砂の撒去は頻繁に行われていたものと推察する。また、これは道路に面した側溝の場合と同じことで、溝さらいを頻繁に行いその上で道路の補修を行っていたことも考えられる。これらの行為の結果、集落跡の発掘調査時のように時代ごとに遺物が出土するといった状況ではなかったと考える。

銅錢や瓦・陶磁器が出土したことについては、平安時代から近世以降に存在した街道沿いの集落や寺院、また街道脇の地蔵への供え物に使用した可能性を挙げておきたい。

以上、今回検出した街道についても、幾度となく保守整備が繰り返されていたことが判明した。またそのルートは基本的には清瀧川沿いであるが、時代を経るにしたがって、わずかに変更されていることが判明した。それらの要因としては山間部の南側斜面地からの土砂災害による再整備によるものや耕作地の開墾によるものが考えられる。そのような状況から道幅についても完全に残存している場所は確認できなかった。

しかし、今回確認できた中世以降の街道については、保守整備を重ねて存続し続けたことを考えると、近代以降に様々な社会的要請から、幅員の拡幅などの工事を重ねて旧街道とほぼ同じルートを通じている国道163号として現在も機能しているように、過去からこの街道が河内と大和を結ぶ重要な道筋であったことがわかる。

（村上）

参考文献

- 大阪府教育委員会編1989「奈良街道」歴史の道調査報告書第四集、大阪府教育委員会。
- 久保智康1997「京都国立博物館蔵和鏡」京都国立博物館。
- 久保智康1999「中世・近世の鏡」日本の美術No.394、至文堂。
- 黒田 淳1989「飯盛山城跡の調査」「大東市埋蔵文化財発掘調査概報」1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳2013「飯盛山城遺跡測量調査報告書」大東市教育委員会。
- 古代の土器研究会編1992「都城の土器集成」古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編1993「都城の土器集成」Ⅱ、古代の土器研究会。
- 坂元直哉1968「河内飯盛城」「城」47、関西城郭研究会。
- 櫻井敬夫1972「考古学」「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野鳥稔2006「こども歴史 わたしたちの四條畷」四條畷市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野鳥稔2010「歴史とみどりのまち ふるさと四條畷」四條畷市教育委員会。
- 四條畷市史編さん委員会編2016「四條畷市史」第5巻考古編、四條畷市。
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013「飯盛城跡縄張測量図」大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店。
- 中世土器研究会編1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社。
- 寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」「矢部遺跡」奈良県教育委員会。
- 中井 均1981「飯盛山城」「日本城郭体系」第12巻大阪・兵庫、新人物往来社。
- 中村 浩2001「和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年」芙蓉書房出版。
- 野鳥 稔・櫻井敬夫1980「田原遺跡発掘調査概要」I、四條畷市教育委員会。
- 野鳥 稔2006「上清満遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 平尾兵吾1931「飯盛山城址」「北河内郡史跡史話」。
- 宮崎泰史・藤永正明編2006「年代のものさし」大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 村上 始2006「一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2011「清満街道発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2016「四條畷市文化財調査年報」第3号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2013「飯盛山城跡測量調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 森岡秀人ほか編2003「古墳出現期の土師器と実年代」財團法人大阪府文化財センター。
- 森岡秀人・西村 歩編2006「古式土師器の年代学」財團法人大阪府文化財センター。
- 山口 博編1972「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。

写 真 図 版 1



1. KKT1993 - 1 旧街道 全景（東から）



2. KKT1993 - 1 旧河川 A左岸【西端】遠景（北東から）

写 真 図 版 2



1. KKT1993 - 1 旧河川A左岸【中央】遠景（北から）



2. KKT1993 - 1 旧河川B左岸・谷状遺構A 遠景（北東から）

写 真 図 版 3



1. KKT1993 - 1 上の池の南側岸 遠景（北西から）



2. KKT1993 - 1 発掘調査で出土した石造物

写 真 図 版 4



1. KKT1998 - 1 第1遺構面 旧街道 全景（北西から）



2. KKT1998 - 1 第1遺構面 旧街道 石敷き（南東から）

写 真 図 版 5



1. KKT1998 - 1 第1遺構面 石組みと土管の導水路 全景 (北西から)



2. KKT1998 - 1 第2遺構面 谷状遺構B 石仏出土状況 (北西から)

写 真 図 版 6



1. KKT1998-1 第2遺構面 谷状遺構B 和鏡出土状況（北東から）



2. KKT1998-1 発掘調査で出土した石造物

写 真 図 版 7



1. KKT1998 - 2 上層旧街道 全景（北西から）



2. KKT1998 - 2 西側地区 谷状遺構 A 東肩部 全景（南西から）

写 真 図 版 8



1. KKT1998 - 2 西側地区 谷状遺構 C 全景 (北東から)



2. KKT1998 - 2 東側地区 谷状遺構 C の東肩部 全景 (南西から)

写 真 図 版 9



1. KKT1999 - 1 発掘調査以前 遠景（西から・1999年1月）



2. KKT1999 - 1 東側地区 旧街道の石列 全景（北西から）

写 真 図 版 10



1. KKT1999 - 1 東側地区 旧河川と大溝1 遠景（南東から）



2. KKT1999 - 1 東側地区 旧河川内の集水施設 全景（南東から）

写 真 図 版 11



1. KKT1999 - 1 東側地区 旧河川内最下層の石列 全景（南西から）



2. KKT1999 - 1 東側地区 大溝1内のL字状石組 全景（北西から）

写 真 図 版 12



1. KKT1999 - 1 東側地区 石組み井戸 全景 (南西から)



2. KKT1999 - 1 西側地区 旧河川 全景 (西から)

写 真 図 版 13



1. KKT2007-1 第1街道面 旧街道・石垣 全景（南西から）



2. KKT2007-1 第3街道面 旧街道・石垣 全景（南西から）

写 真 図 版 14



1. KKT2014 - 1 2・3地区 第1遺構面 道路6 全景（南西から）



2. KKT2014 - 1 3地区 第2遺構面 道路11 全景（南東から）

写 真 図 版 15



1. KKT2014 - I 4地区 第1遺構面 道路6 全景 (北西から)



2. KKT2014 - I 4地区 第2遺構面 道路11 全景 (北東から)

写 真 図 版 16



1. KKT2014 - 1 4地区 第2遺構面 水路9・道路11・土坑12 遠景（南東から）



2. KKT2014 - 1 4地区 第2遺構面 土坑12 遺物出土状況（南西から）

写 真 図 版 17



1. KKT2014 - 1 1地区 池1 全景（北西から）



2. KKT2014 - 1 調査地区外 清瀧川右岸沿いの街道（西から）

写 真 図 版 18



1. KKT1993 - 1 出土縄文土器（包含層）



2. KKT1993 - 1 出土遺物（包含層）

写 真 図 版 19

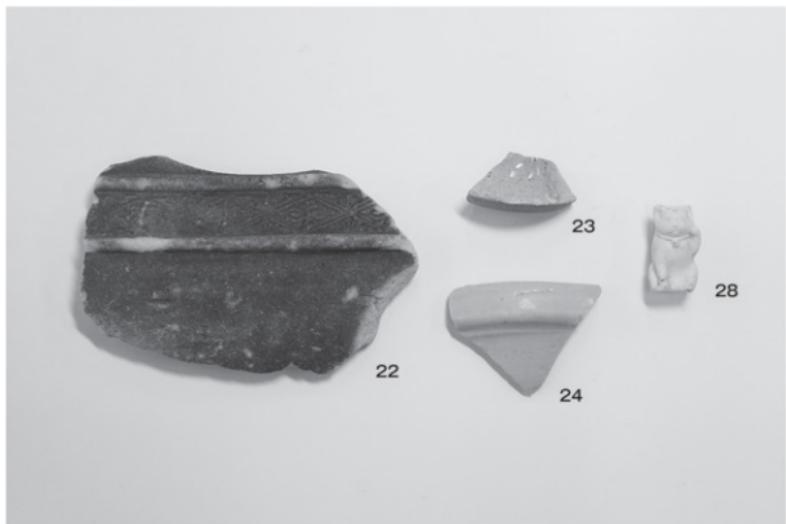


1. KKT1993 - 1 出土遺物（包含層）



2. KKT1993 - 1 出土遺物（包含層）

写 真 図 版 20



1. KKT1993-1 出土遺物（旧河川B）



2. KKT1993-1 出土遺物（旧河川B）

写 真 図 版 21

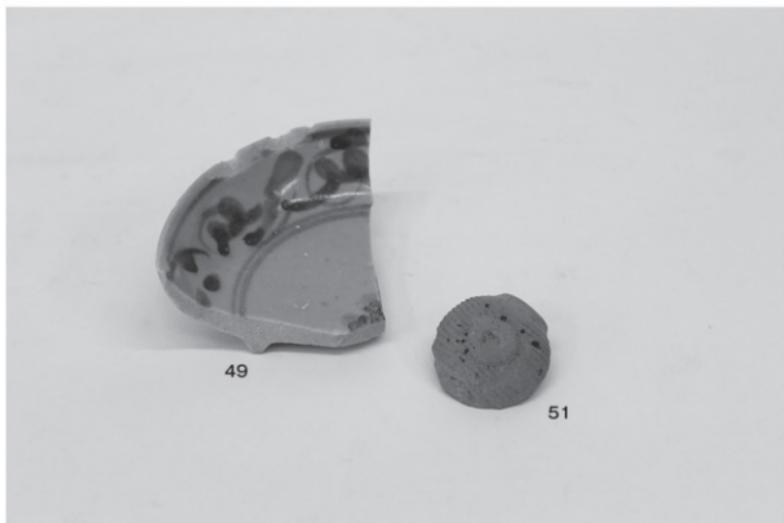


1. KKT1993 - 1 出土遺物（谷状遺構A、池）



2. KKT1993 - 1 出土石仏（池）

写 真 図 版 22



1. KKT1998 - 1 出土遺物（第1遺構面）



2. KKT1998 - 1 出土遺物（谷状遺構B）

写 真 図 版 23



53

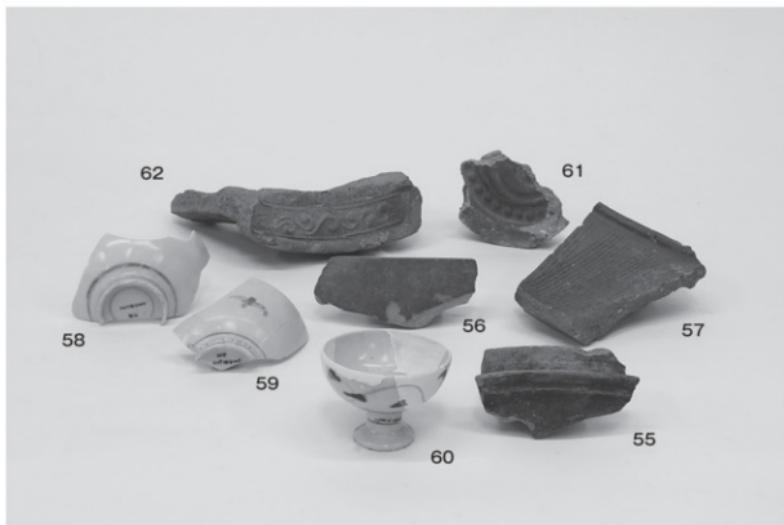
1. KKT1998 - 1 出土銅鏡（谷状造構B）



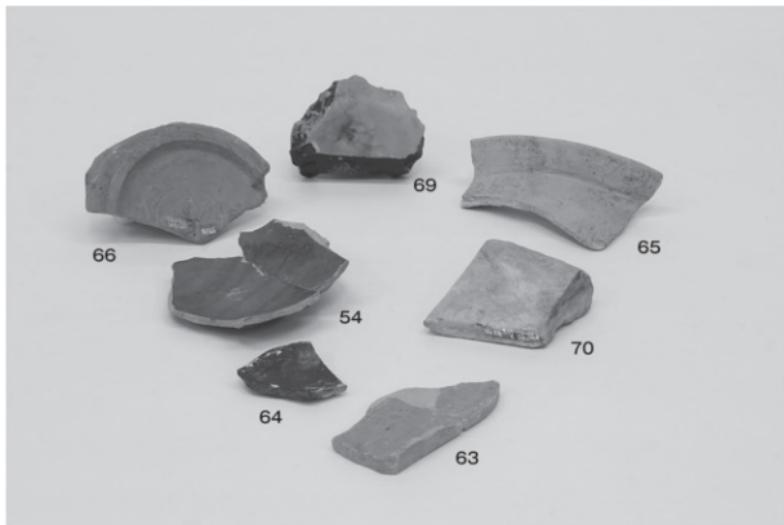
53

2. KKT1998 - 1 出土銅鏡断面見通し（谷状造構B）

写 真 図 版 24

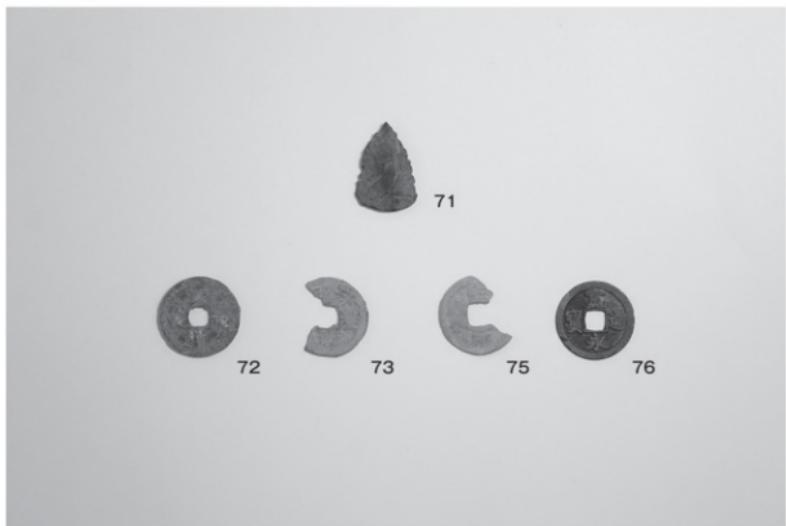


1. KKT1998 - 2 出土遺物（包含層）

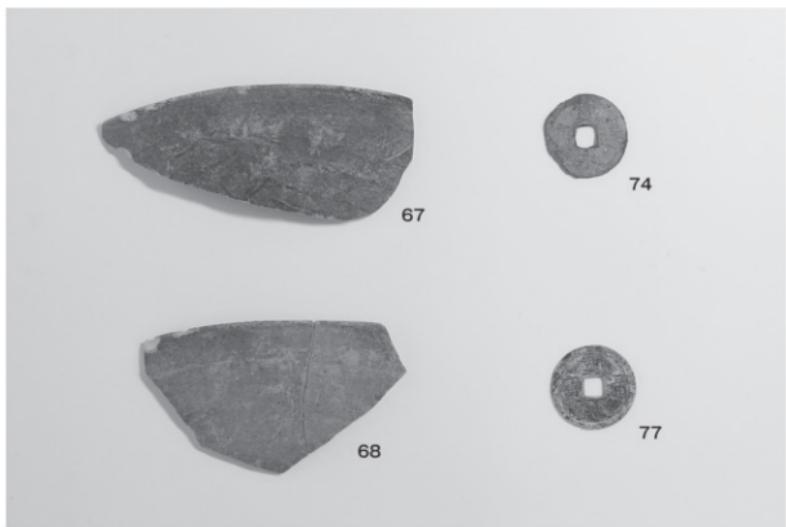


2. KKT1998 - 2 出土遺物（谷状遺構A）

写 真 図 版 25



1. KKT1998-2 出土遺物（谷状遺構A）



2. KKT1998-2 出土遺物（谷状遺構C）

写 真 図 版 26



1. KKT1999 - 1 出土遺物（包含層・大溝1）



2. KKT1999 - 1 出土遺物（旧河川）

写 真 図 版 27



1. KKT2007 - 1 出土鉄鎌（包含層）

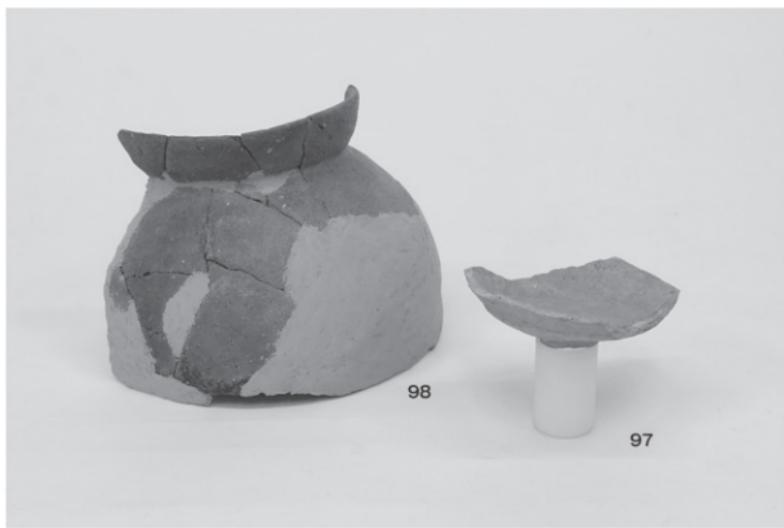


2. KKT2007 - 1 出土遺物（第1街道面）

写 真 図 版 28



1. KKT2014 - 1 出土遺物（縄文時代等）

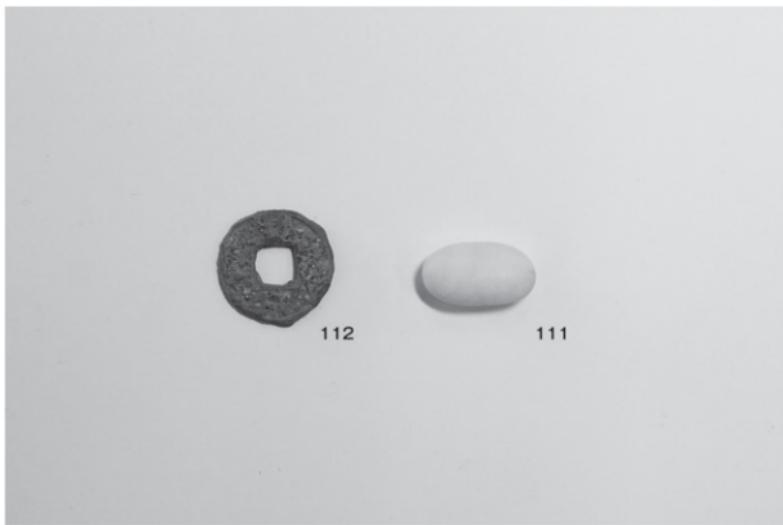


2. KKT2014 - 1 出土遺物（包含層）

写 真 図 版 29

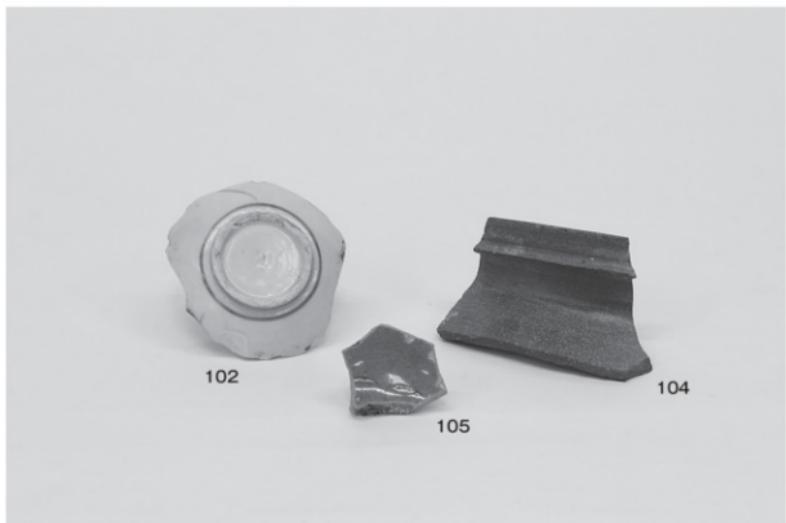


1. KKT2014 - 1 出土遺物（包含層）

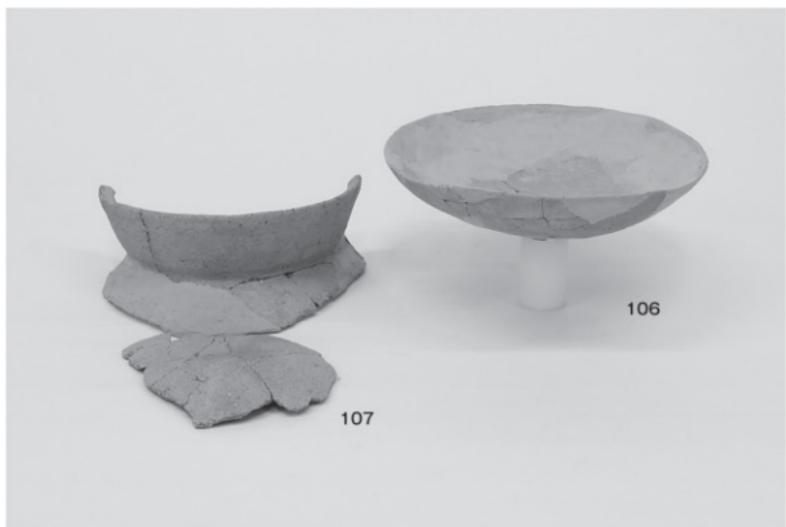


2. KKT2014 - 1 出土遺物（包含層）

写 真 図 版 30



1. KKT2014-1 出土遺物（街道面・沢）



2. KKT2014-1 出土遺物（土坑12）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かみきよたきいせき・きよたきかいどう はっくつちょうさほうこくしょ
書名	上清瀧遺跡・清瀧街道 発掘調査報告書
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第53集
編著者名	村上 始・實盛良彦
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2017(平成29)年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみきよたき いせき 上清瀧遺跡 (KKT1993-1)	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44' 18"	135° 39' 51"	平成5年12月 15日～平成6 年3月19日	1050m ²	河川改修
かみきよたき いせき 上清瀧遺跡 (KKT1998-1)	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44' 18"	135° 39' 52"	平成11年1月 21日～平成11 年2月22日	150m ²	河川改修
かみきよたき いせき 上清瀧遺跡 (KKT1998-2)	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44' 17"	135° 39' 53"	平成11年3月 10日～平成11 年4月2日	277m ²	河川改修
かみきよたき いせき 上清瀧遺跡 (KKT1999-1)	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44' 17"	135° 39' 54"	平成12年1月 24日～平成12 年2月29日	450m ²	河川改修
かみきよたき いせき 上清瀧遺跡 (KKT2007-1)	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44' 15"	135° 39' 57"	平成19年6月 25日～平成19 年7月6日	152m ²	河川改修
かみきよたきいせ き・きよたきかい どう 上清瀧遺跡 ・清瀧街道 (KKT2014-1)	しじょうなわてし おおあざきよたき 四條畷市 大字清瀧	272299	34° 44' 12"	135° 40' 07"	平成26年11月 4日～平成27 年1月14日	220m ²	河川改修

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上清滝遺跡 (KKT1993-1)	集落跡 ・街道	中世、近世	街道、河川、 谷状遺構、池	縄文土器、土師器、 瓦質土器、陶磁器、 瓦、人形、石仏	中世の旧清滝街道を 検出
上清滝遺跡 (KKT1998-1)	集落跡 ・街道	中世、近世	街道、 谷状遺構	土師器、陶磁器、 土製品、銅鏡	旧清滝街道を検出 和鏡を用いた巨石祭祀
上清滝遺跡 (KKT1998-2)	集落跡 ・街道	中世、近世	街道、 谷状遺構	土師器、須恵器、 瓦質土器、陶磁器、 瓦、土製品、石製品、銅錢	旧清滝街道を検出
上清滝遺跡 (KKT1999-1)	集落跡 ・街道	中世、近世	街道、河川、 大溝、井戸	土師器、須恵器、 瓦質土器、陶器、 瓦、砾石	旧清滝街道を検出
上清滝遺跡 (KKT2007-1)	集落跡 ・街道	中世、近世	街道、石垣	瓦器、磁器、瓦、 砾石、鉄鎌	旧清滝街道を検出
上清滝遺跡 ・清滝街道 (KKT2014-1)	集落跡 ・街道	古墳時代、 中世、近世	街道、土坑、 沢	縄文土器、土師器、 須恵器、陶磁器、 石製品、銅錢	旧清滝街道を2面検出

四條畷市文化財調査報告 第53集

上清滝遺跡・清滝街道

発掘調査報告書

平成29年（2017）3月24日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町1番1号

印刷 川西軽印刷株式会社